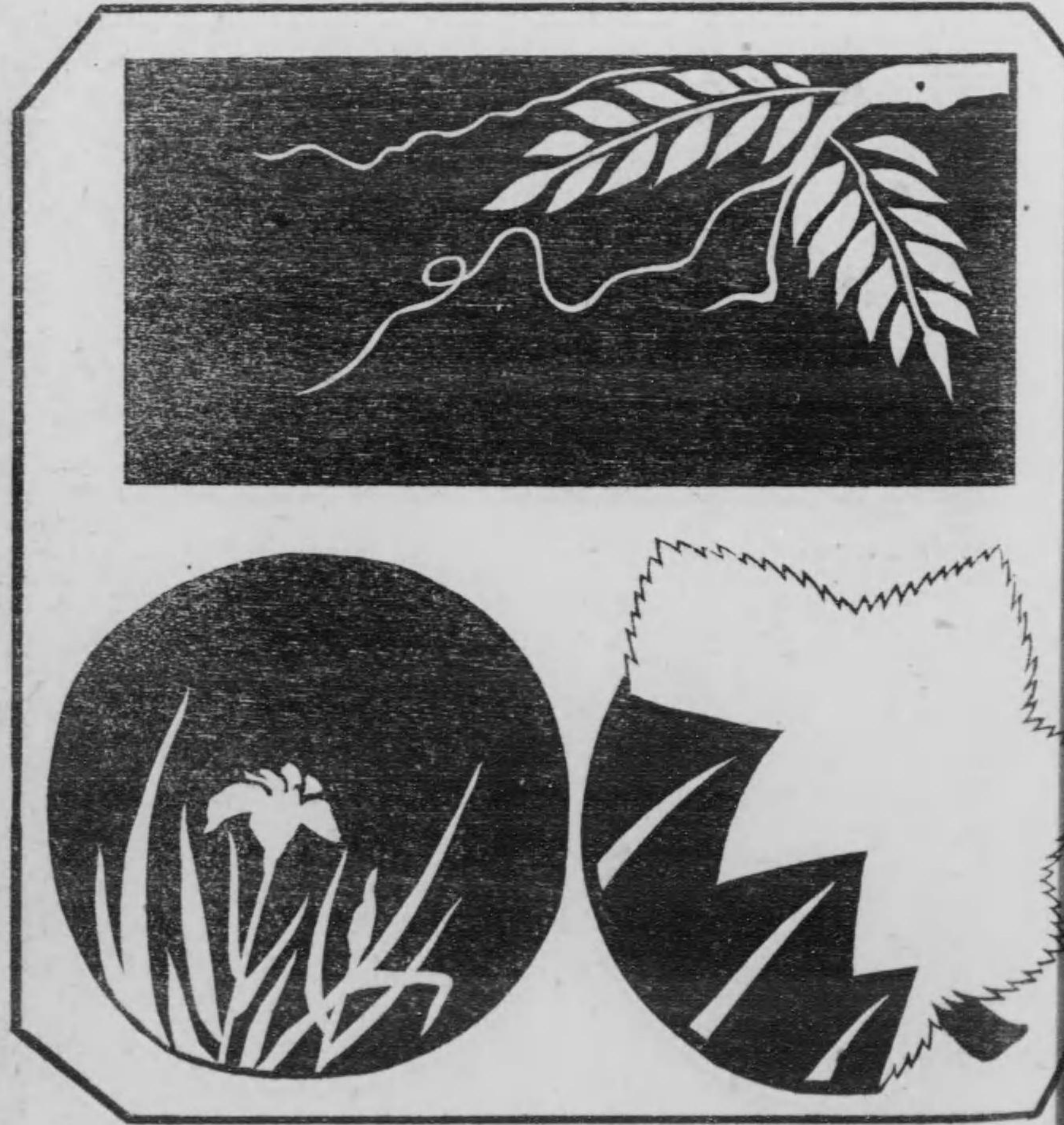


佛事用



向附

小豆羹にて長鶴及び平正の浪を書きて日之出羊羹を流したるなり。

右附

白と青のボカシにて煉切を包みて角形に作りて龜甲をへらにて三角ツナギにして筋を附けべし。

左附

半皮を丸に包みて白の小田巻糸を掛けたる格子掛なり。

向附

白羊羹の中に小豆羹にて藤の葉を書きて後ち全部流せし物なり。

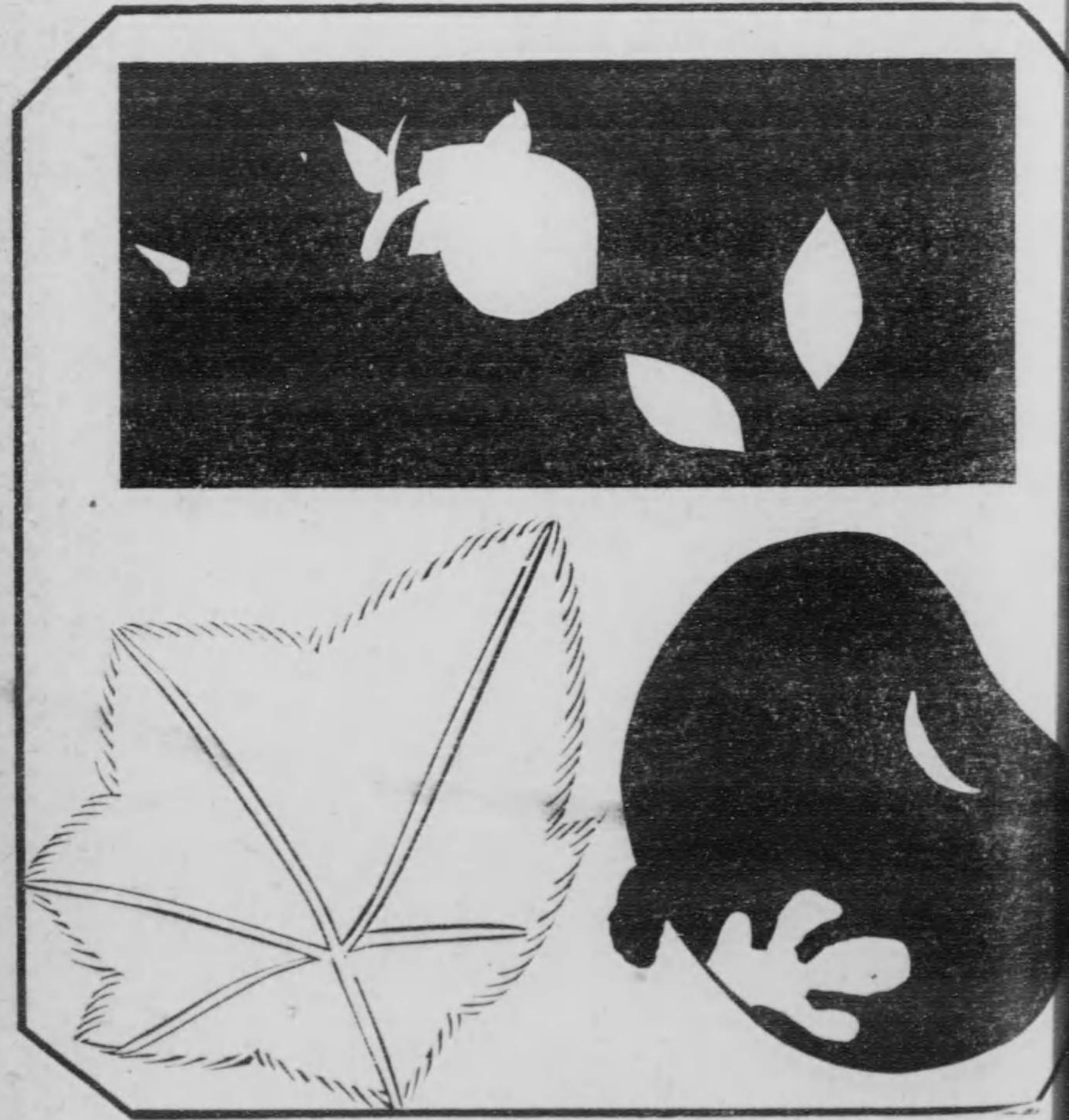
右附

紅の煉切にて紅葉の形を作り下の黒き處は重なりし形なる故黄色となして筋及びギザはヘラにて附けるべし。

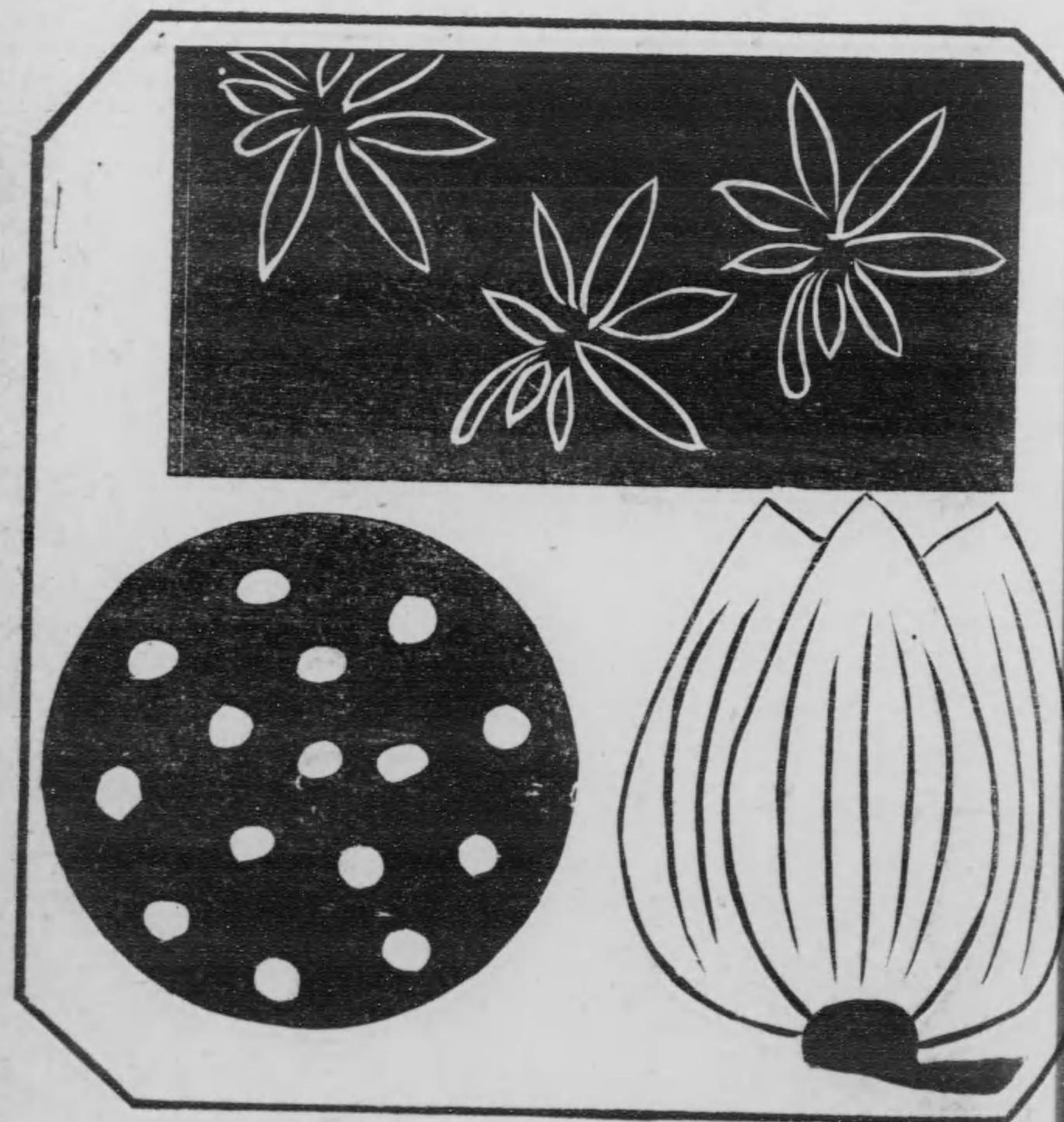
左附

薄茶色の雪平の丸形を包みて其の上に紙形を利用してアヤマの模様を刷り込みたる物なり。

佛事用



佛 事 用



青及び黄のボカシの煉切にて包みて三角定木にて紅葉の形を作り筋及びギザギザはヘラにてつけたるなり。

左 附

紅色の牛肥を包みて横小判の真中へ凹みし物を作りて圍の如く月形に焼き目を附け羊羹の葉を附けて菊の形ちとなすべし。

右 附

金玉の中に柿色の熟せし物の形を作り柿の葉三枚程を善き位地に流し込みたるなり。

向 附

向附

小豆羹の中に白く紅葉を白の煉切にて武力形にて抜きし物を入れて流したるなり。

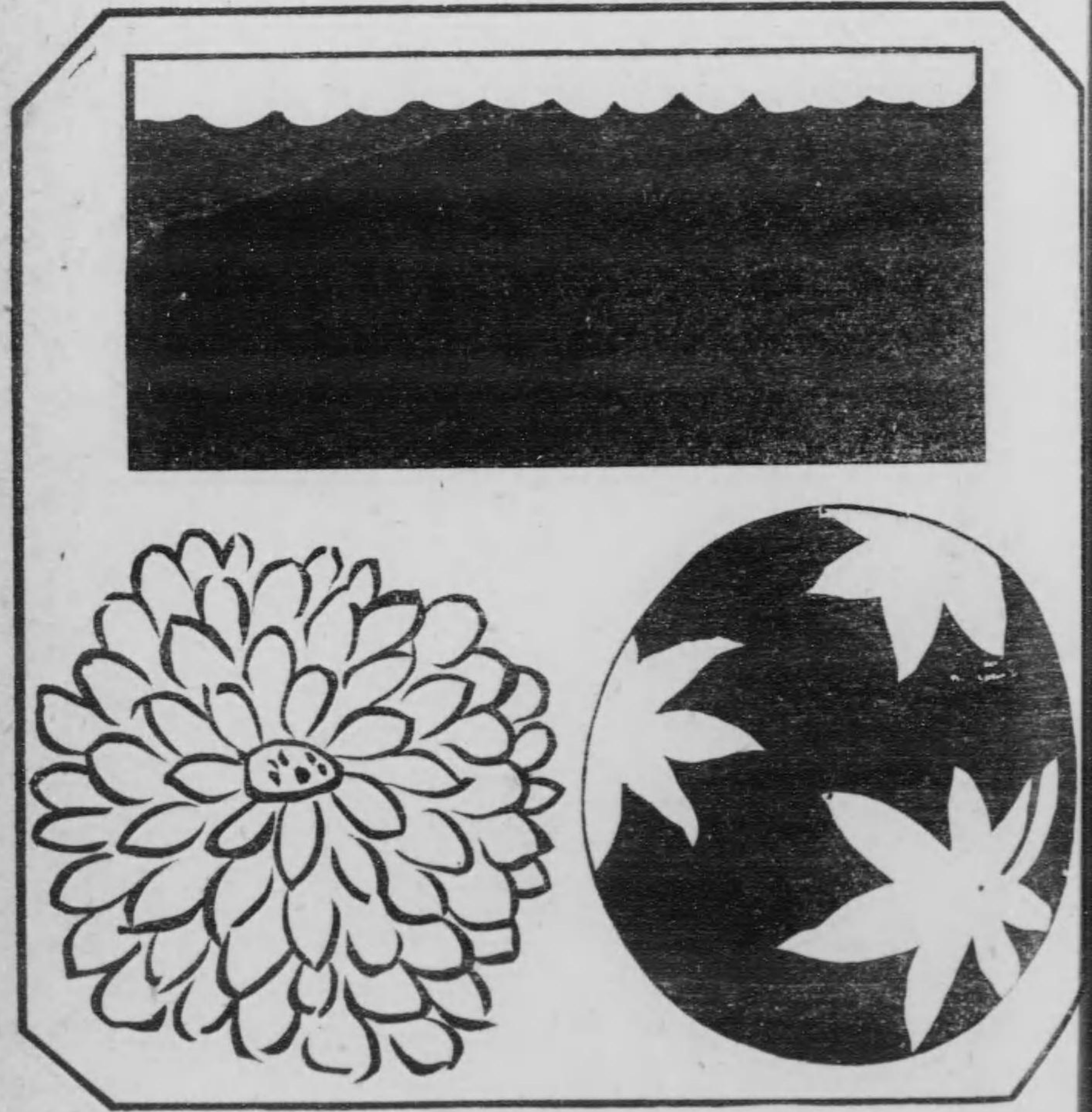
右附

蓮の花は以上の形に紅煉切を以て作り筋はヘラにて附けたるなりヘタは青染め餡にて附けべし。

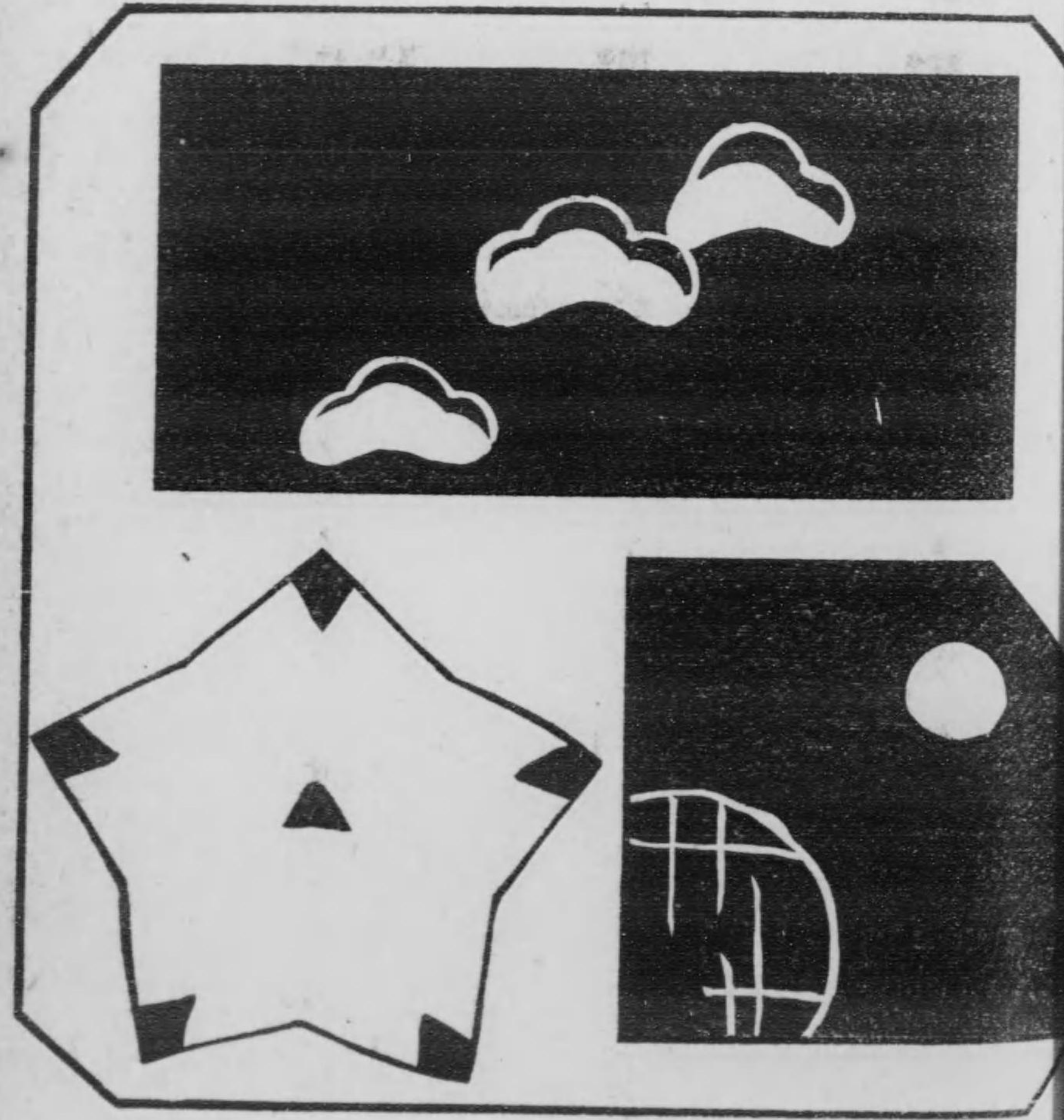
左附

牛肥を丸く包みて是れに挽茶の金團を箸にて植附けて其の中に所々に白を植へて其の白の中に大納豆の煮込を一ツづゝ入れて蓮の實の形となすなり。

佛事用



花 月 雪



向 附

白き所を挽茶羹を流して後全部を白羊羹を流して空の模様を出したるなり

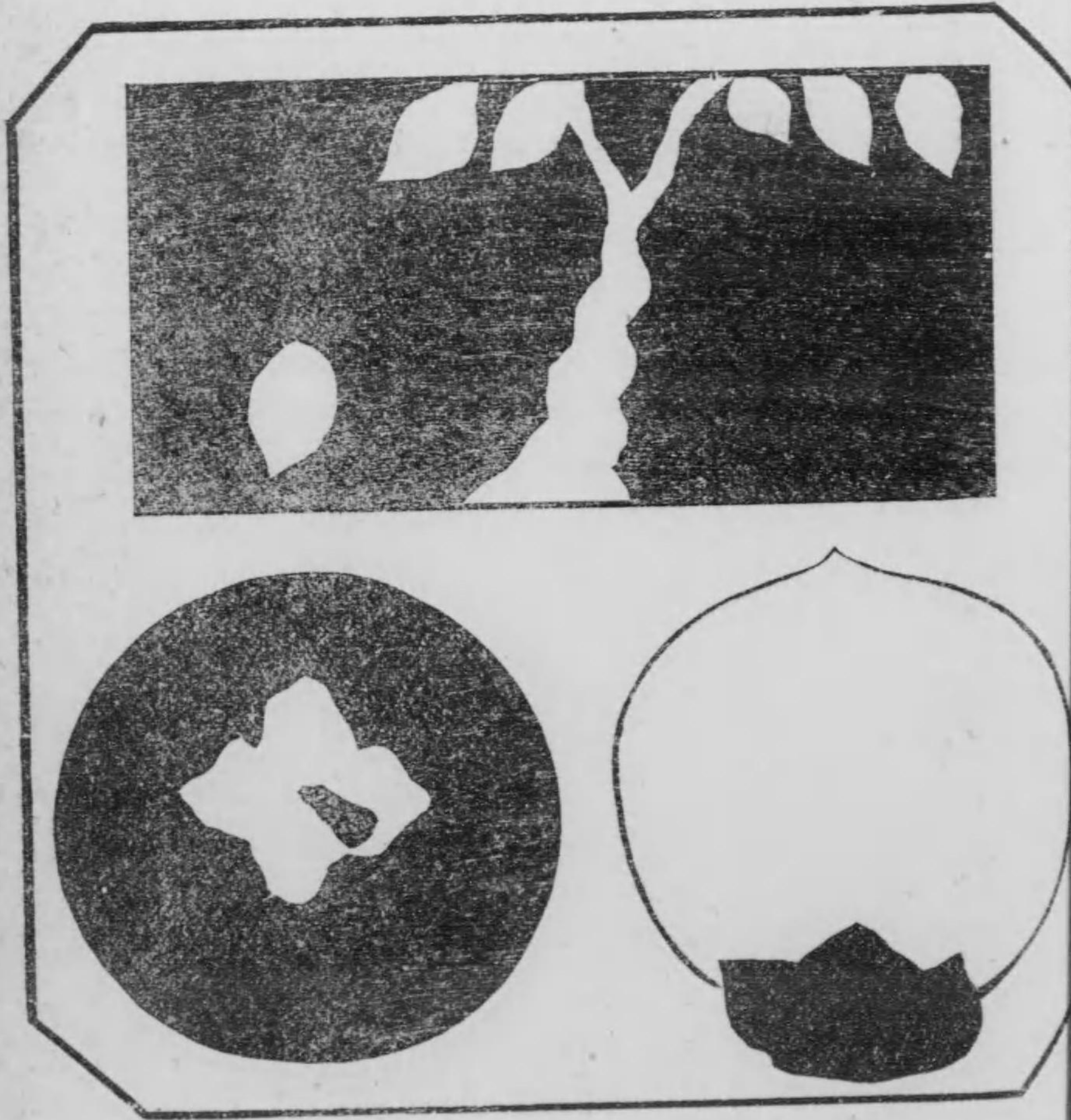
右 盛

薄紅の丸小判の煉切りに色ボカシの紅葉を張り附けて上より白の薯蕷羹を掛けたるなり。

左 盛

菊は黄色と白のボカシ煉切を包みて竹箸にて下より上にハサミ揚げたる物なり。

畑 柿



向 附

金玉の中に松の上に雪の降り掛りし如く青と白の合せたる物を武力形にて抜き取りて入れて流したるなり。

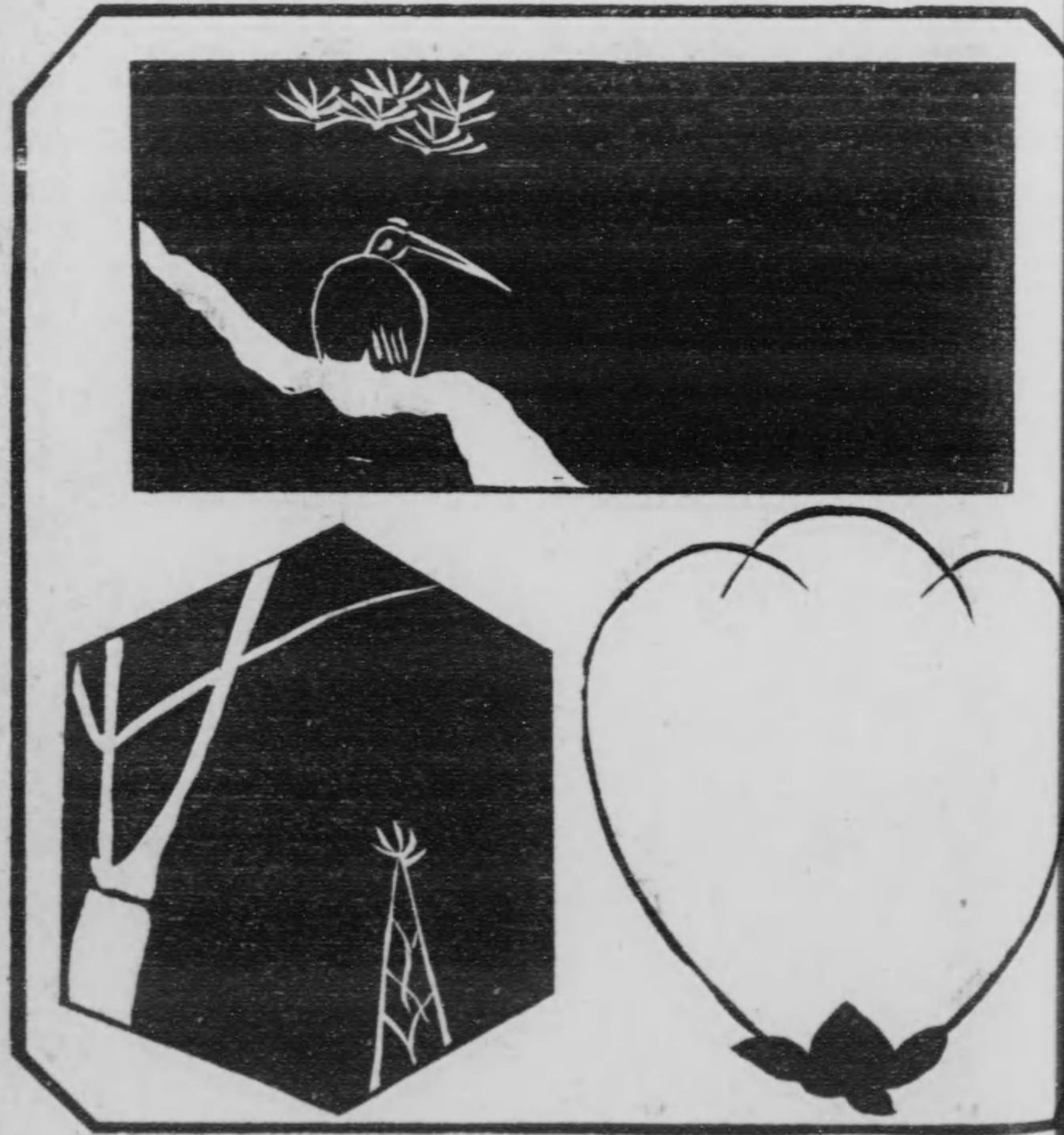
右 盛

小豆餡を岡時雨にて月及びマドは白にて木形を利用して抜き押したる物なり。

左 盛

煉切を薄紅に染めて角櫻の形を手先きと三角定木にて作りたるなり。

祝 事 用



向

附

小豆羹の中に柿の木及び葉は白の煉切りにて作りて入れ流し込みし物なり

右

附

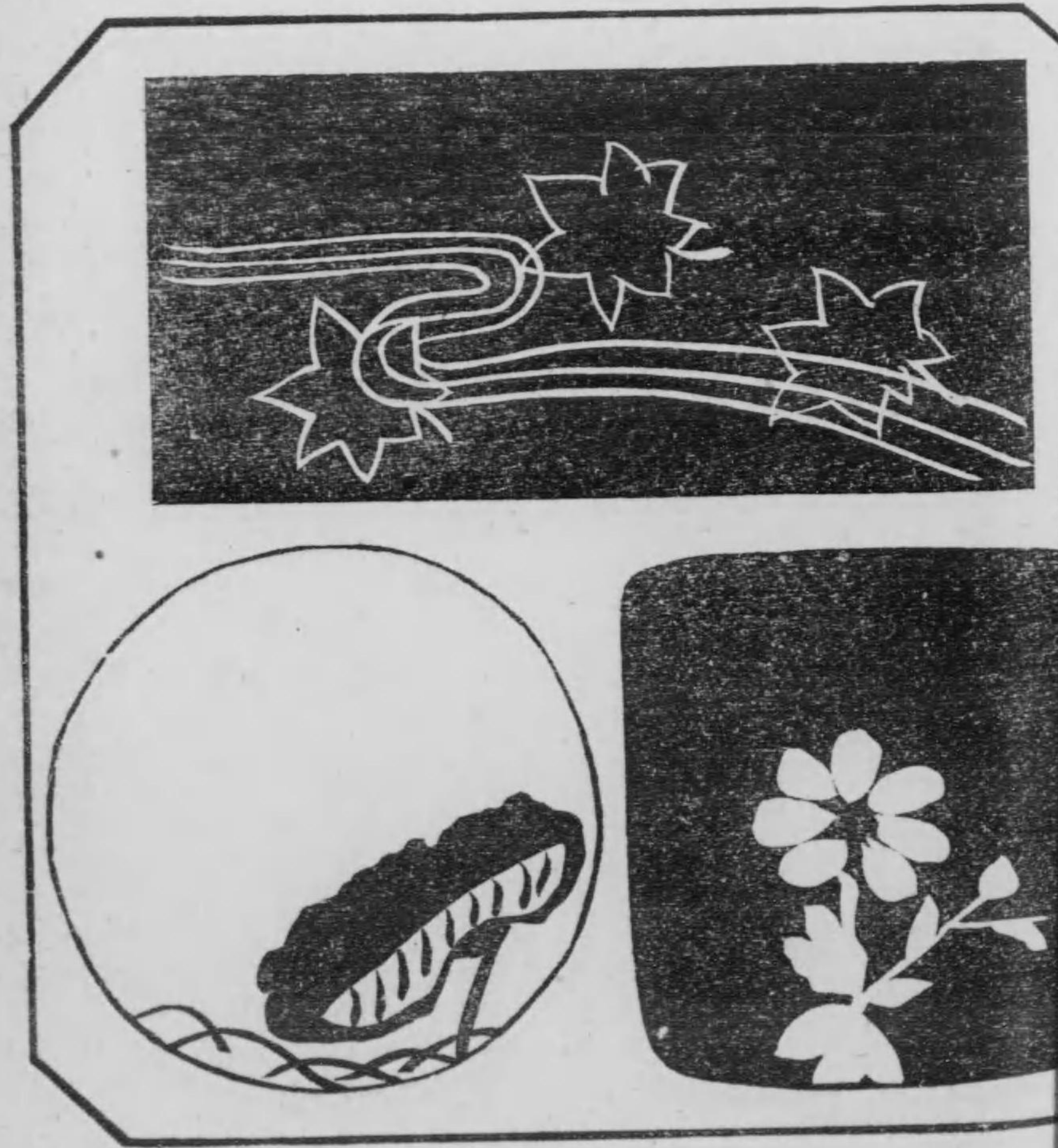
柿は黄と青のボカシにて丸く尖りし形を作り下にヘタを挽茶色にて染餡にて付けるべし。

左

附

柿は黄と赤にて色を混合して熟したる色に染めてヘタはニツケ粉にて染めし餡にて付けたるなり。

佛 事 用



黄色きいろの煉切ねりきりを龜甲形きかかたに取りて竹たけの拵はぢを押おして竹たけの子こをへらにて筋すじを附つけたるなり。

左ひだり 附つけ

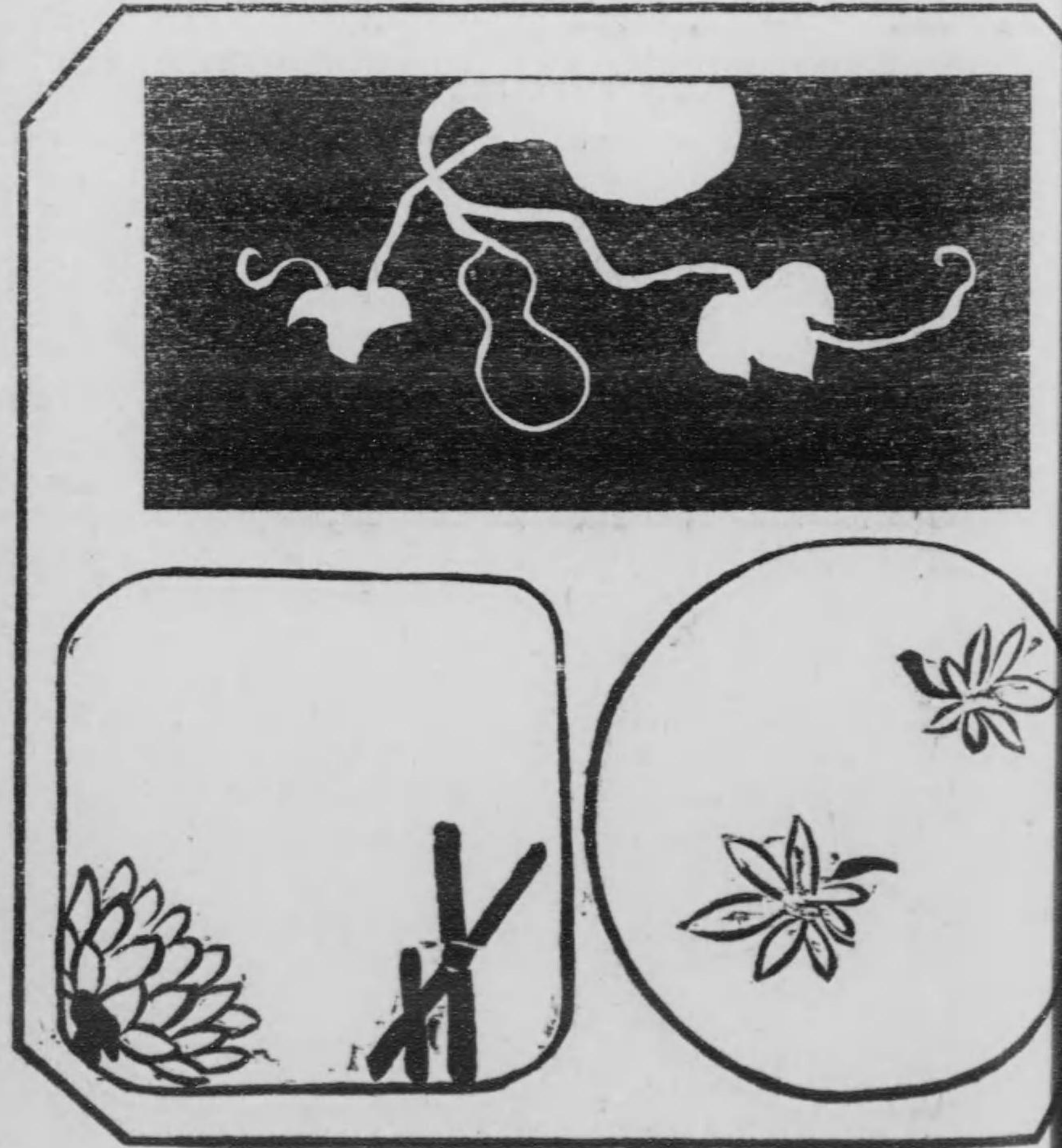
梅うめは薄紅うすべにの白ボカシ煉切ねりきりにてツボミの頭あたまの所ところを針金はりがねを輪わにして筋すじを附つけてへタの所ところは青箔あおちんにて附つけたるなり。

右みぎ 附つけ

松まつを小豆羹あづきかんにて書かきて鶴つるを白しろの煉切ねりきりにて作りて挽茶羹ひきちかん一分程ぶほどなが流ながせし所ところに入いれて冷ひへたる時ときを以もつて全部ぜんぶ流ながすべし。

向むかひ 附つけ

秋 中



黄色の煉切を丸形に包みて蓮の葉を青にて張り附けて指にて平らに押し
水池はヘラにて筋を附けべし。

左 盛り

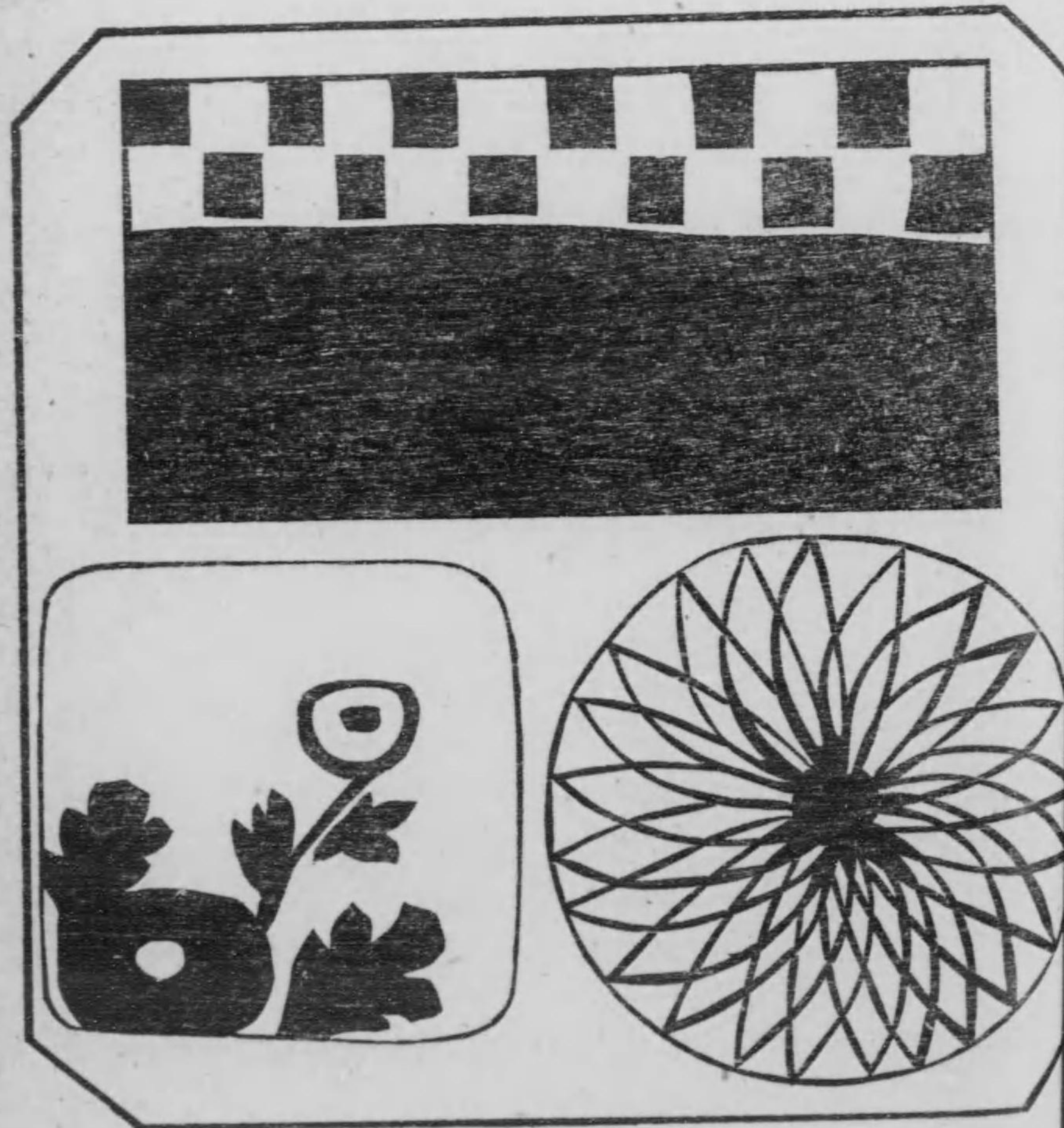
挽茶館の岡時雨にて葉を白にて花は大納豆の煮込をナラべて花となして押
したるなり。

右 盛り

金玉を一分程流して紅葉を彩りし物武力形にて抜きし物を入れて後白の
衛生羹を流したるなり水は小豆羹にて書きしなり。

向 附

菊の庭



向附

白羊羹の中に小豆羹にて瓢を書きて流したる物なり。

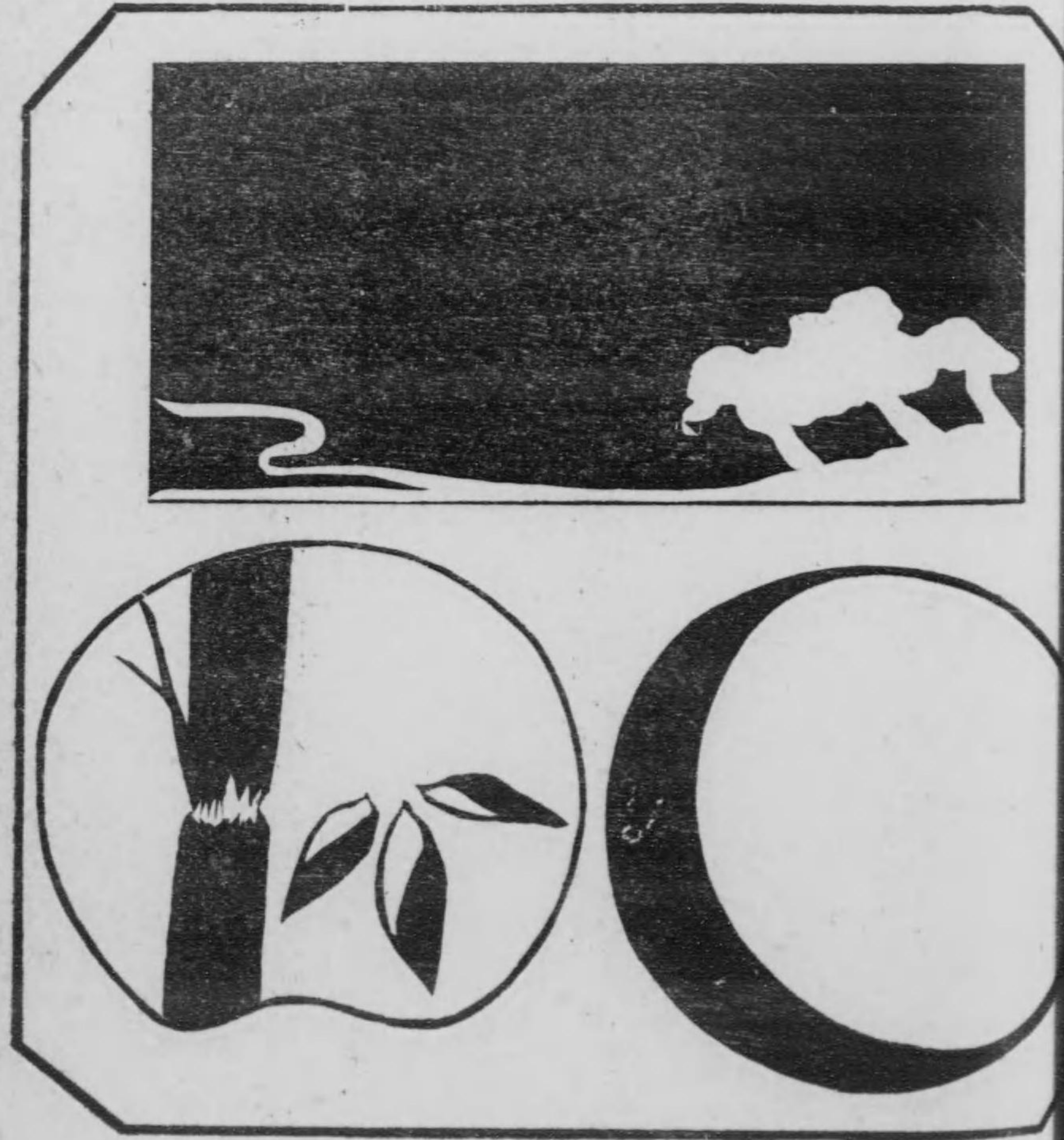
右盛

牛肥を包みて挽茶色の金團を箸にて植へて其の上に黄赤青の三色ボカシの煉切を伸して武力形にて抜きて上置きとなしたるなり。

左盛

薄紅の煉切を包みて角形に作りて垣をヘラにて押して花を棒にて形を作りて押したるなり。

花 雪 月



向 附

青白の市松の合せ菱にして家根は白の羊羹を角に切りてナラべて其の上に
青羊羹を流したるなり。

右 附

白赤包みボカシの丸形に包み上げてヘラにて圖の如く輪に筋を附けて菊の
形となす。

左 附

白臺の岡時雨にて菊の模様を小豆餡にて抜き出したるなり。

向附

遠見の櫻にて青臺の岡時雨にて花は紅水は白にて木形利用にて抜き出したる物なり。

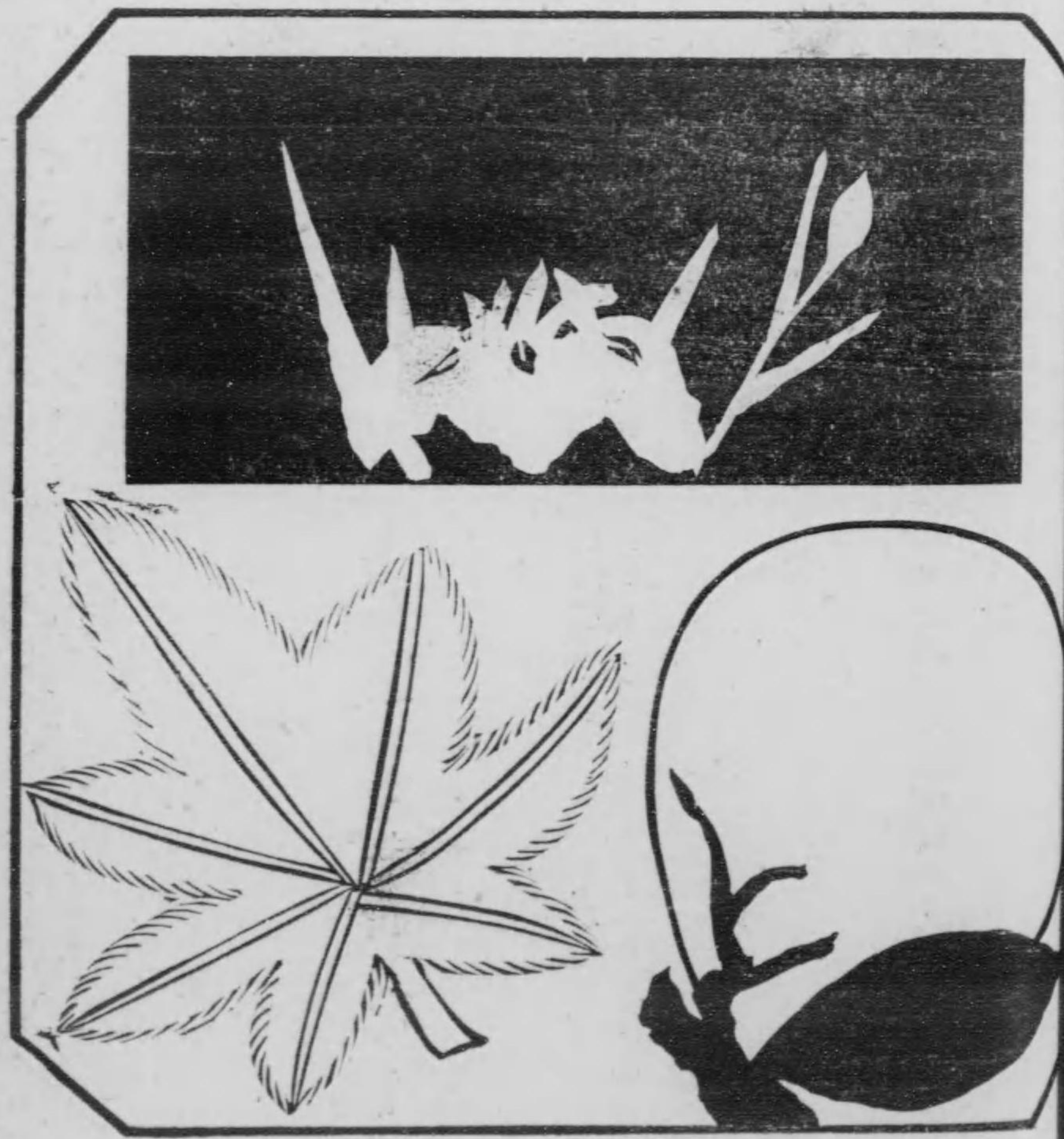
右附

月は黄色の雪平にて丸形に包みて半月に砂糖蜜を引きて粉砂糖を掛けたるなり。

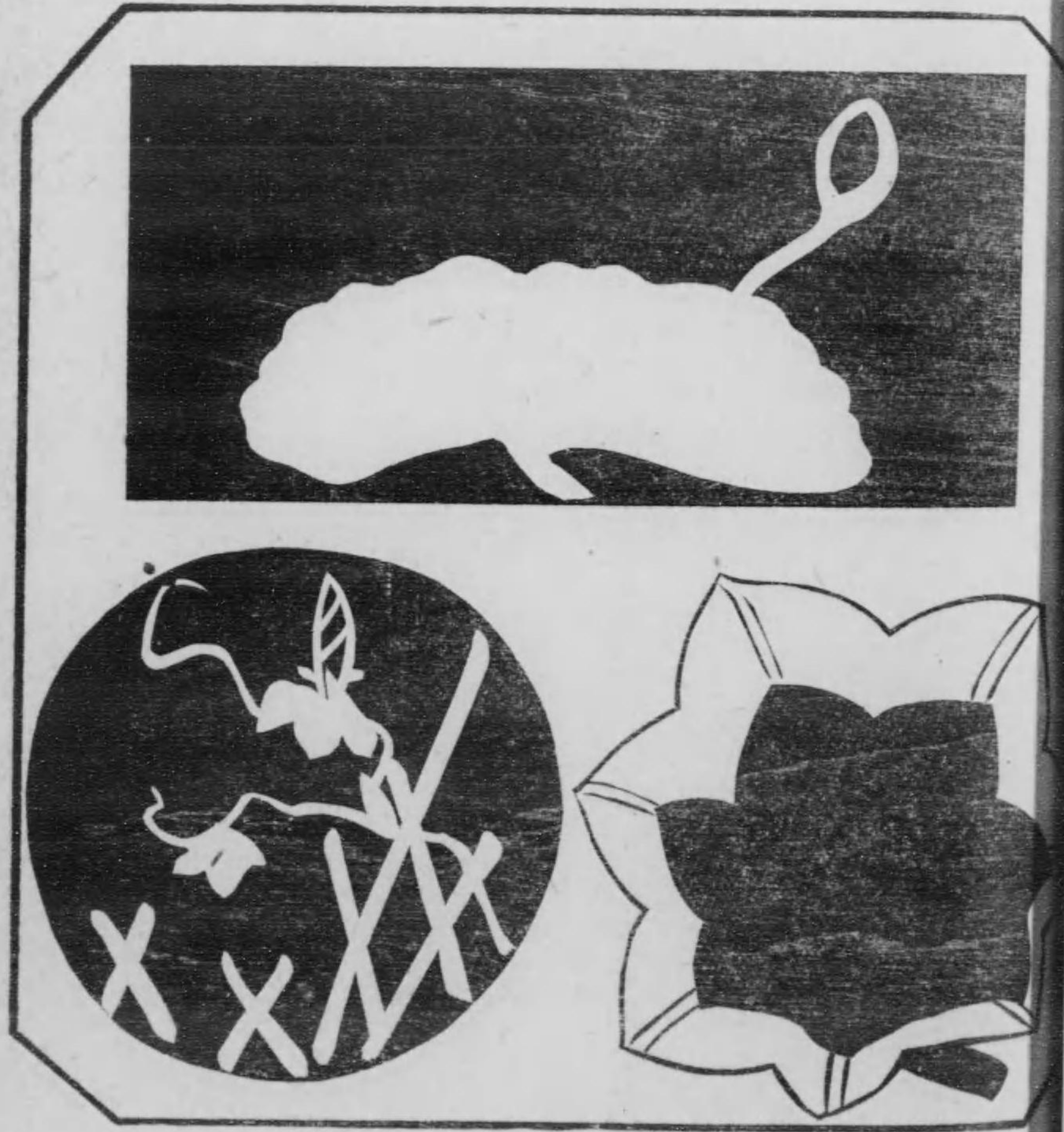
左附

薄紅の煉切を團扇形に作りて竹にニツケを附けて押し笹は白と青のボカシの雪の降り掛りし所を見せたる物を煉切にて指先きにて押し刷り込みたるなり。

季節節用



季 節 用



向 附

小豆臺の岡時雨にて白にてアヤメ模様を木形利用にて抜き出したるなり。

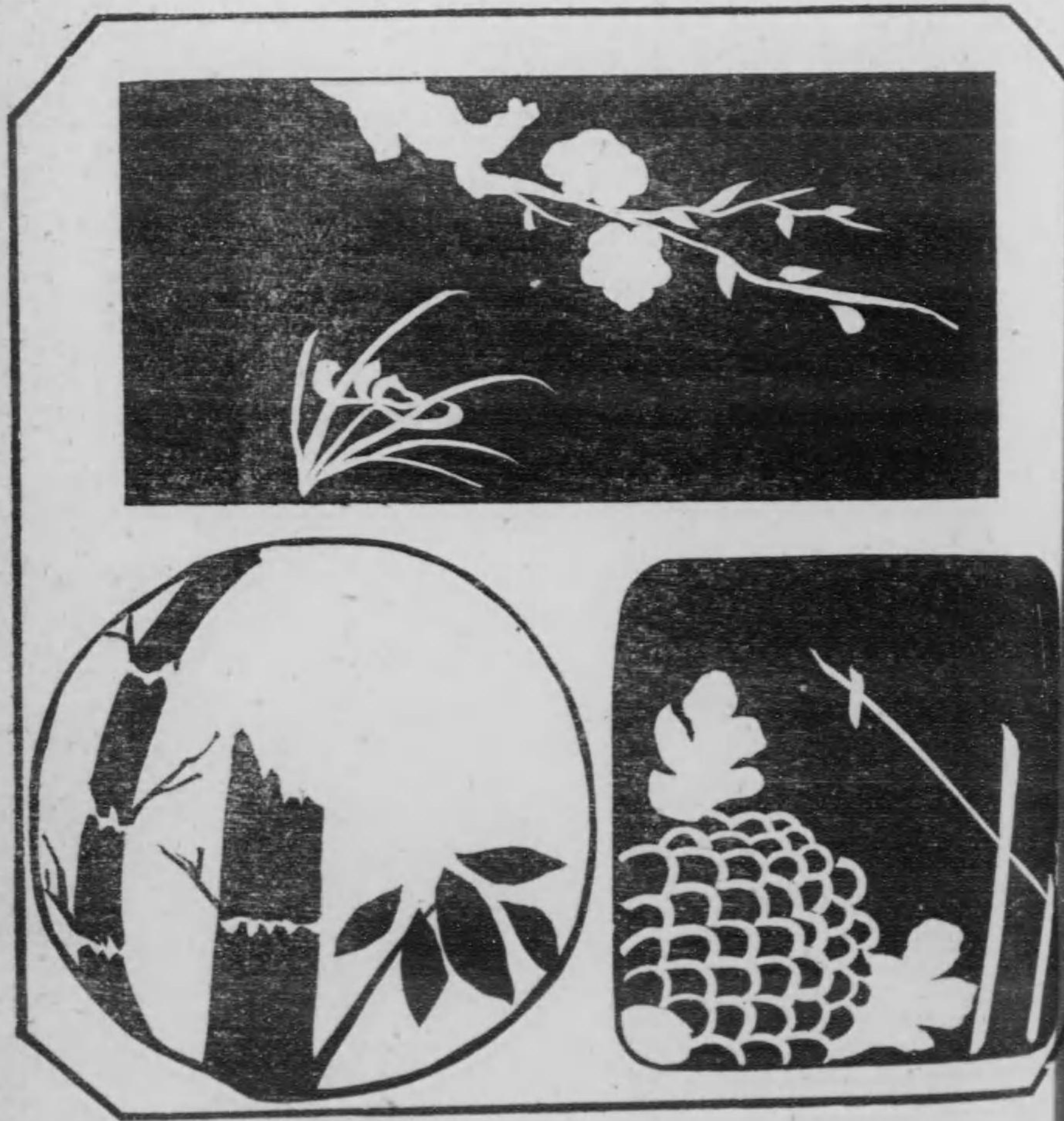
右 附

薄紅の椿の花の一花にて枝をニツケ粉染餡にて付け葉を挽茶餡にて付けたるなり。

左 附

紅葉は挽茶煉切にて圖の如き形を作り筋及びギザギザはヘラにて付けたる物なり。

子 君 四



向 附

黄色の岡時雨にて蓮葉を挽茶にてツボミを白にて抜き出したるなり木形利用。

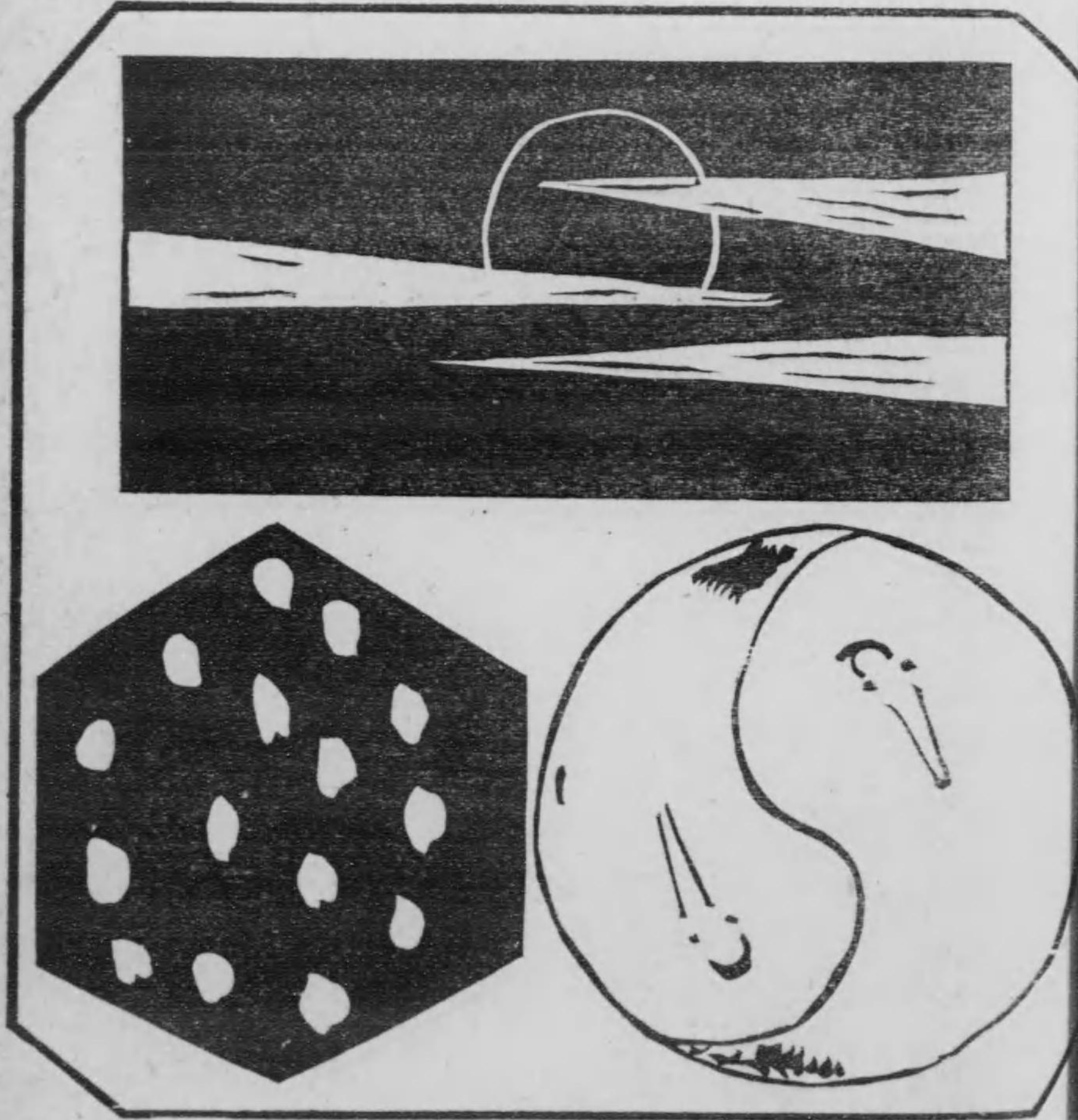
右 附

薄紅の煉切にて紅葉の形を作りて真中に重紅葉とする爲青葉ボカシの武力形抜きを張りて平らに指にて押して筋はヘラにて付けたるなり。

左 附

白の煉切を丸形に包みて上に朝顔のツボミ葉を箔を染めて張り付けてフルイに押し付けて後ちヘラにて垣根の形を押したる物なるべし。

龜鶴出之日



黄色の煉切を丸形に包みて平らにし其の上に型紙を利用し竹の形を挽茶にて刷り込みたるなり。

左 附

薄紅の煉切を角形に作りて垣をへらにて押し葉は青餡を指にて押し込み菊の花を筆のジクにて半月を重ねし如く押し上げるなり。

右 附

梅を小豆羹にて舟に絞り出しにて書きランを白の煉切にて作りて入れて金玉を全部流したるなり。

向 附

季 節 用



向 附

黄味色岡時雨にて木形を利用して日の出を赤箔にて霞を白にて抜き押しとすべし。

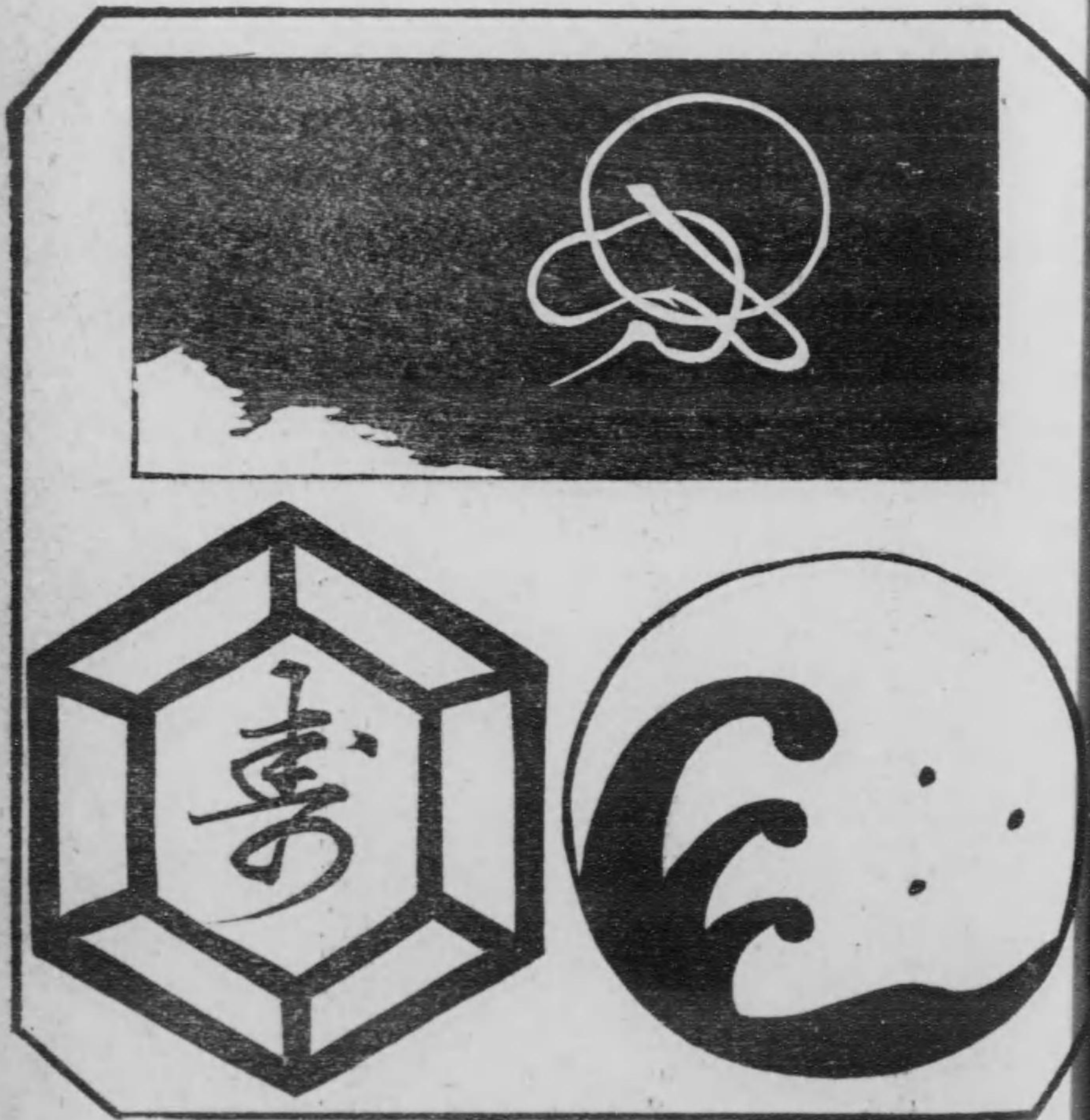
右 盛

白の薯蕷煉切にて丸形に包み上げてマガ玉鶴の形の筋は針金を利用して焼目にて仕上すべし。

左 盛

龜甲は小豆煉切の中に大納豆の煮込を入れて能く混和したる物にて形を作りしなり。

祝 之 司



向 附

白の圖の所は小豆羹にて黒の所は白の薯蕷羹にて流し合せて冷えたる時舟より出して型紙を利用して鹿の形をニツケ粉にてボカすなり。

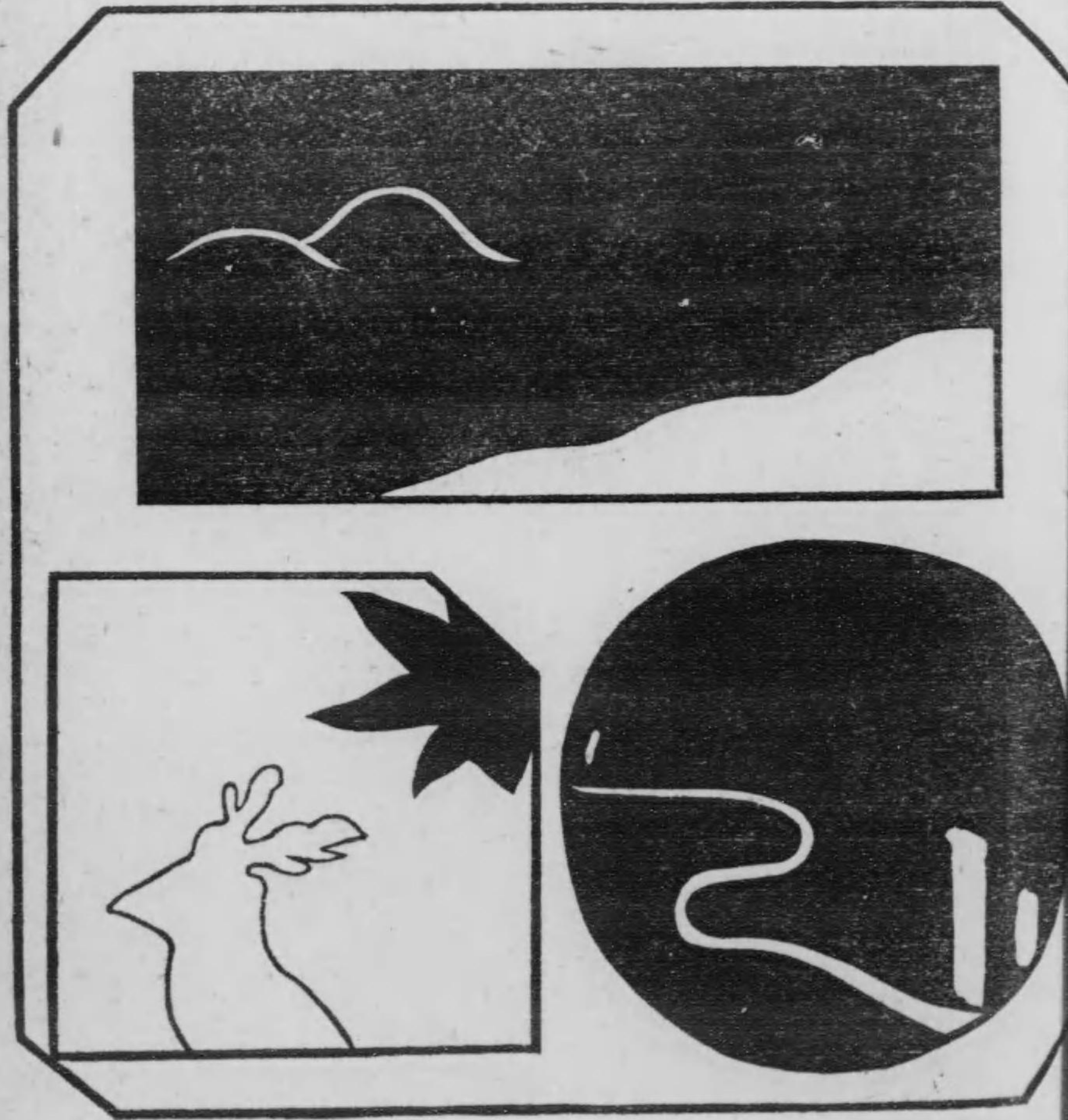
右 附

薄紅の牛肥を小判丸に包みて型紙を利用して桔梗を見せたるなり。

左 附

小豆の煉切を以て圖の如き形を作りて水の流れを白餡にて刷り込みたるなり。

山の秋晩



向附

白しろき所ところを小豆羹せうづかんにして挽茶羹ひきちやかんを流ながして日ひ之出のでは紅煉切長鶴べにねりきりながつるを白煉切しろねりきりにて作つくりて入いれて羊羹やうかんの表おもてに出だしたる物ものなり。

右盛

紅臺べにだいの牛肥ぎゅうひを丸形まるがたに包つみて浪なみは白餡しろあんのソボロを箸はしにて植うえ込こみたるなり。

左盛

白しろの煉切ねりきりの龜甲形きつががたに作つくりて筋すぢをへらにて付つけて壽ことぶきの字じを小豆羹せうづかんにて絞しぼり出だして書かきたる物ものなり。

新 年 用



向 附

遠見の山及び手元の山は小豆羹にて書きて挽茶羊羹を全部流したるなり。

右 盛

薄紅の煉切餡にて丸形に包みて流れを白にて押し刷りとして杭をヘラにて押すなり。

左 盛

白臺の岡時雨にて鹿をニツケ色紅葉を青の餡にて木形利用にて抜き出したるなり。

向附

紅羊羹の中にユズリ葉を二枚青の煉切にて作りて流し込みたるなり。

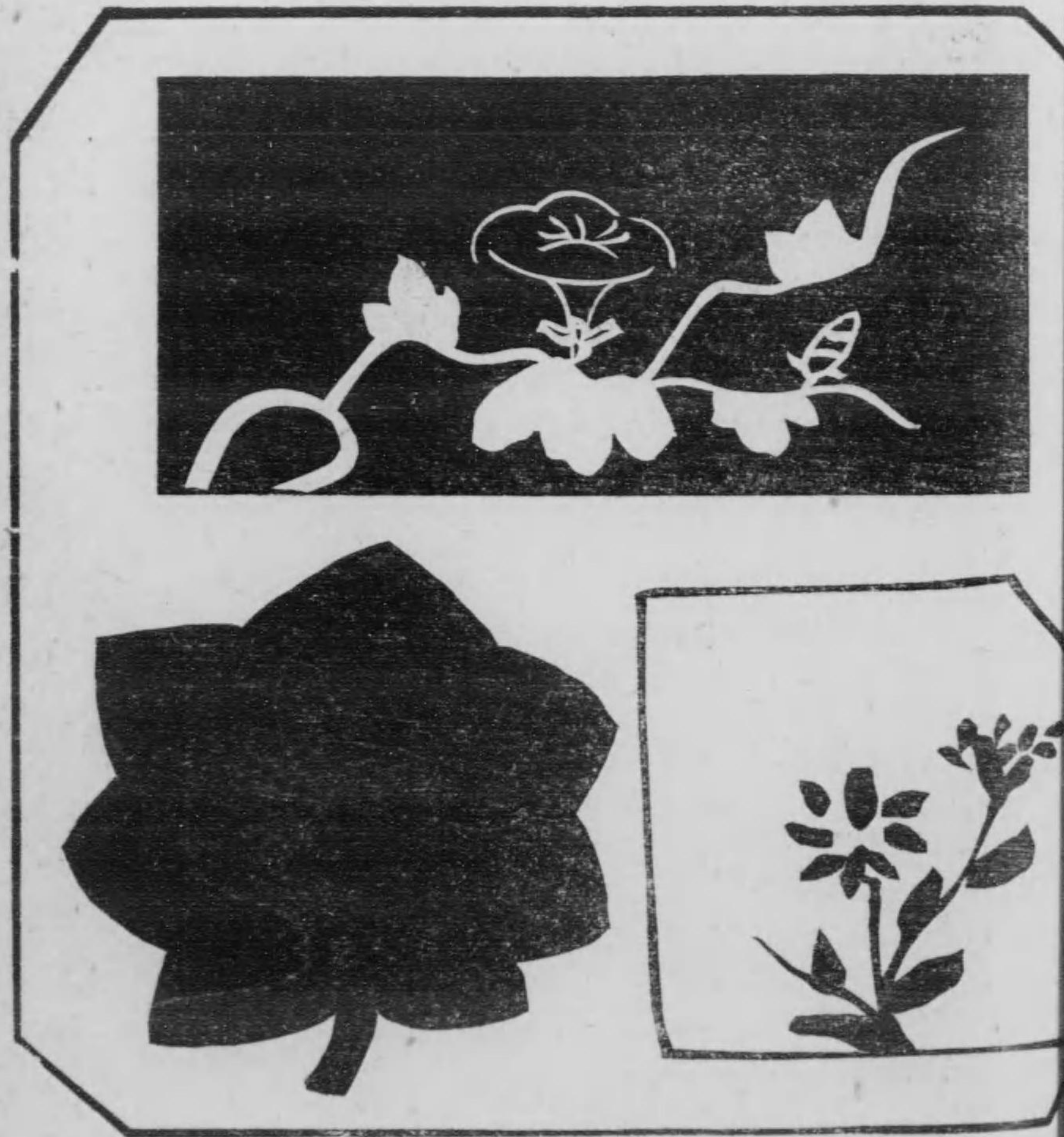
右附

白の煉切を以て丸形に包み上げてタイコの模様は型紙を利用してニツケ粉にてハタキボカシとしたるなり。

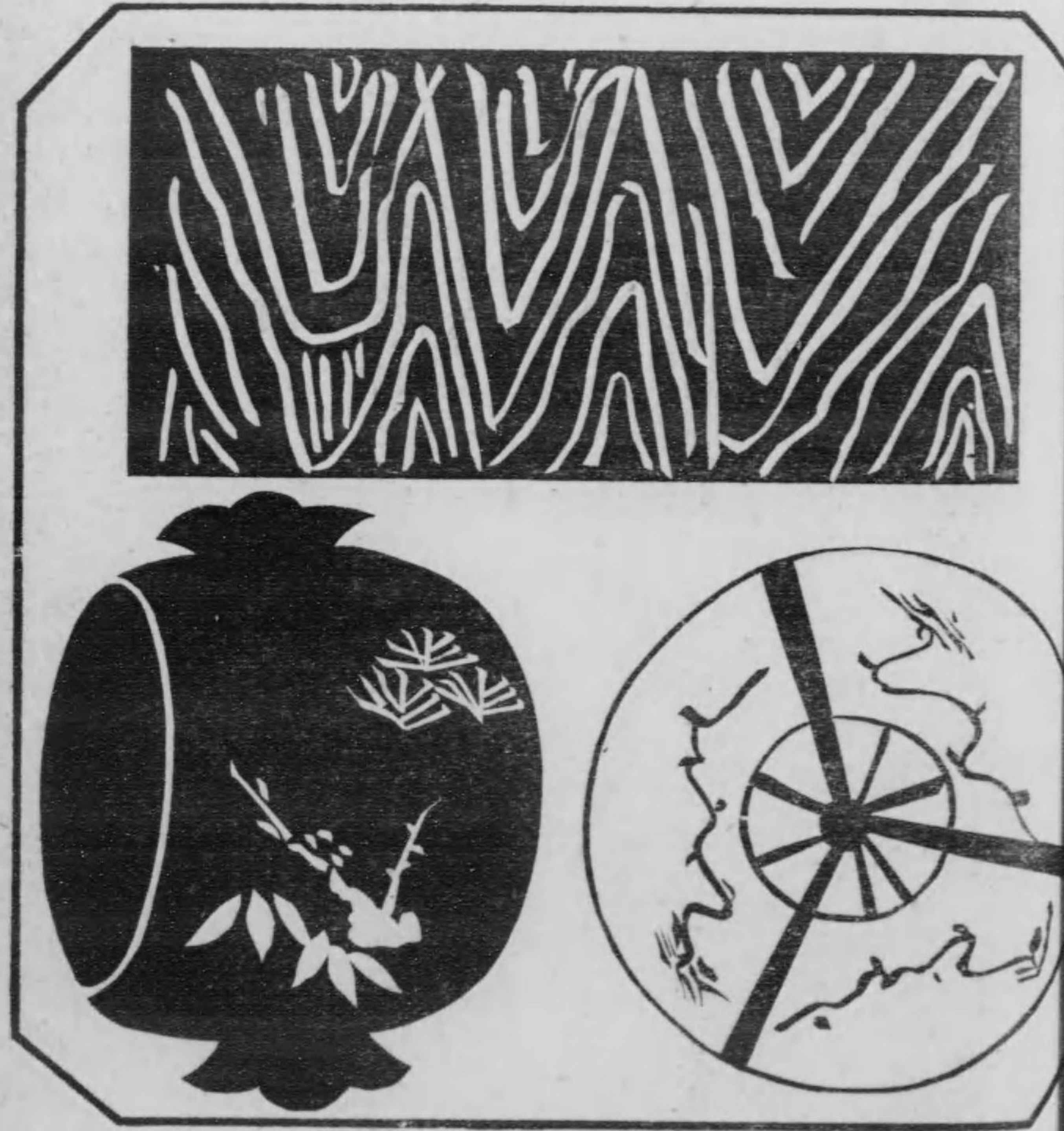
左附

小豆餡煉切を包みて角形に作りてコウモリの押捧形を以て白にて押し付けたるなり。

佛事用



用 祝 築 建



牛肥を包みて紅葉の形を作りて紅のソボロを付けて仕上たるなり。

左 盛

菊は岡時雨にて黄色餡を臺にして白を以て模様を抜き出したるなり。

右 盛

朝顔を煉切にて作り置きて後ち金玉を流して其の中に入れて冷えたる時を以て全部を流したるなり。

向 附

向附

白羊羹臺にて小豆羹を絞り出しにて山形圖の如く書き流して其の中に白を全部流して木目を作るなり。

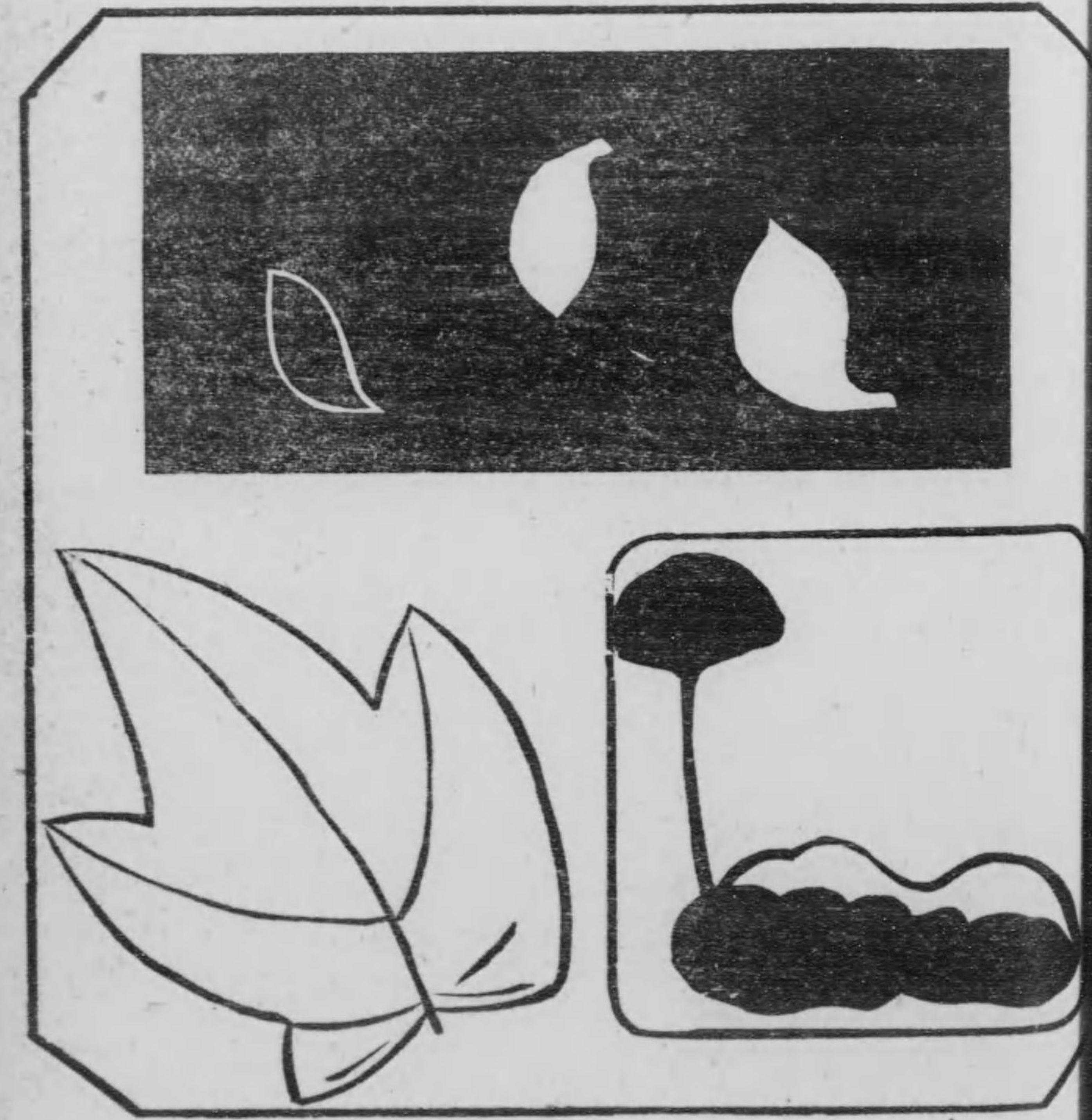
右盛

三本の扇を開き合せし所故筋を型紙を利用してニツケ紛を付け龍は形紙を利用して挽茶にて出したるなり。

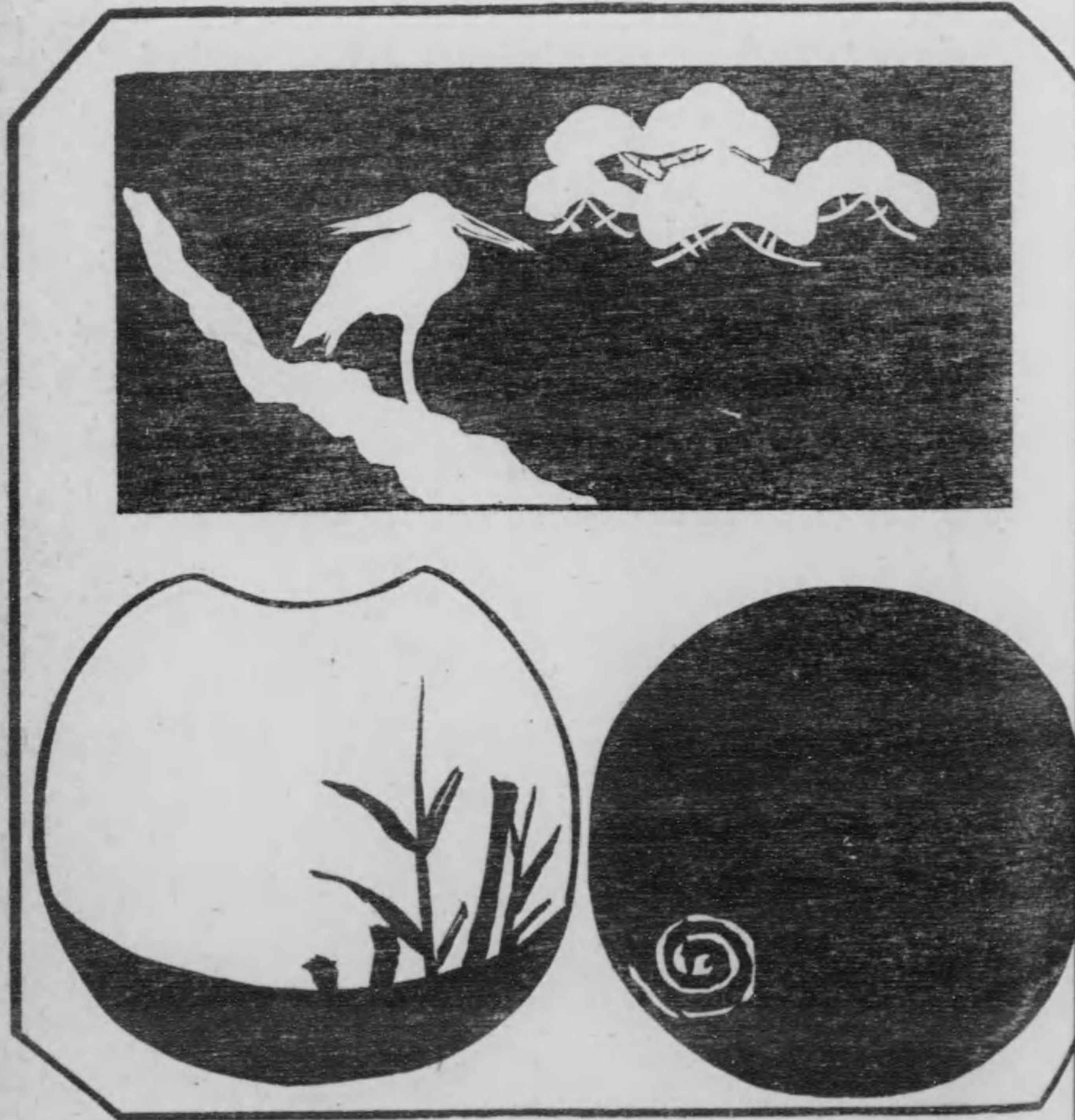
左盛

古槌は薄紅臺にして形を作り松竹梅の模様はヘラにて細工すべし。

佛事用



會 席 用



向 附

小豆羹の中に白の蓮の花ピラをチラして入れて流したるなり。

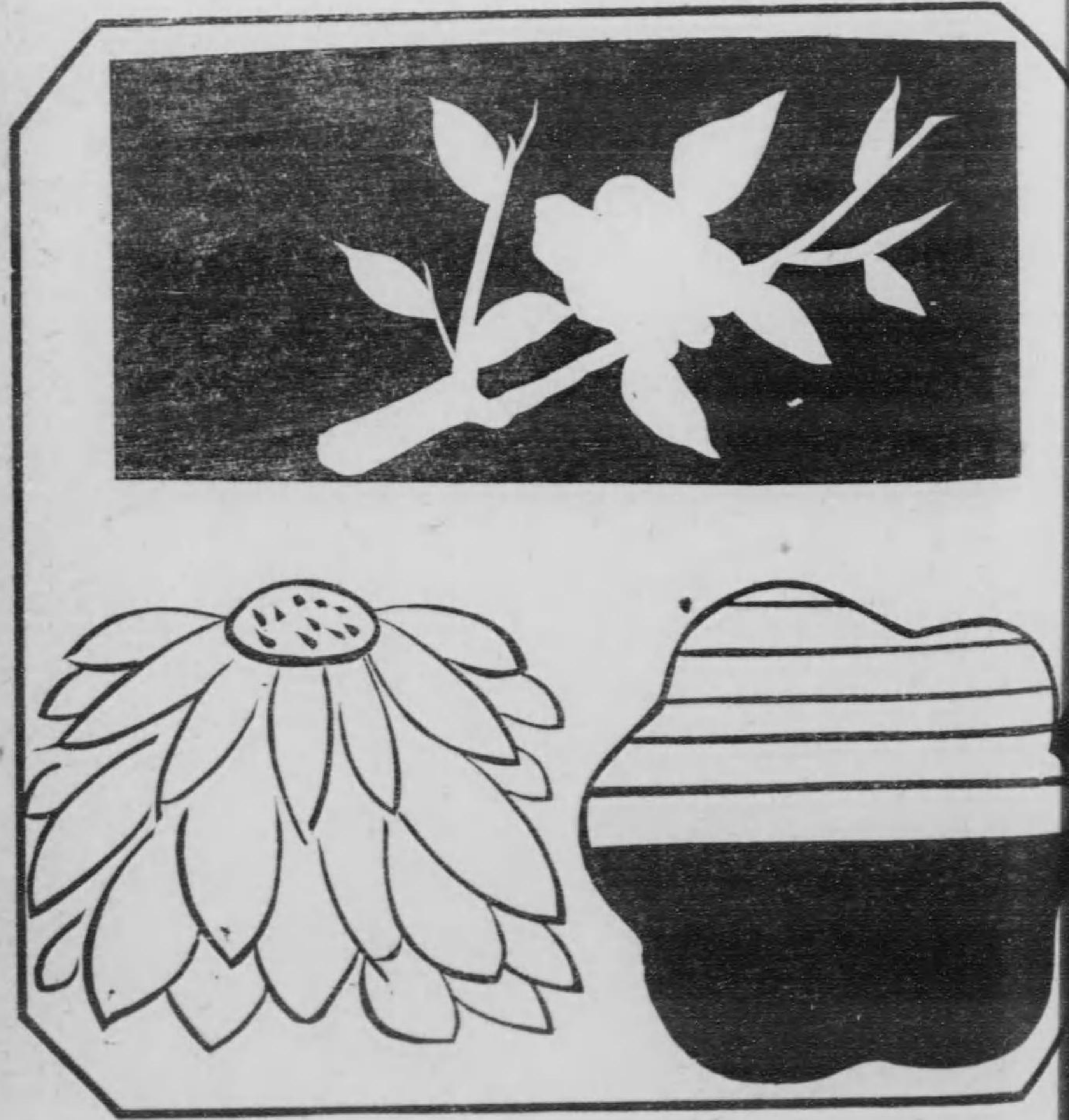
右 盛

薄茶色にて蓮の葉を黄臺の上に張りて指にて押してフルイにて押したるなり。

左 盛

亦に黄をボカシて煉切を包みて紅葉の形を作りて筋をヘラにて付けたる事

佛 事 用



向 附

松の葉及び木は小豆羹にて書きて鷲は白の煉切にて作りて入れ挽茶羊羹を流したるなり。

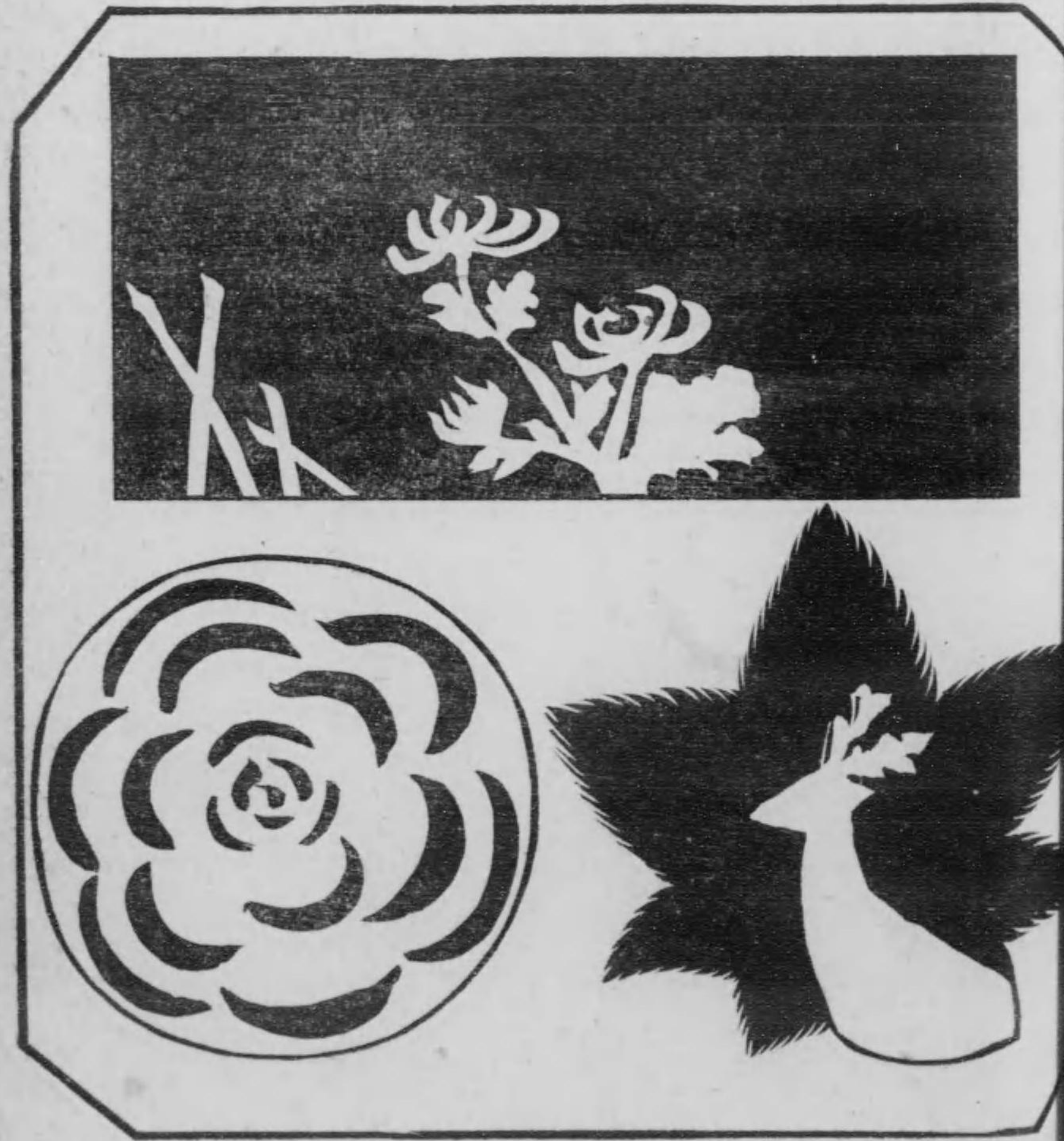
右 盛

紅の牛皮を包みて丸型にして其の下の隅に型紙にてウズ巻の形を青色にて出したるなり。

左 盛

白の煉切を上向き團扇形に作りて葦を紙型利用にて刷り込みてクイはヘラにて押したる物なり。

ひ 思 の 夏 初



向 附

椿の枝を小豆羹にて書きて花を白の煉切にて作りて入れて黄色の羊羹を流したるなり。

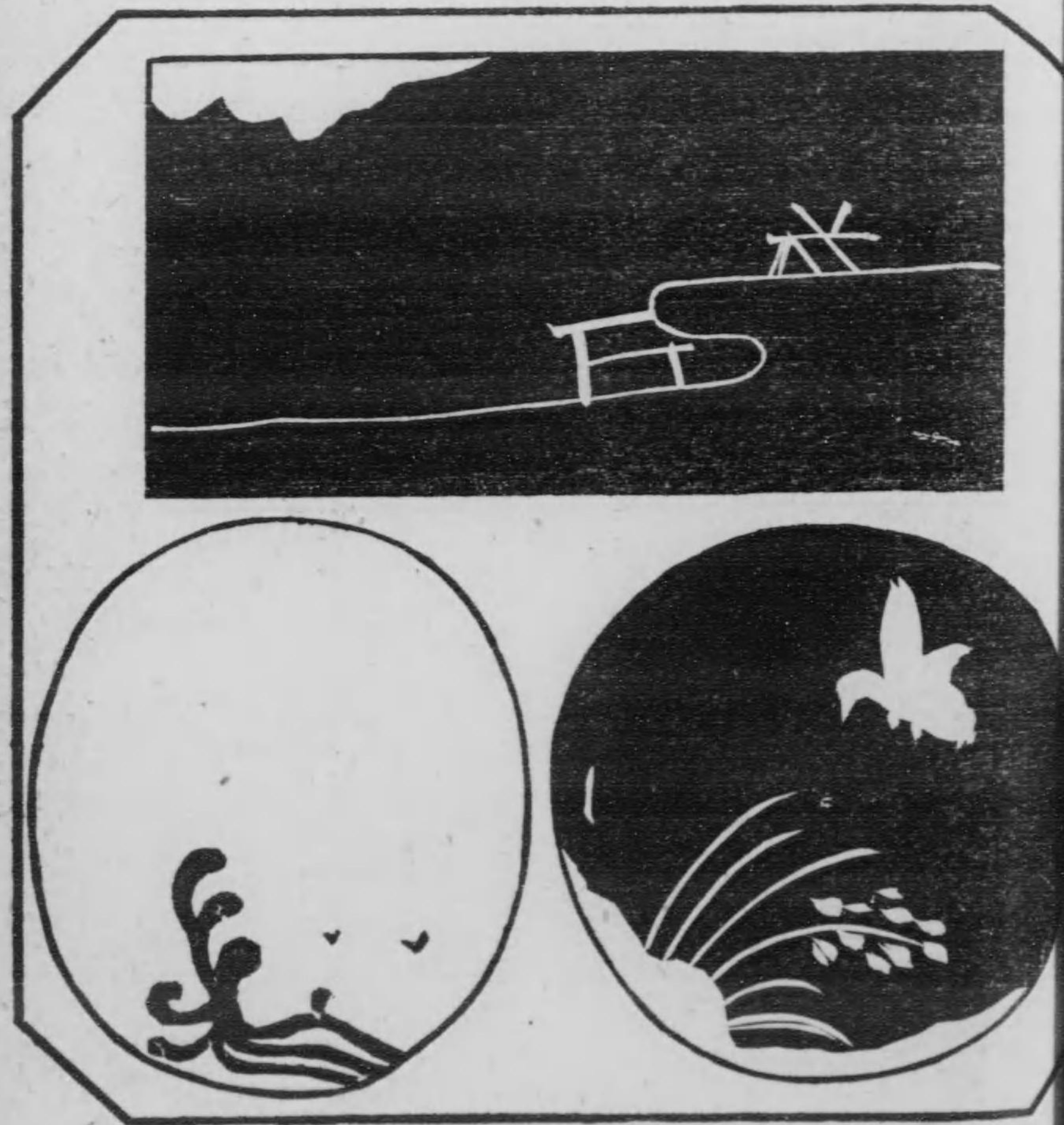
右 盛

光琳式紅葉にして青と赤のボカシにて包みて圖の如き形を手先きにて作るなり。

左 盛

薄紅の煉切を包みて上より下に下げてハサミにて切り下げたる事。

神 事 用



向 附

菊を小豆羹にて書きて其の上に白の薯蕷を全部流したるなり。

右 盛

白の煉切にて紅葉形を作りて板に押し付けて平にして其の上に鹿の紙を置きて上より挽茶を降り掛けたるなり。

左 附

白を皮として紅を包みてボカシとなし丸型に包み上げて後三角形にへらにて切り上げてバラの花を見せたるなり。

向附

模様は宮及び島居を小豆羹にて絞り出しにて書きて後ち全部日の出羹を流すなり。

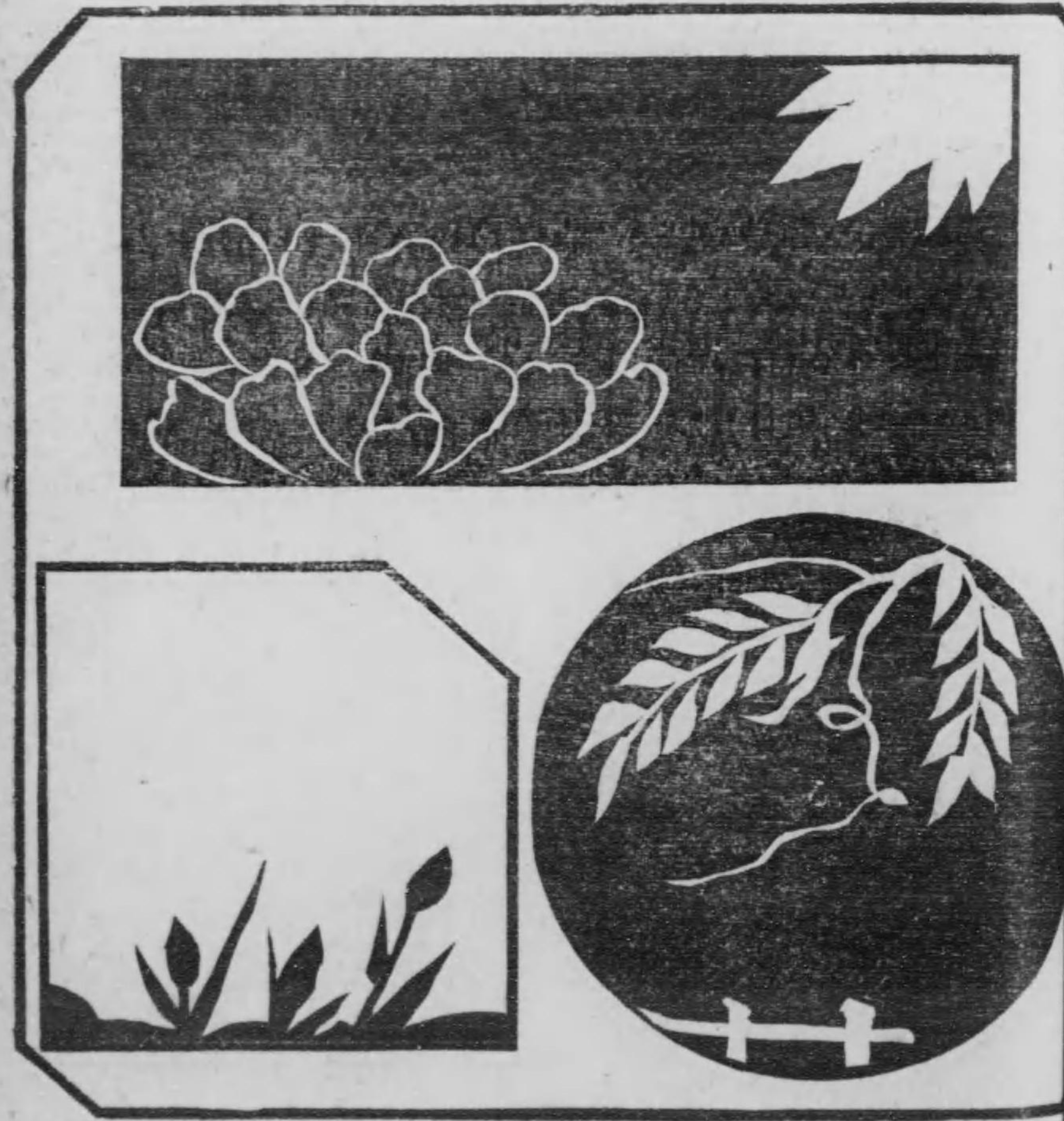
右盛

薄黄の地色の煉切を丸形にして型紙を利用して稲苗に烏の模様をニツケ粉にて出すなり。

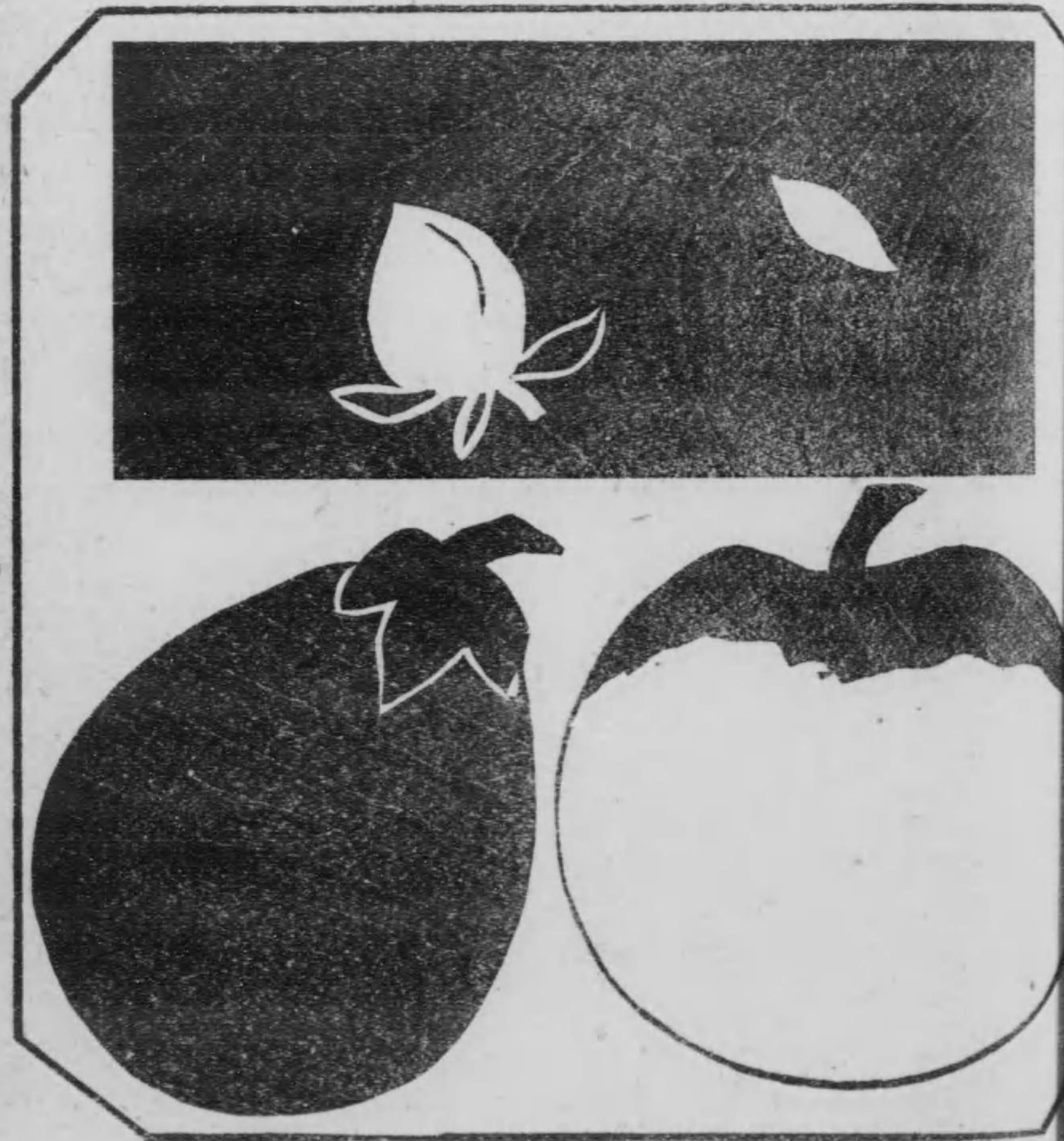
左盛

白の小判丸形の雪平を包み上げて下の方に小豆羹にて浪を書きたる事なるべし。

季節用



光の焔



向附

紅羊羹の中に白の煉切にて牡丹の花及び葉を作りて入れて流したる物なり

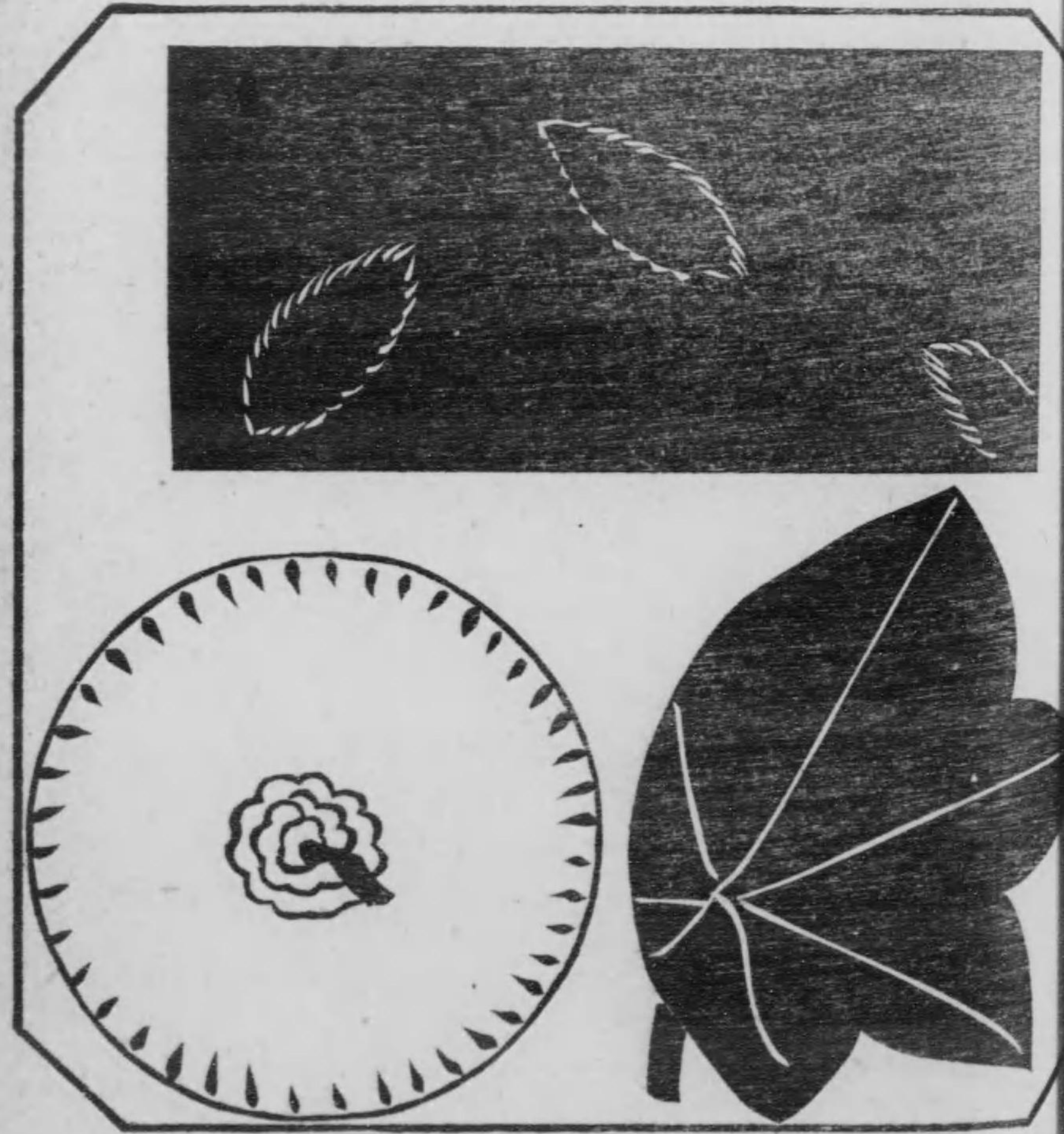
右附

挽茶の煉切に白のボカシにて井戸をへらにて押し藤の葉を棒先にて作りし形にて押しッルは針金を用ひしなり。

左附

黄色の岡時雨にして白にて花を出し青にて葉を抜き出してカキツの模様を出したる事。

佛 事 用



ナスは紫に紅を加合せし色にて圖の如き形を作り後寒天を解かして上より掛けたるなり。

左 盛

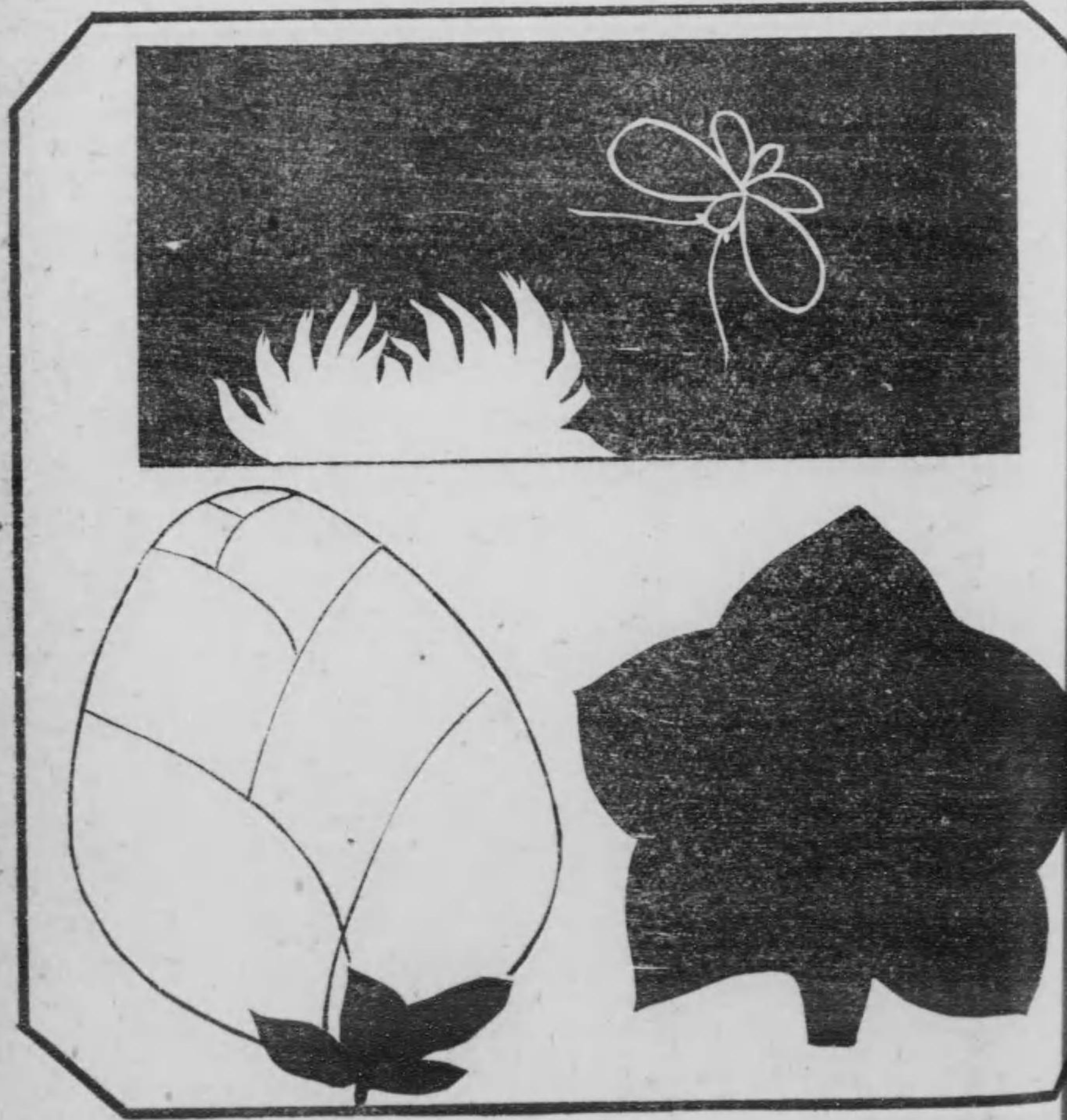
林檎は青色の煉切にて頭上の所を紅を以て吹きボカシとして棒を差したるなり。

右 盛

金玉にして中に桃の實と葉を煉切にて作りて入れて流したる物なり。

向 附

佛 事 用



白の煉切にてフチを赤ボカシにして丸形に包みてヘラにて廻りの筋を付けてヘタは押棒にて青箔にて押込みたるなり。

左 盛

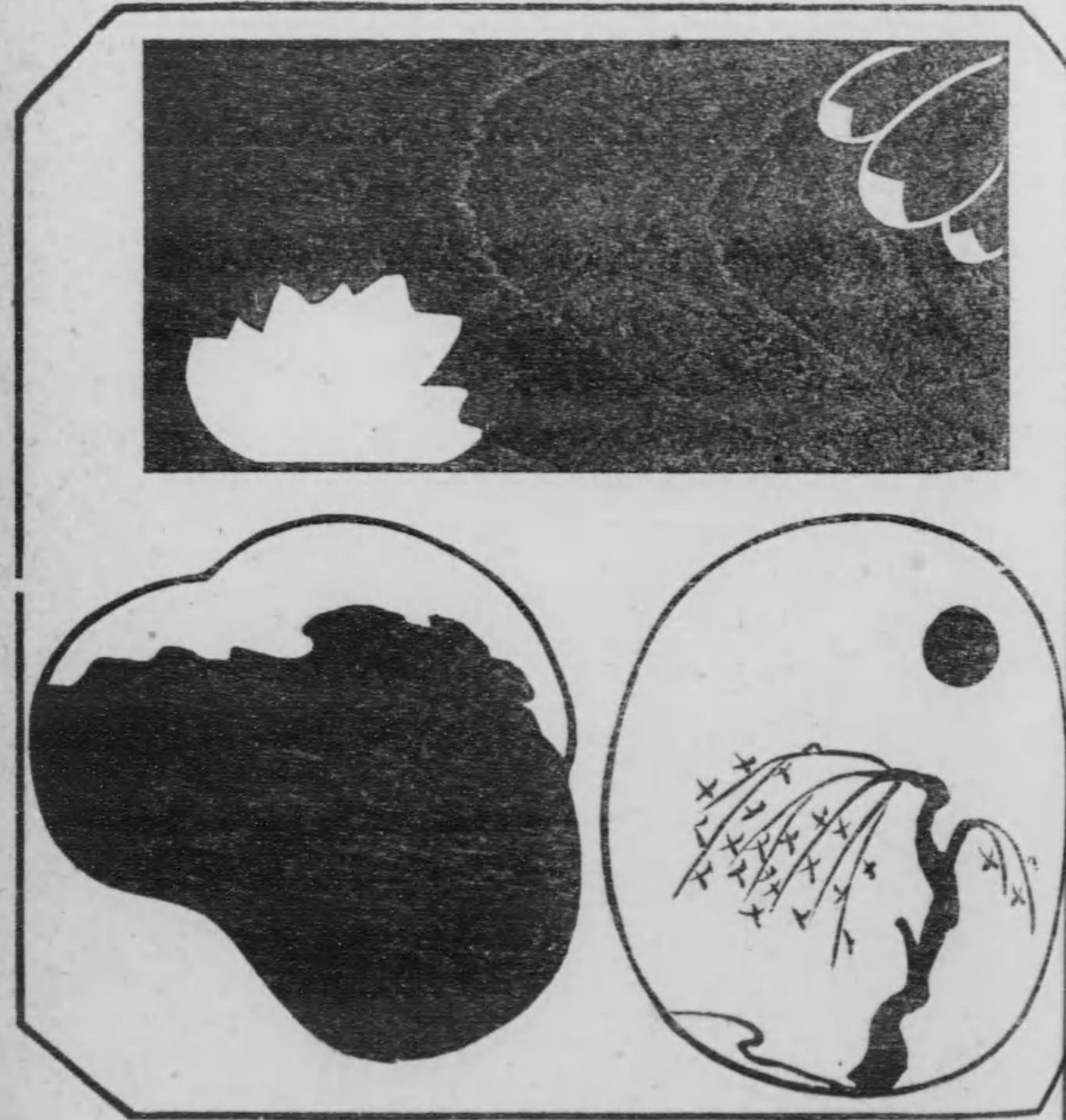
紅と黄色ボカシの煉切にて紅葉の半面の形を作りて筋はヘラにて付けたるなり。

右 盛

白の煉切にて木の葉の形を武力形にて抜き取りて中に入れて小豆羹を流したるなり。

向 附

花 雪 月



向附

小豆餠を臺の岡時雨にして白にて菊及び蝶々の模様を木形利用にて抜き出して後堅く押したるなり。

右附

青と黄の煉切張り合せにて包みて紅葉の形を作りて布に包みて下部の所を絞りたる物なり。

左附

赤白の包みボカシにて煉切を作り筋はへらにて付けてサザンカのツボミの形となしてへたを青の餠にて付けたるなり。

向むかう

附つ

青臺あおだいの岡時雨おかしぐれにて櫻さくらの花はなを薄紅うすべにあん館かんにて木形きがた利用りようにて抜き出だして堅かたく押おしたるなり。

右みぎ

附つ

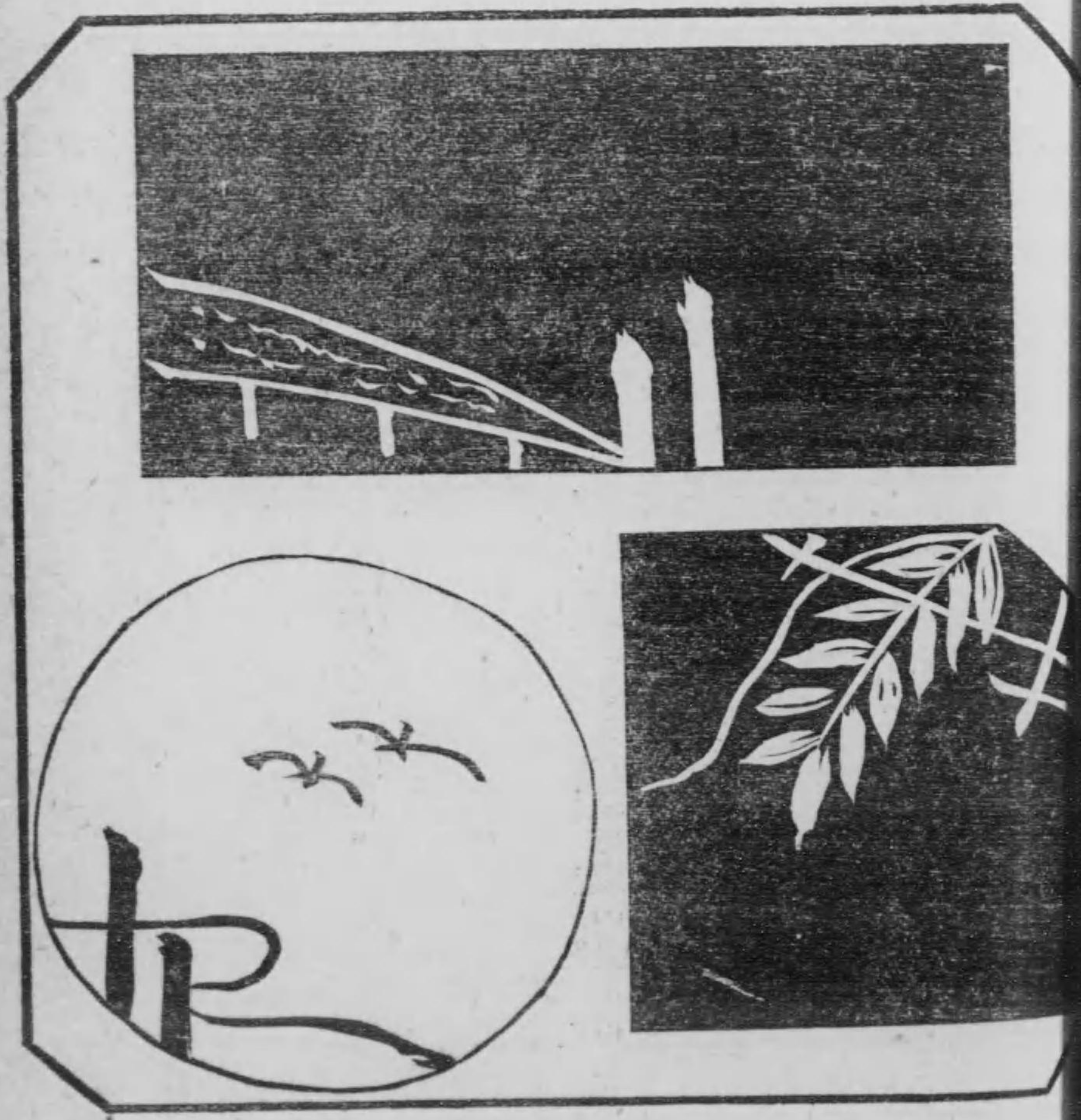
白しろの煉切ねりきりを小判丸形こはんまるかたに作り月つきを黄色きいろ館かんにて出だして柳やなぎの木きを棒ぼうにて押おして枝えだをへらにて押おして付け葉はを箸はしにて付けたるなり水みづは針金はりかねを利用りようすべし。

左ひだり

附つ

青あおの牛肥ぎゅうひにて松形まつがたに作り粉砂糖こなさとうを上うへ半面はんめんに降り掛かけて雪降ゆきふりの松まつを見みせたるなり。

會 席 用



向附

挽茶羹にして橋は小豆羹にて書きたる上に流したるなり。

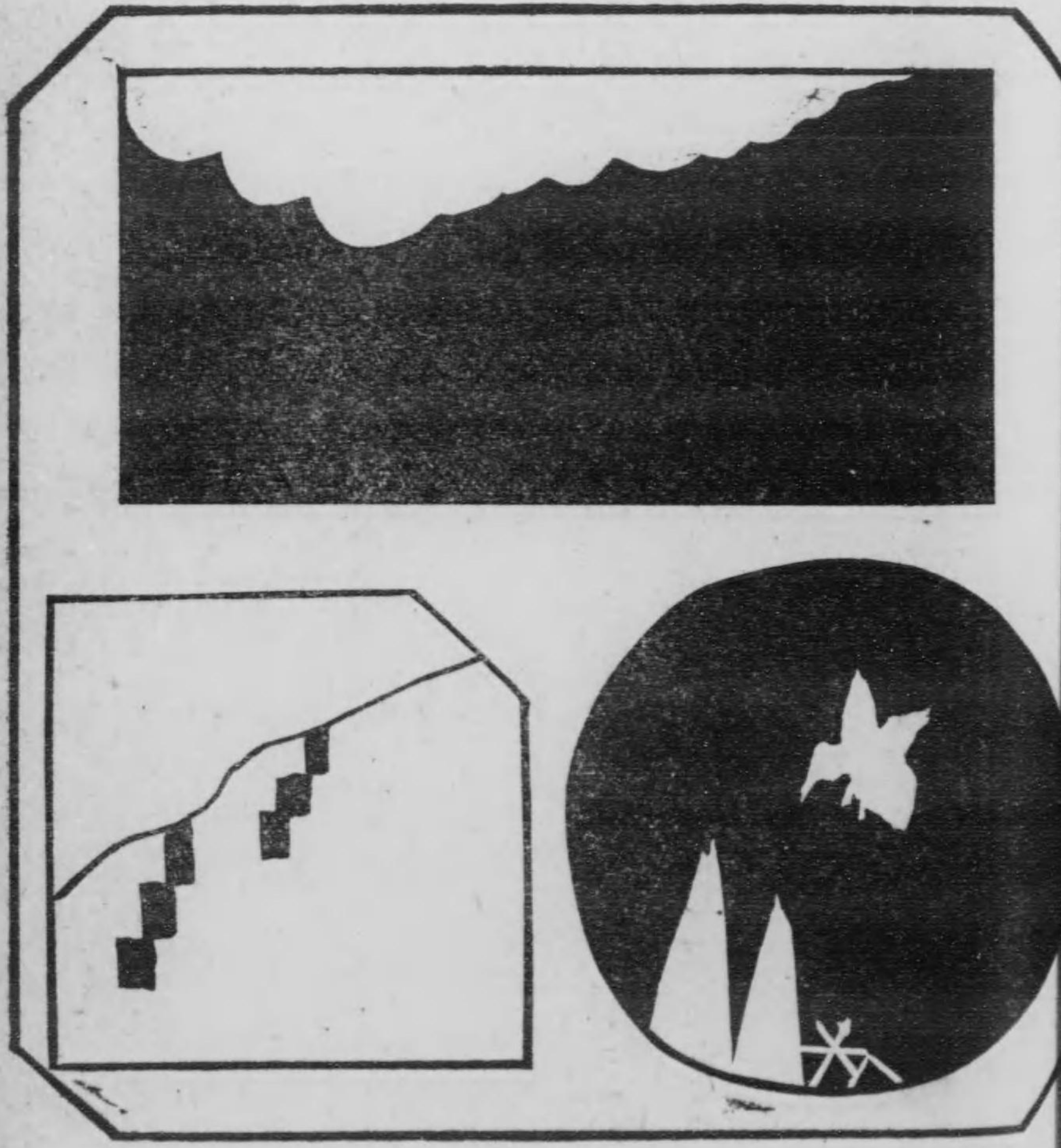
右盛

薄紅臺の煉切を角の角切形に作りて模様は棒のさきを以て藤の葉を押し蔓は針金を押し付け柵はヘラにて付けたる物なり。

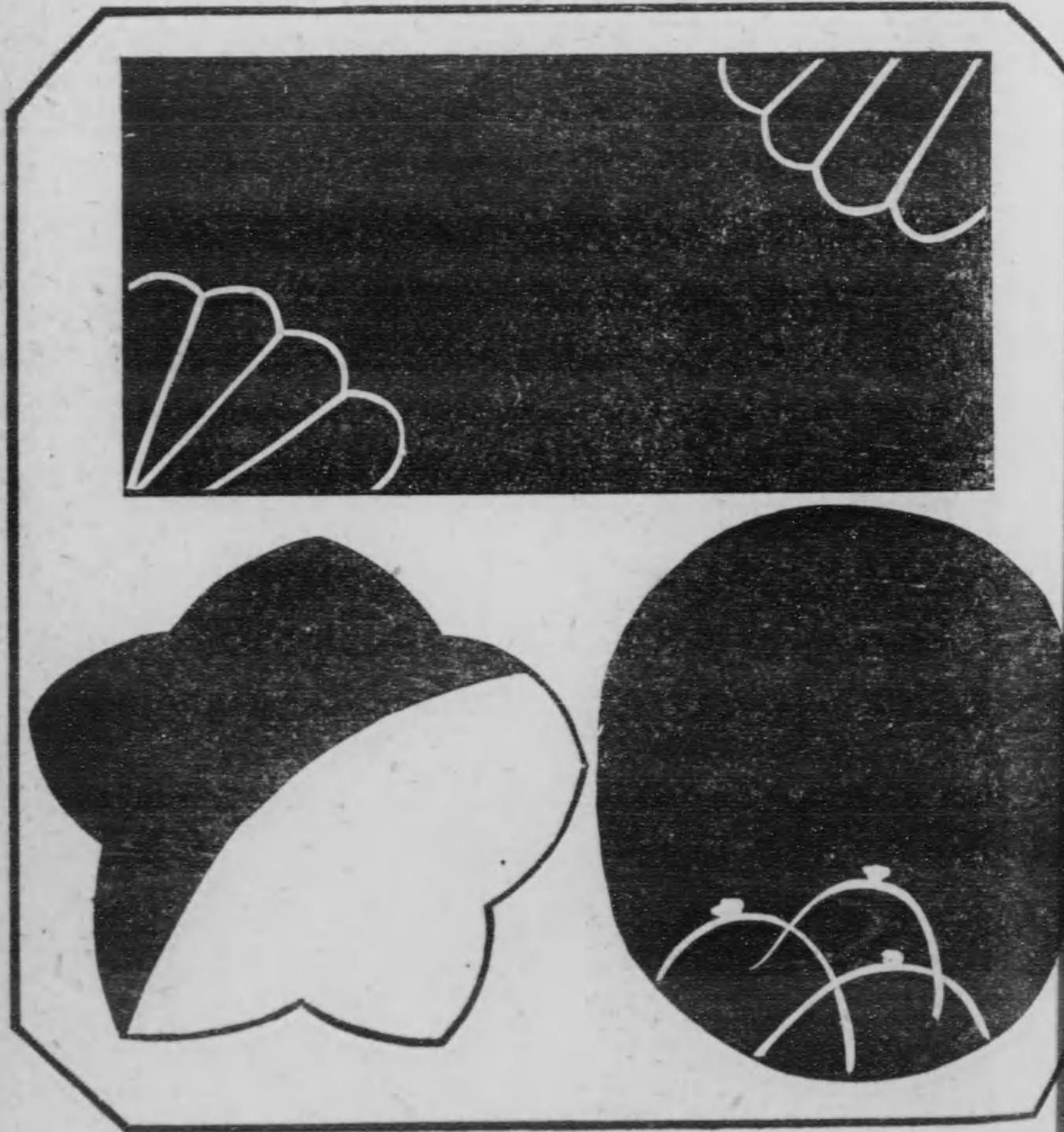
左盛

白の牛肥を包みて丸形に作りて流水及びクイは羊羹にて書きて鳥は焼き針金にて付けたる物なり。

神事用



秋の月



向附

神雲を白にして小豆箱の岡時雨にて堅く押したるなり。

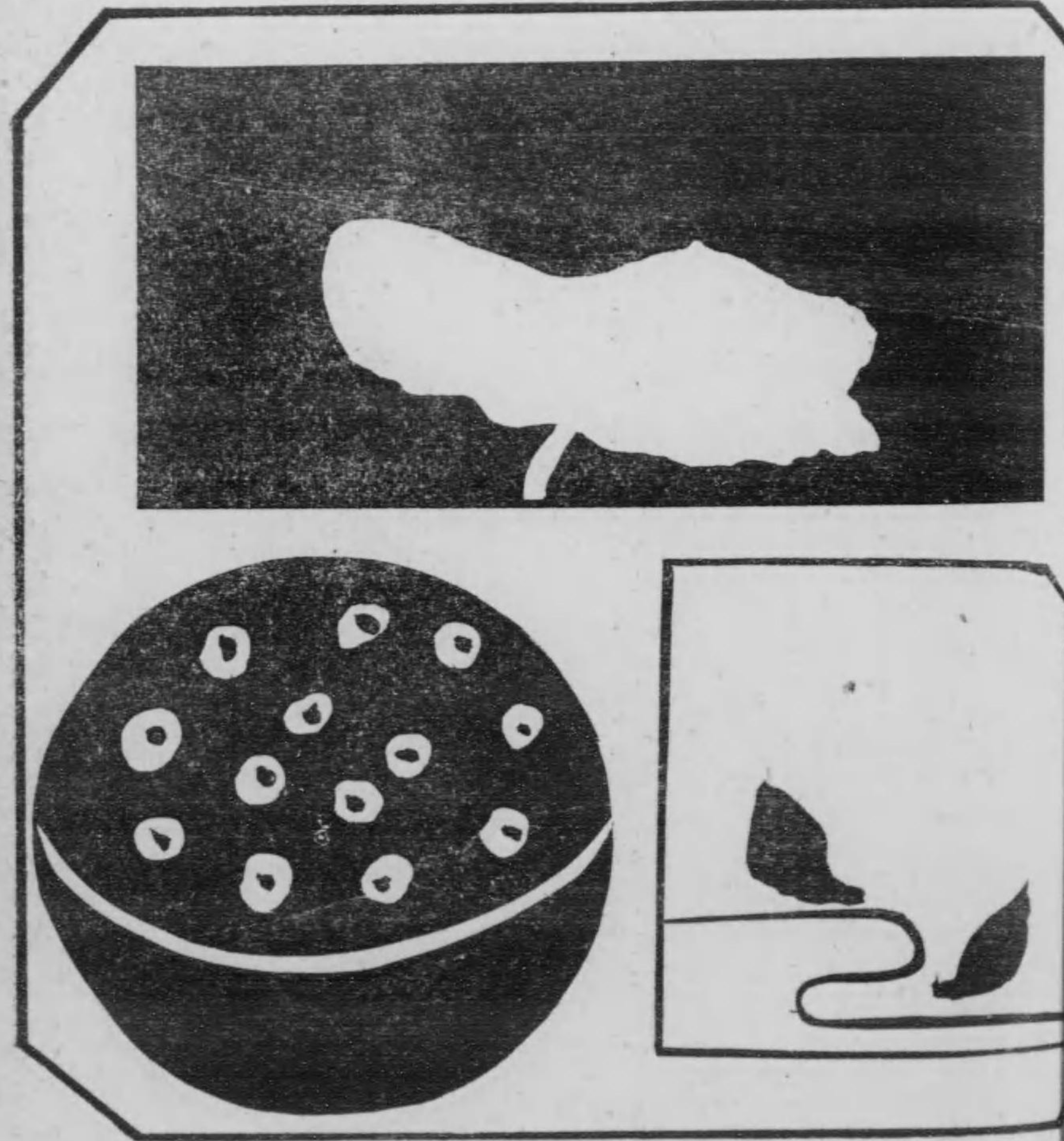
右盛

紅の煉切を日の出形に包み上げて杉の森を挽茶箱にて張り付けて指にて押し宮の家根をへらにて筋をつけて烏を押棒に白の煉切を押し込みたるなり

左附

黄味羊羹の中に細は小豆羹にて書き御弊は白煉切にて作りて入れ圖の如く切りたるなり。

佛の前の



向附

小豆羹にて菊の筋の輪を書きて後ち白の羊羹を全部流したるなり。

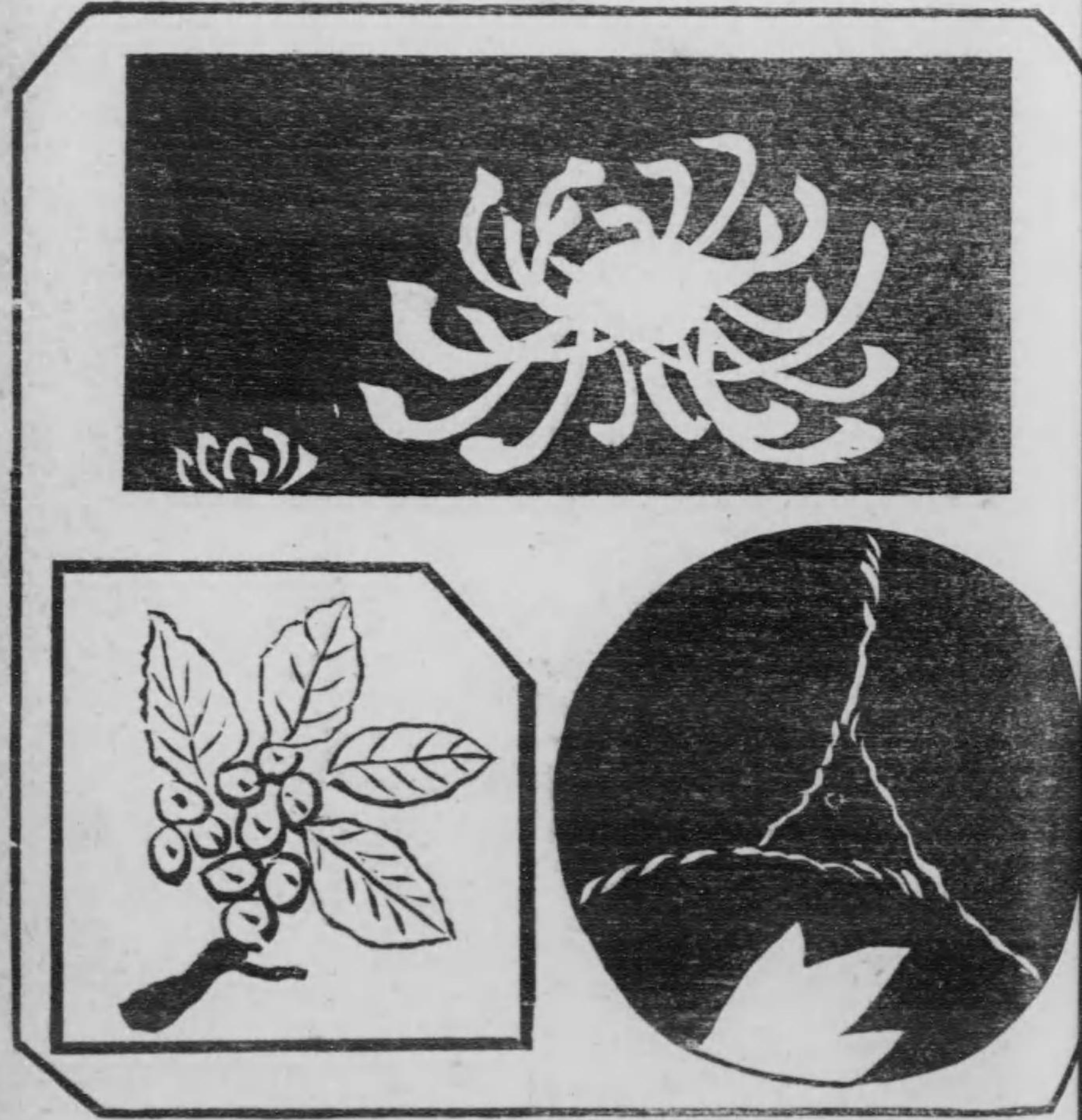
右附

黄色の煉切を丸小判形に包み上げてヘラにて輪を書き箸にて穴を明けて露草を見せたるなり。

左附

牛皮を包みて光琳式の紅葉形を作りて赤に黄を加合せし色のソボロを付けて半面に刷密にてイラを引きたるなり。

佛事用



向附

引茶の羊羹にて蓮の葉を書きて其の中に白の薯蕷羹を流したるなり。

右盛

黄臺の岡時雨にて蓮の花片を赤にて水を白にて木形利用にて抜き出し堅く押すなり。

左盛

挽茶色の煉切を丸形に包みて圖の如く蓮の實の様に穴を明けたるなり。

向附

菊を小豆羹にて書いて其の上に白の薯蕷羹を流して仕上げたるなり。

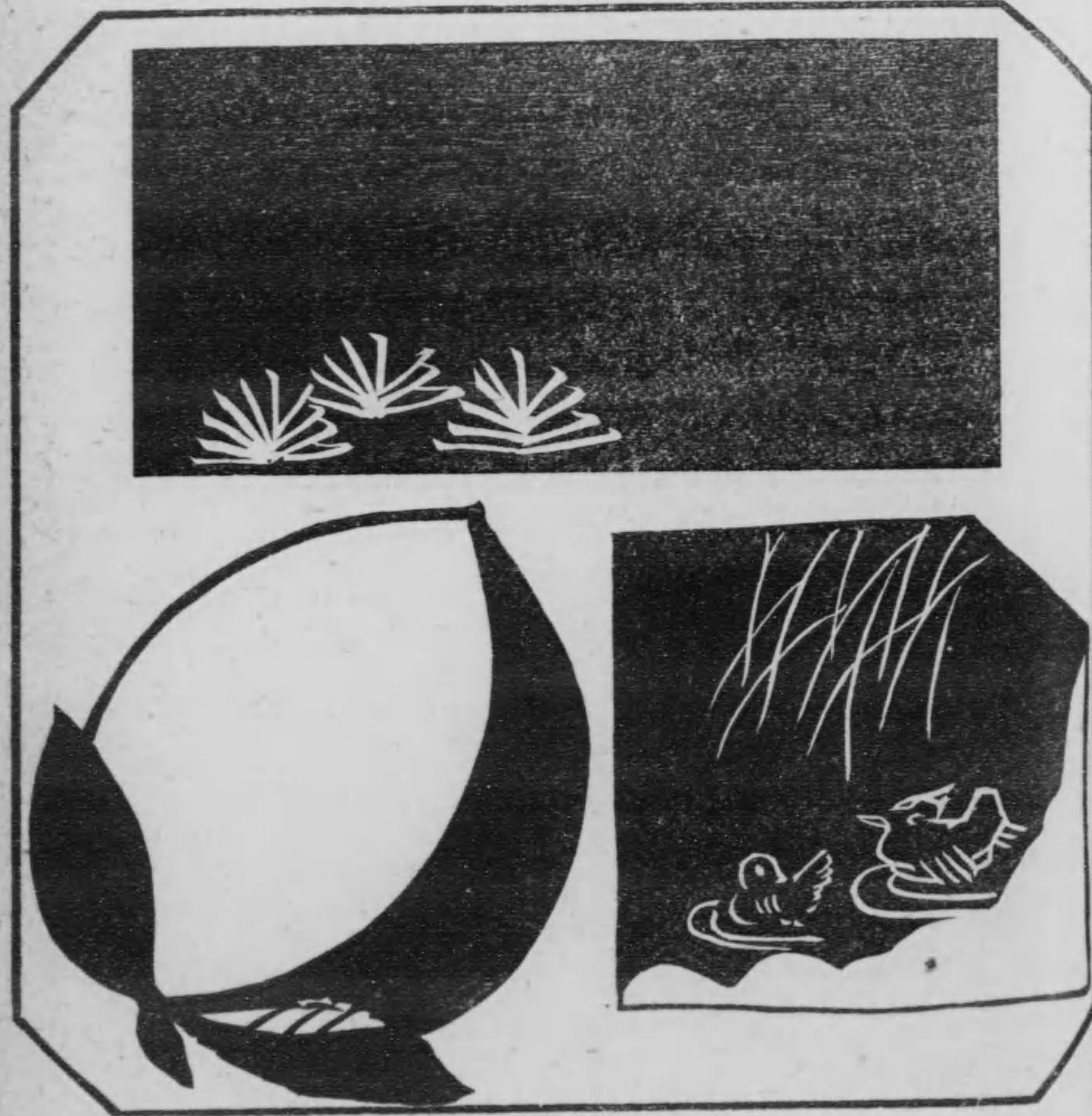
右盛

赤の煉切を丸形に丸めて其の上ギザの付きし輪形を利用して伸したて薄き白薯蕷の皮を三枚圖の如く張りて牡丹となして葉を一枚小豆羹を武力形にて抜きて付けたるべし。

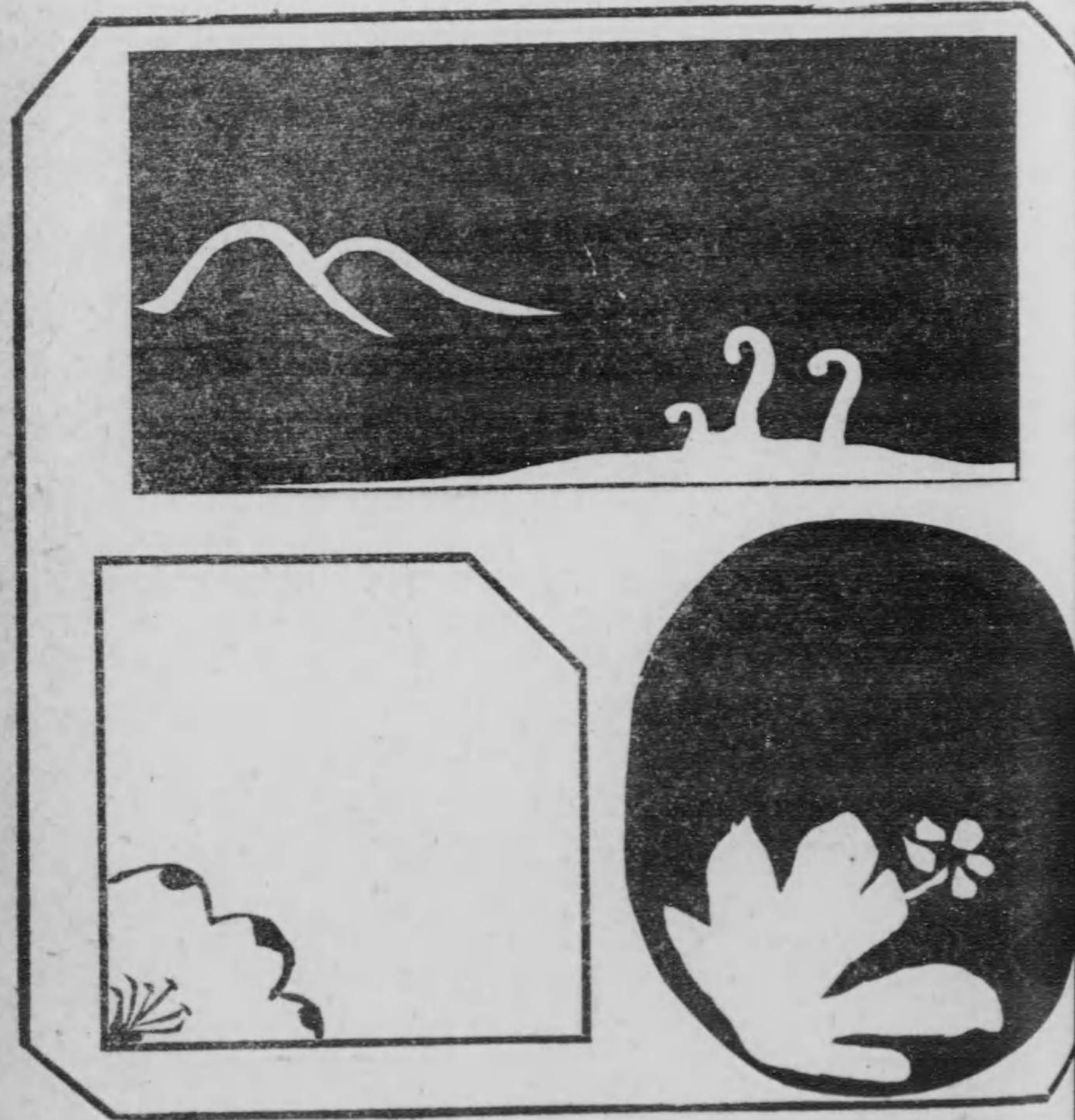
左附

黄の岡時雨を押して其の上に型紙を利用してピワの折枝の模様を現はしたるなり。

婚禮用



季 節 用



向 附

紅羊羹にして松の葉を小豆羹にて書きて上に流したる物なり。

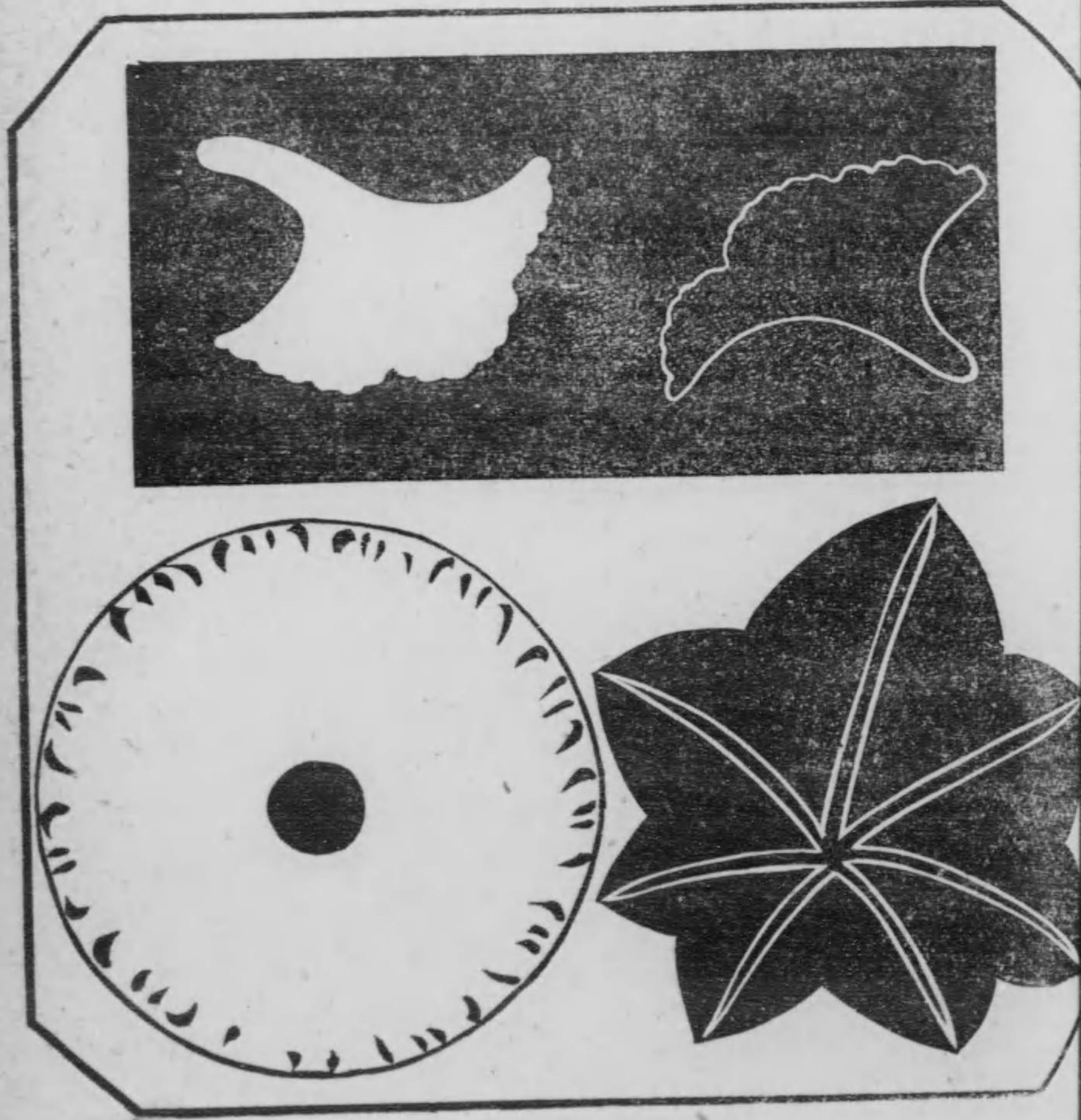
右 盛

上を青にして下を黄にして煉切を包みて柳の木を棒切にて押して柳の技をへらにて付け水及びヲシ鳥を形紙にて刷り込みたるなり。

左 盛

黄勝ちの青にて桃の形を作りて葉を青にて付けたるなり先頭を吹きボカシにて吹き掛けたるなり。

季 節 用



向 附

山及び蕨に土地は挽茶羹にて書きて後ち全部白の薯蕷羹を流したるなり。

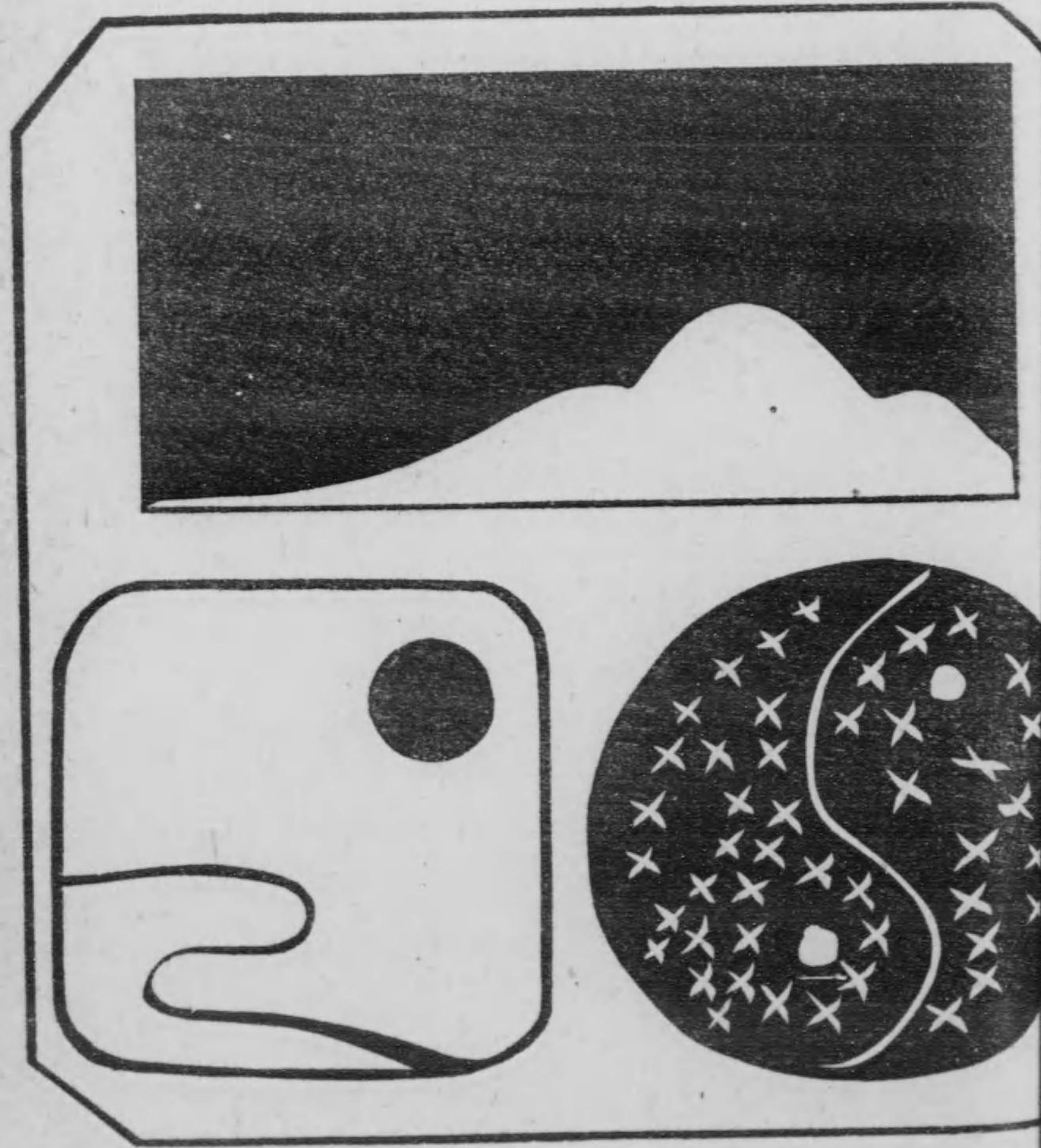
右 盛

草煉切を小判丸形に作りて其の上に形紙を利用してタンポポの花及び葉を
刷り込みたる物なり。

左 盛

櫻は紅臺の岡時雨の下所に白にて木形利用にて抜き出して堅く押したる
なり。

會 席 用



白赤ボカシしろあかの煉切ねりきりにて丸形まるがたに作り筋つくすぢをヘラにて付けて真中まんなかに黄色きいろの箔あんを付けて菊きくの形かたちを見せたる物ものなり。

附ひだり 附つひ

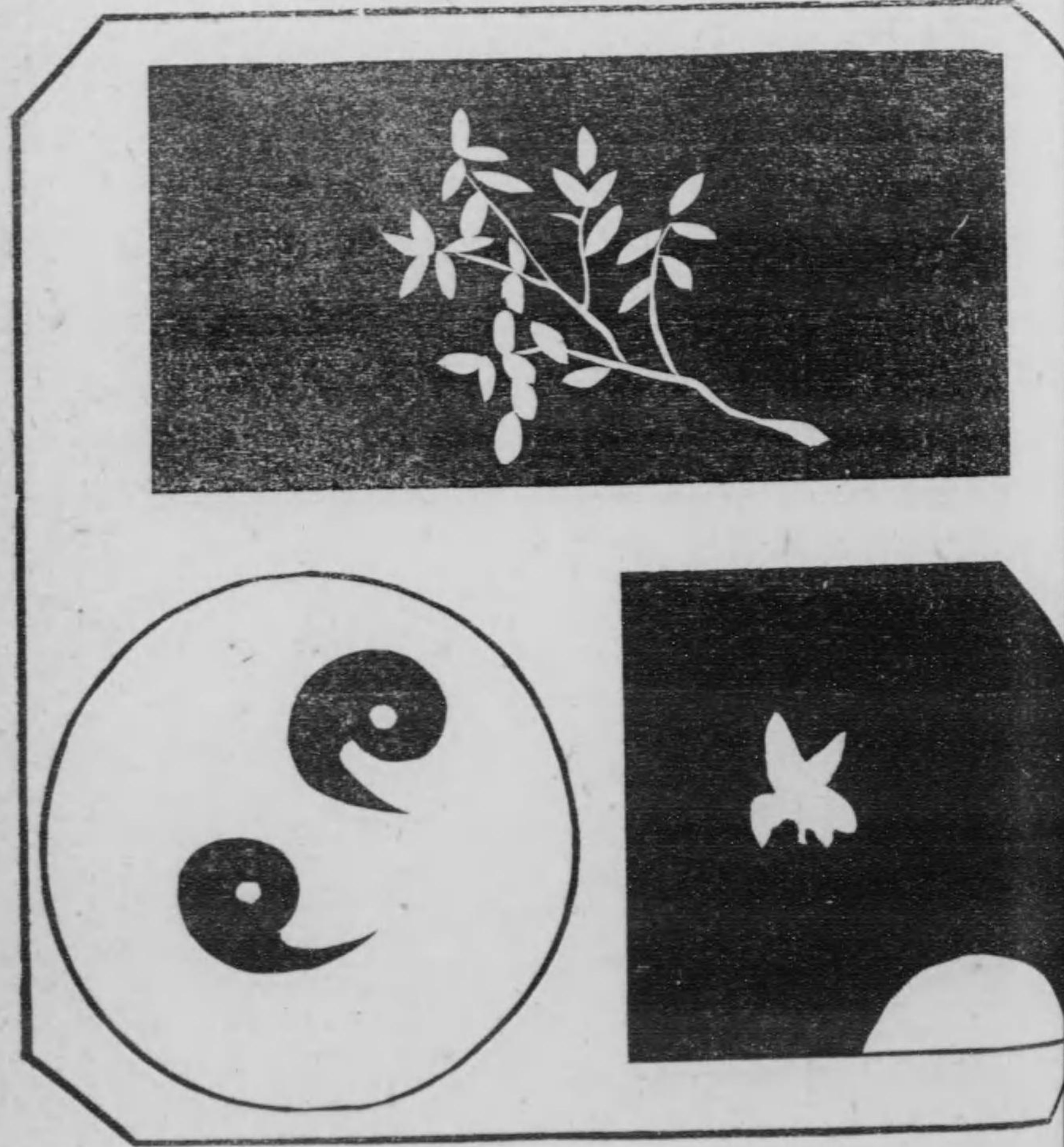
挽茶色ひきぢやいろの煉切ねりきりにて紅葉もみぢの形かたちを作りて筋すぢはヘラにて付けてたる物ものなり。

右みぎ 附つひ

煉切ねりきりのイテフの葉はを形拔かたねきにして金玉きんぎょくの中なかに入いれたるなり。

向むかひ 附つひ

神 事 用



向 附

山を白の薯蕷煉切りにて出して全部薄紅羊羹を流したるなり。

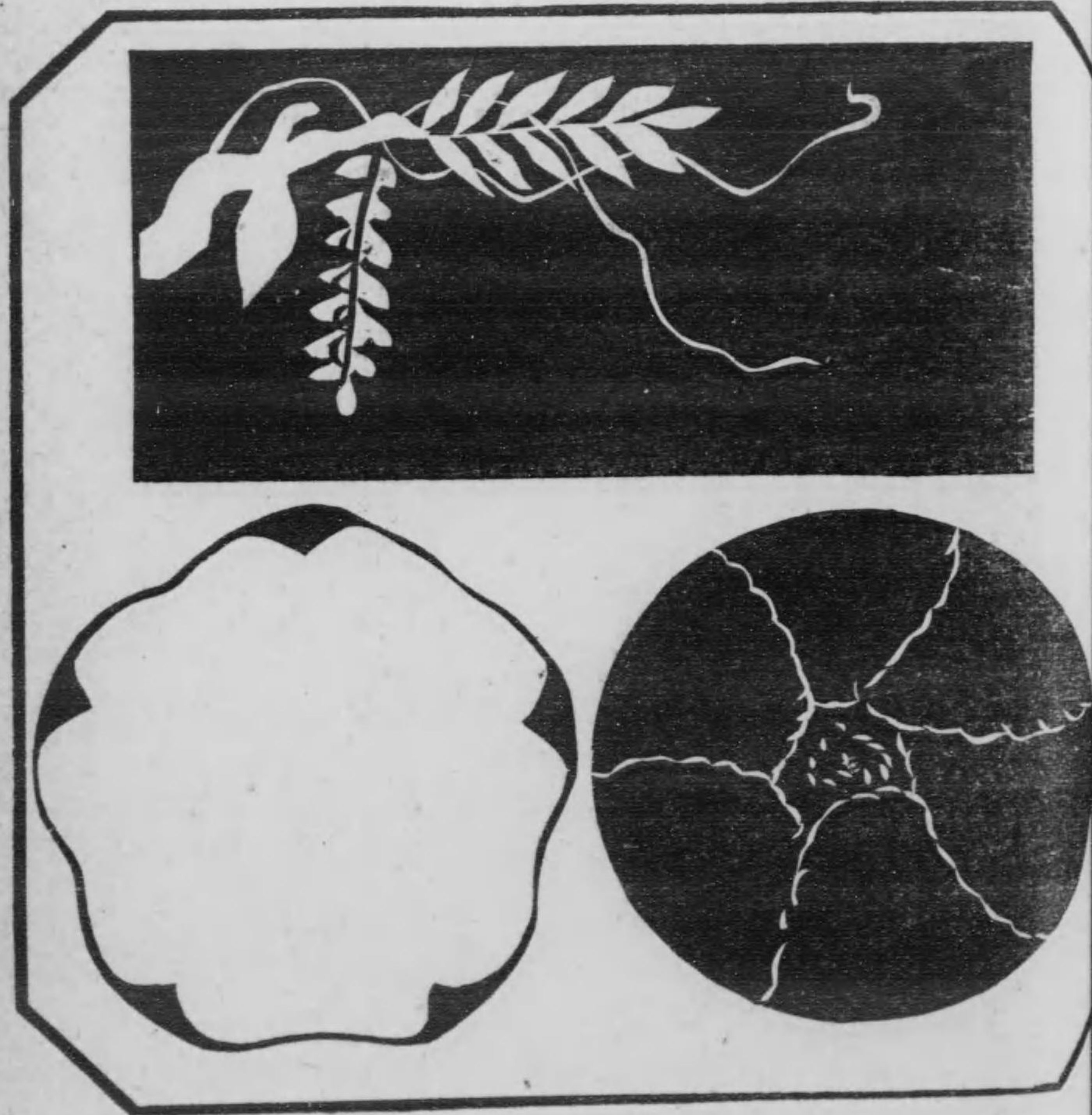
右 附

草入牛肥にて丸形に包みてマガ玉の筋を焼き目にて付けたるなり。

左 附

黄色染めの煉切りにて月を白にて水も白にて刷り込みて現はしたるなり。

季 節 用



向 附

小豆羹にて櫛の枝を書きて上より挽茶羹を流したるなり又は形紙を利用してバラピン紙に刷り込みて是を舟に入れて流すも能し。

右 附

黄色餡の岡時雨にて日の出を紅餡にて烏を小豆餡にて出して抜き出し堅く押したるなり。

右 附

白の煉切を丸形に包みて上に小豆色のマガ玉を作りて張り付け後ちフルイに押し付けて仕上げるなり。

佛 事 用



向 附

藤は小豆羹にて書きて挽茶羊羹を全部流したる物なり。

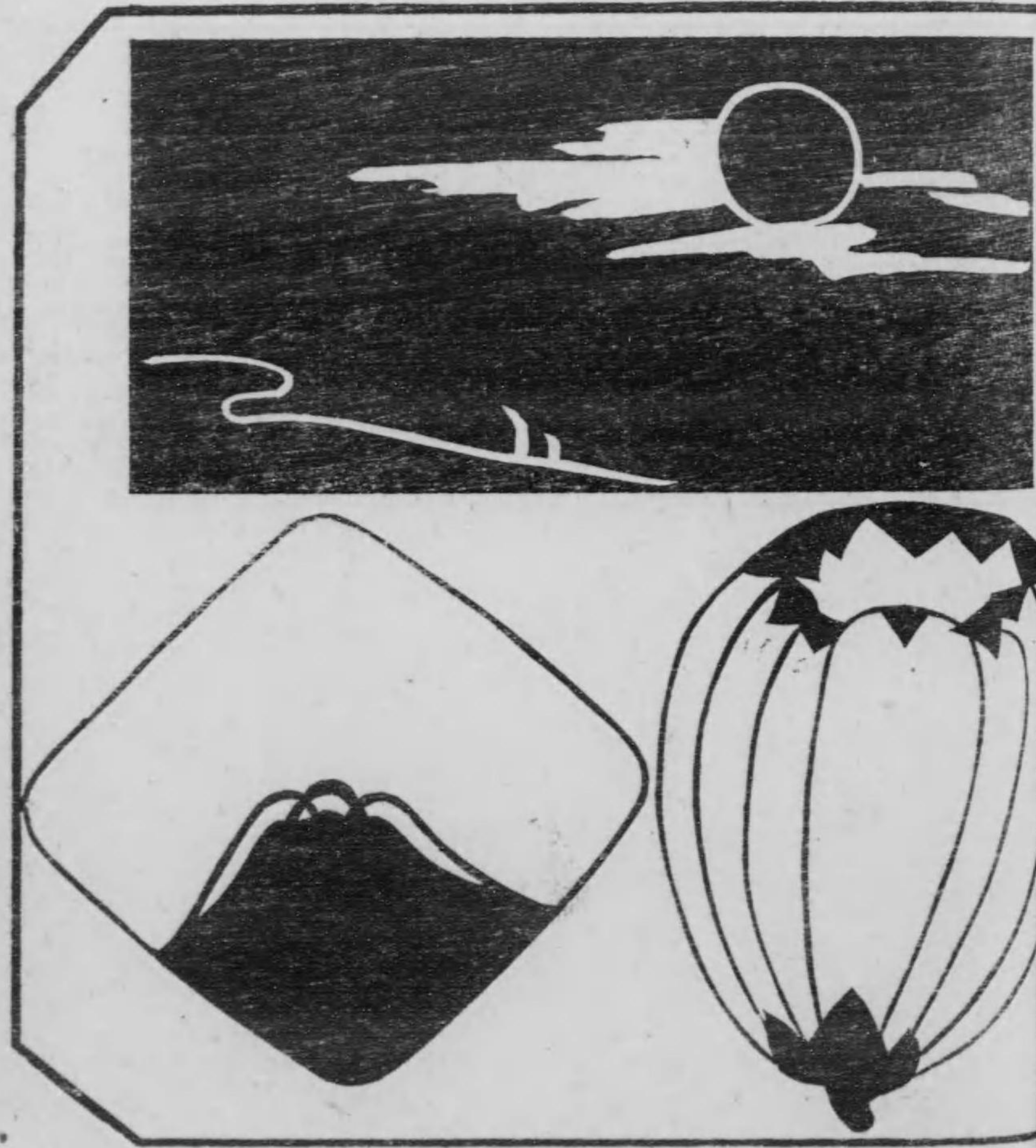
右 附

紅の牛肥を丸形に包みて其の上に白の薯蕷煉切を薄く伸してギザの付きし丸小判の武刀形にて抜き取りて六枚を圖の如く張りて真中に黄箔を入れて牡丹の表面となすなり。

左 附

薄紅の煉切にて包みて圖の如く光琳櫻の花の形ちを作りし物なり。

花 雪 月



薄紅の煉切にて圖の如く白の所に圖の如き白を張り附けて布に入れて眞中を押して絞り穴の中に黄箔を細長くして入れ朝顔となすなり。

左 附

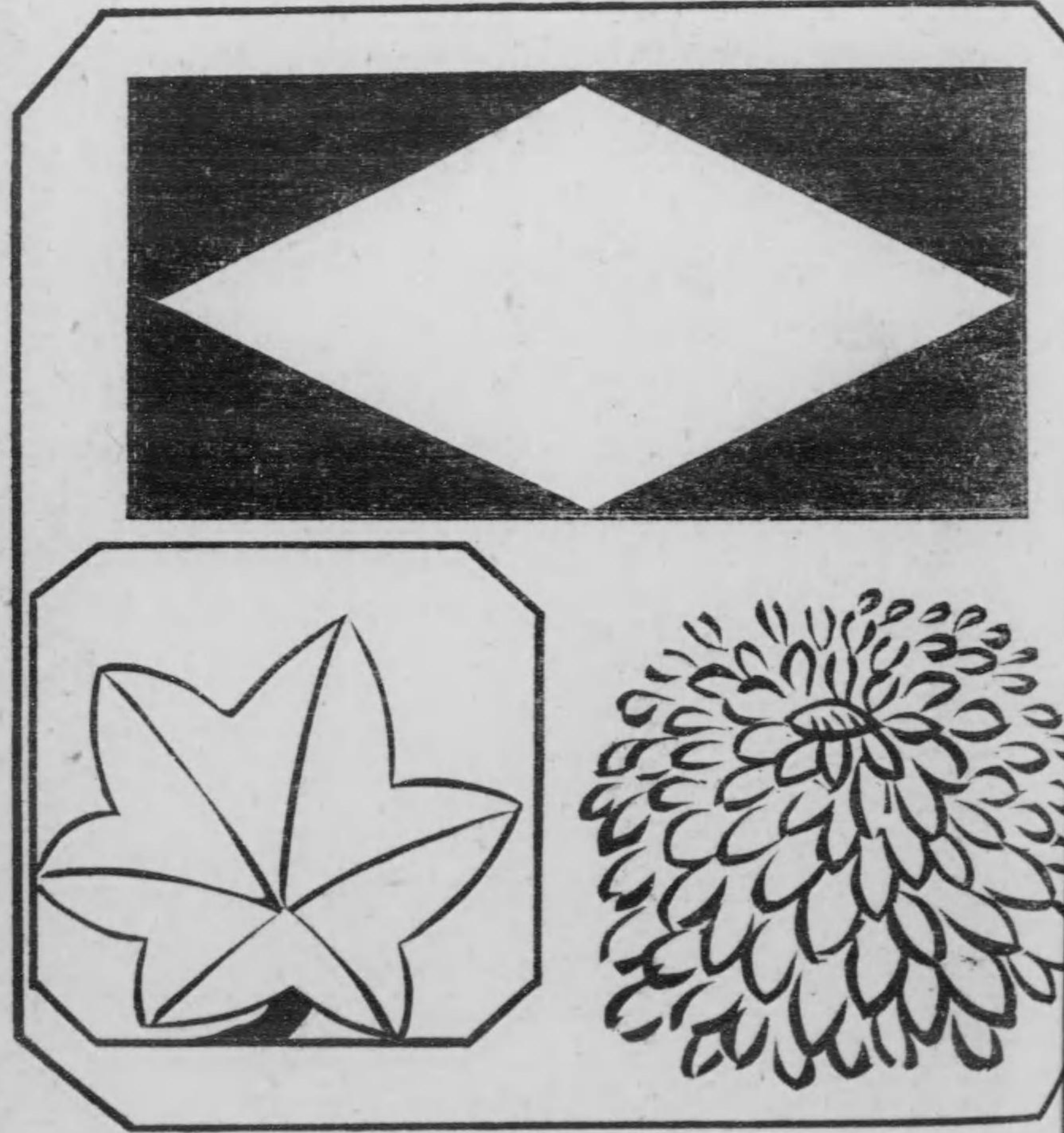
白箔の岡時雨にて遠見の紅葉を黄赤の加合色にて出して木をニツケ粉にて出し落葉を赤にて出し木形利用にて堅く押したる物なり。

右 附

小豆羹にて蓮の葉を書きて花を白の煉切にて作りて入れて上より挽茶の羊羹を全部流したる物なり。

向 附

佛 事 用



黄色染めの牛肥を包みて以上の形に作りて羊羹にて雪の降り重りし如く富士山を書きたるなり。

左 附

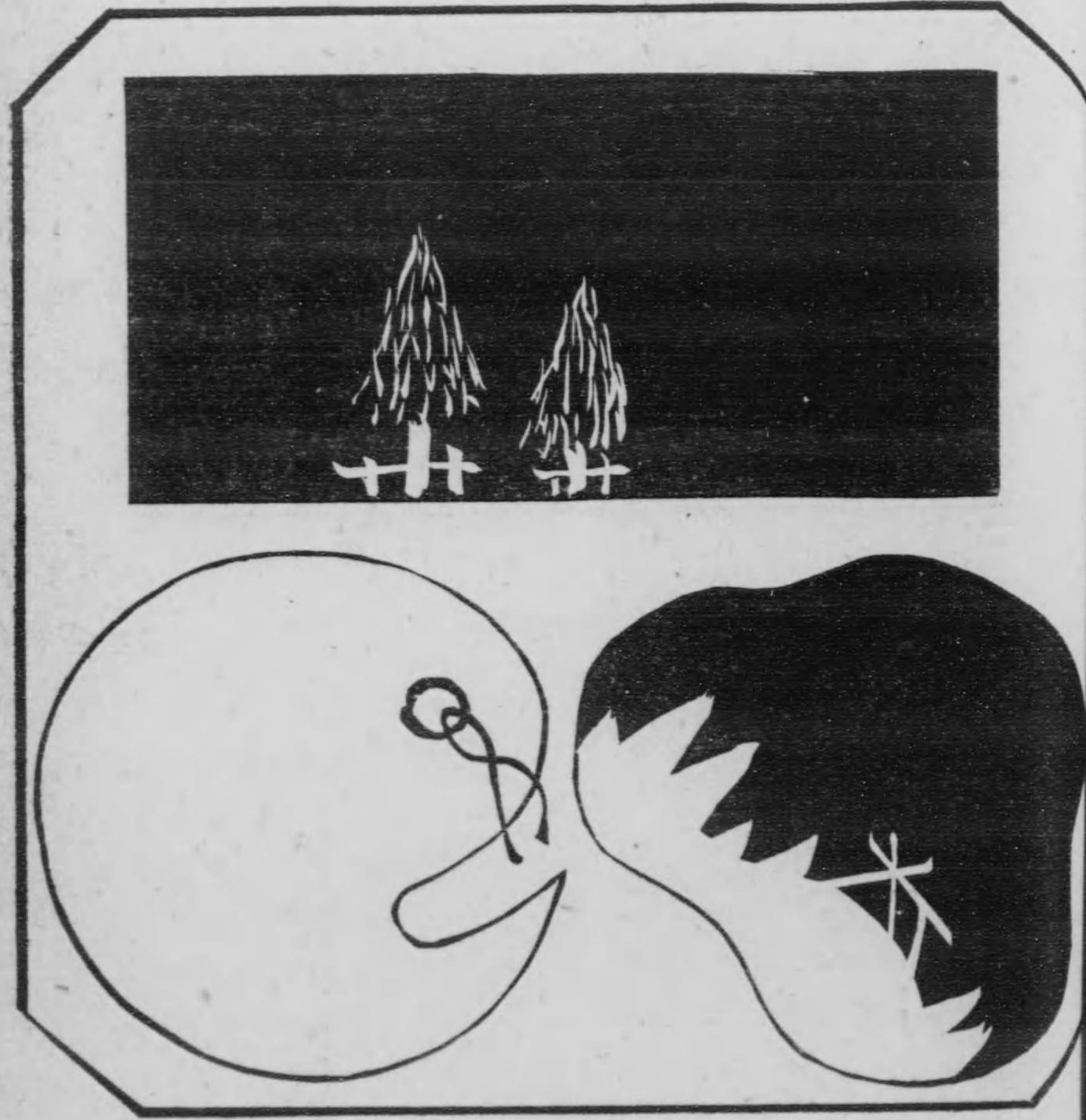
薄紅の煉切にて丸小判に包みて上に指にて穴を明けて三角定木にて角にて押して櫻の咲きかける所を見せたる物にてへたは青箔にて附けるべし。

右 附

挽茶羹にして水の流れ及び雲は白の薯蕷にて書きて月は黄色煉切にて丸めて入れ流したる物なり。

向 附

神 事 用



向 附

能し。菱形は中を白にして地を小豆餡の岡時雨なり又薯蕷の菱にて小豆羹にても

右 附

菊は白の煉切にて上を少し赤ボカシにして包みて上より下にハサミにて切り下げたる物なり。

左 附

角切形の黄の煉切を包みて紅葉を黄青赤の三色にてボカせし物を作りて是を伸して武力形にて抜きて張り付けて指にて押し後ちサヤ形に押したるなり

向附

黄味色箔の岡時雨にして紳を白と青の混合ソボロにて出し抜きて木形利用にて堅く押したるなり。

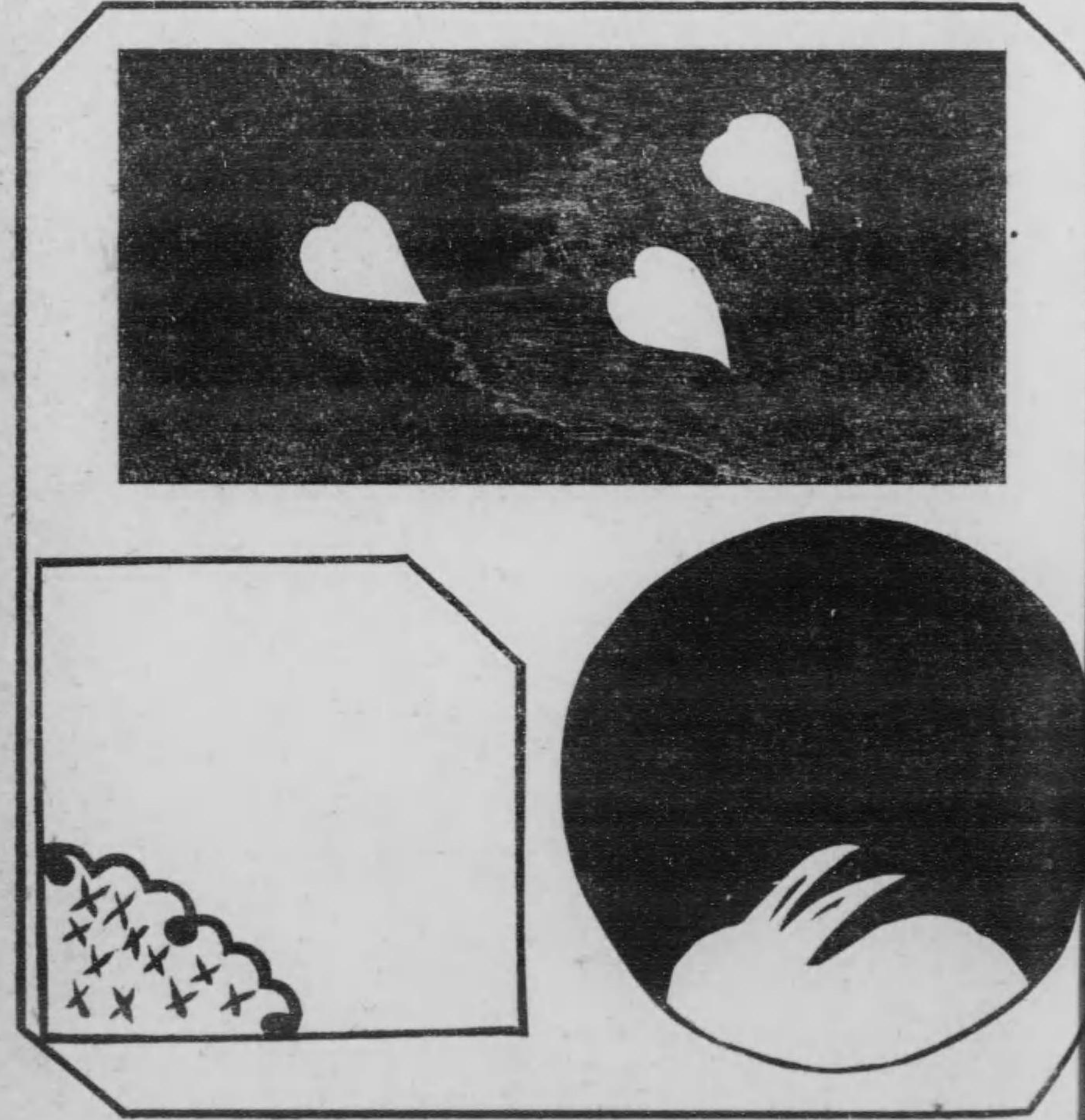
右附

白の煉切を松形に作りて白き所は挽茶館を張り附けて指にて平らに押し附けて杉の森を作り宮の家根はヘラに筋を附けべし。

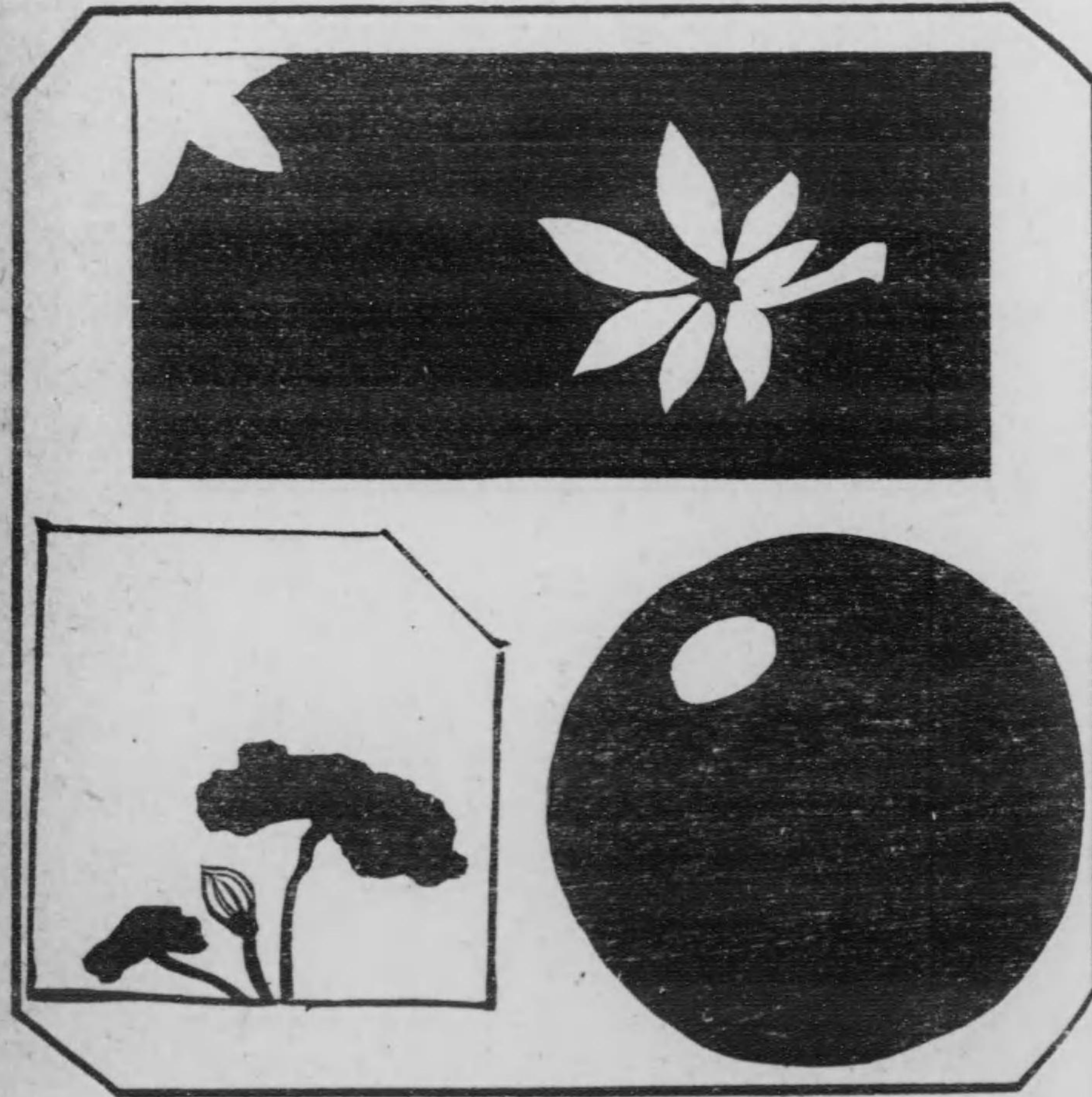
左附

薄紅の牛肥を以て包みし形を圖の如くマガ玉の形ちに作りてヒモを紫の色

花雪月



佛 事 用



向 附

薄紅羊羹の中に櫻の落花を白の煉切にて作りて入れて流したるなり。

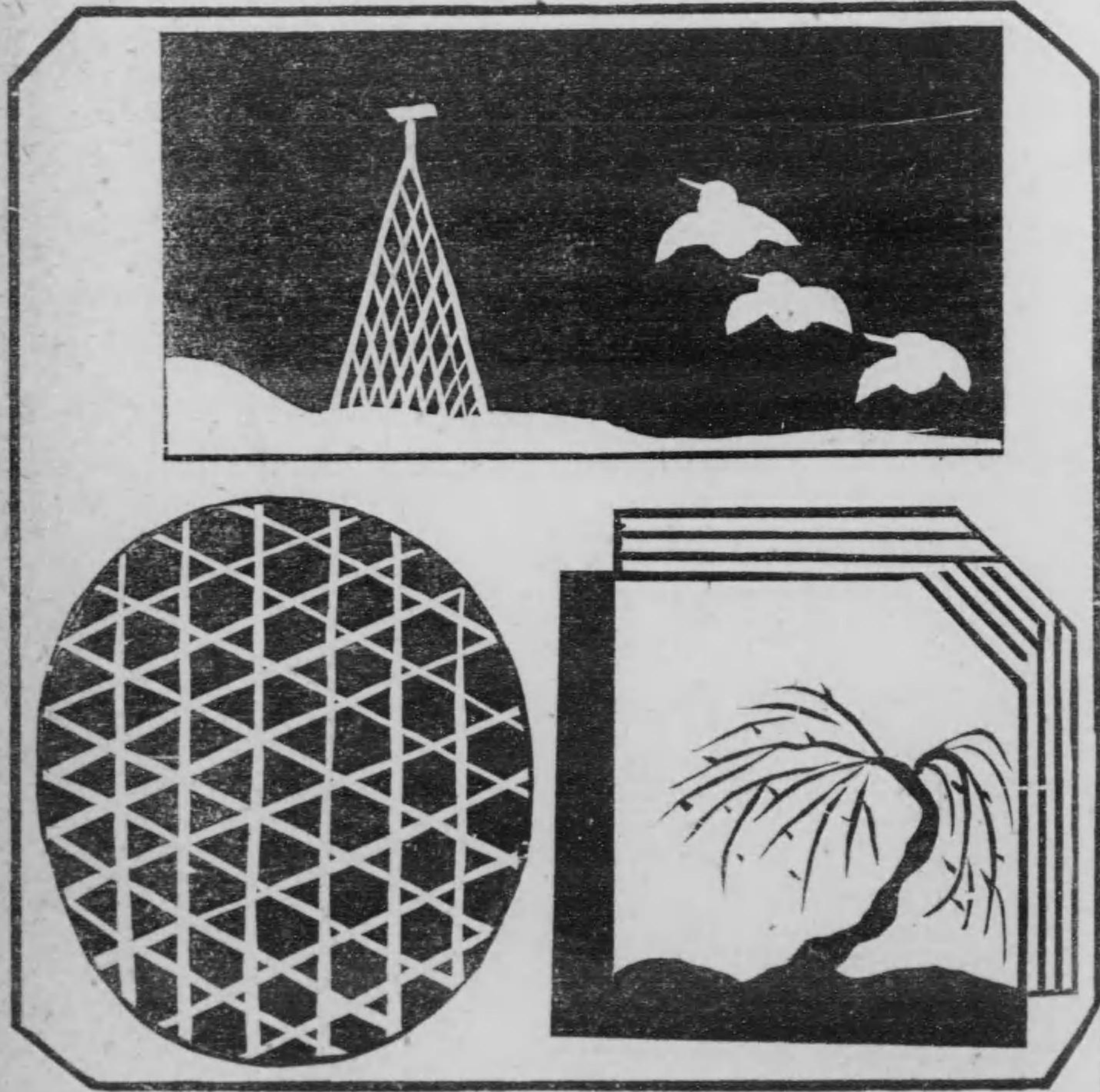
右 盛

白の煉切を丸形に包みて下部にウサギの半面を小判箔にて張り付けて指にて能く平らに押し附けたるなり。

左 盛

挽茶臺の岡時雨にて脇下の所の雪輪の半面を白箔にて抜き出したるなり。

會 席 用



向 附

白の衛生羹の中に黄赤青の三色にボカシたる煉切を伸して武力形にて抜きし物を表に出して流したる物なり。

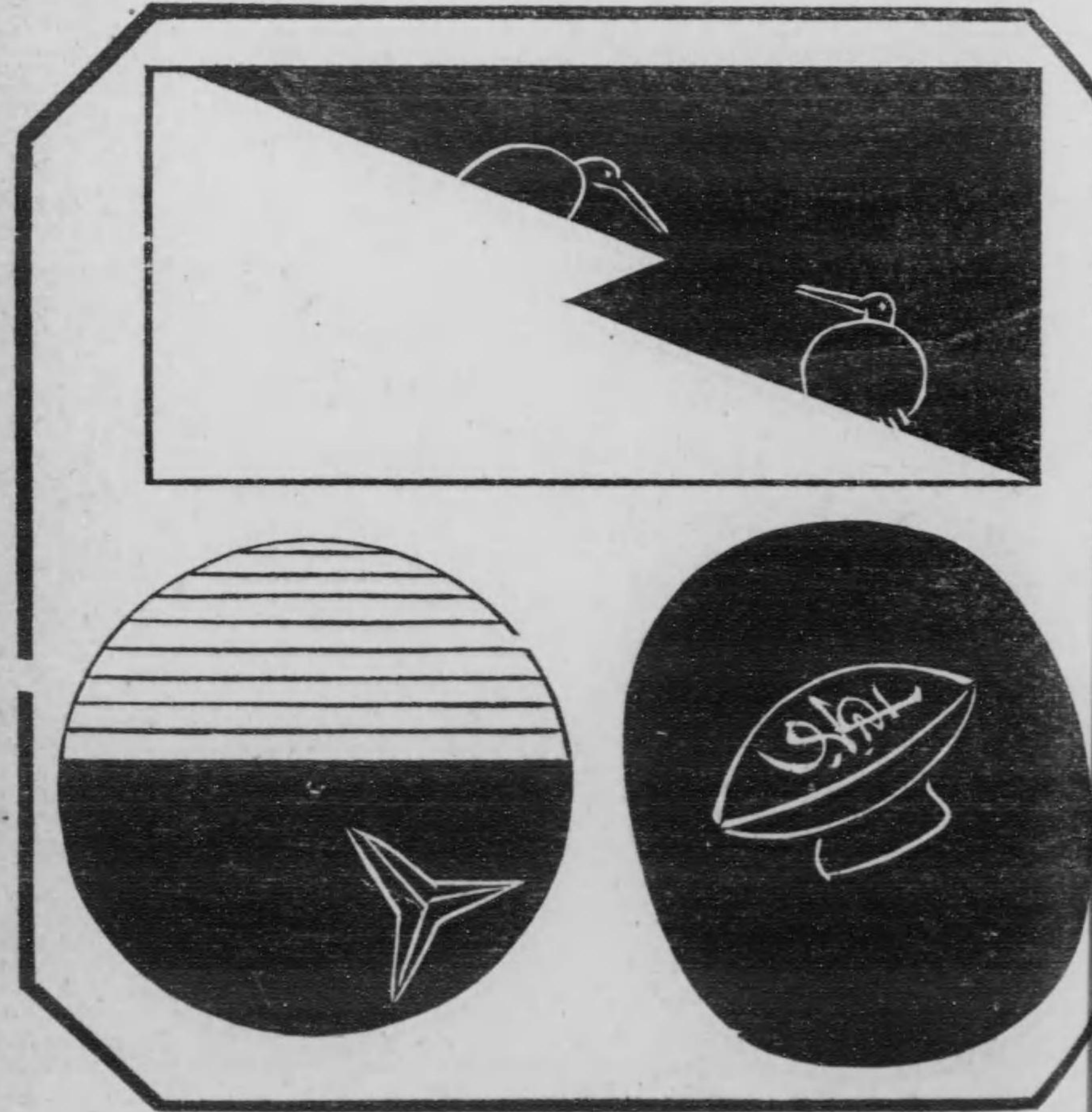
右 盛

菊は紅の牛肥にて包みて丸形にして頭と思ふ所を押し凹ませて其の所へ黄色の煉切を少さなる小判形にして附けたるなり。

左 盛

黄色染めの煉切を角切形に包みて形を附け平らにして其の上の葉を挽茶箱にて花を薄紅にて染めて張り附けて上より指にて押して後ちフルイに押し附け仕上るなり。

祝 事 用



向 附

綱の干したると形地とは小豆羹にて書きて水鳥は白の煉切にて作りて入れ挽茶羊羹を流したるなり。

右 盛

式紙に柳は三色にし上は赤にして角の分を黄にして下を青にして角面の所に柳の模様を型紙にて刷り込みたるなり但し岡時雨の事。

左 盛

白の牛皮を包みて丸小判形に作りて小田巻糸の白を籠目に筒にて掛けたるなり。

向附

白を上しろをうへに青あをを下したの松川菱まつかはびしの羊羹やうかんを流ながし合あはせるなれ共ども其そのの前まへに白しろの方ほうに鶴つるを
圖づの如ごとく小豆羹あづきかんにて書かきて後のち流ながし合あはせたるなり。

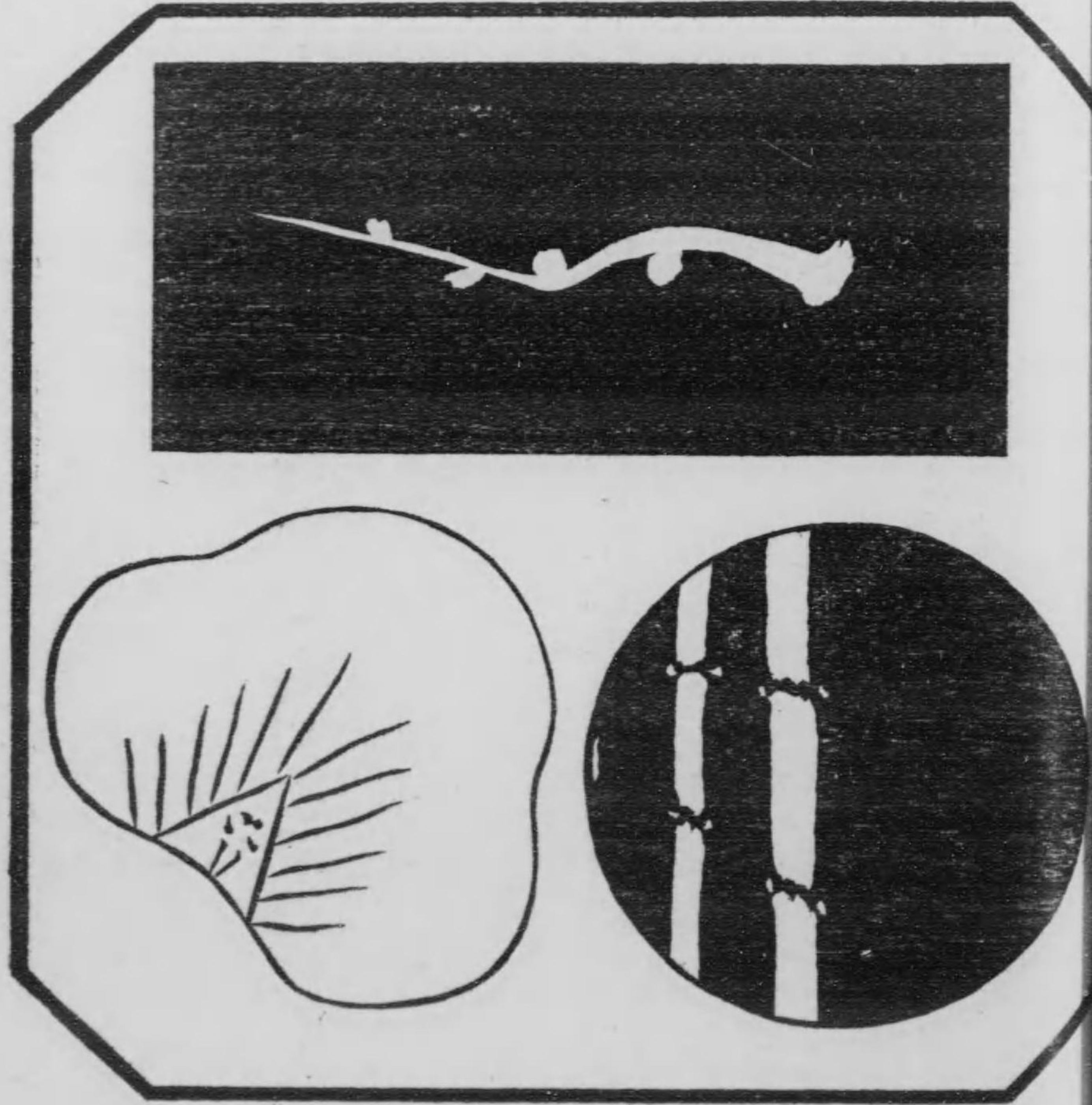
右盛

紅べにの牛肥ぎゅうひを丸小判まるこばんに包つつみて其そのの上うへに小豆羹あづきかんにて盃さかずき及および壽ことぶきの一字いちじを書かきたる
なり。

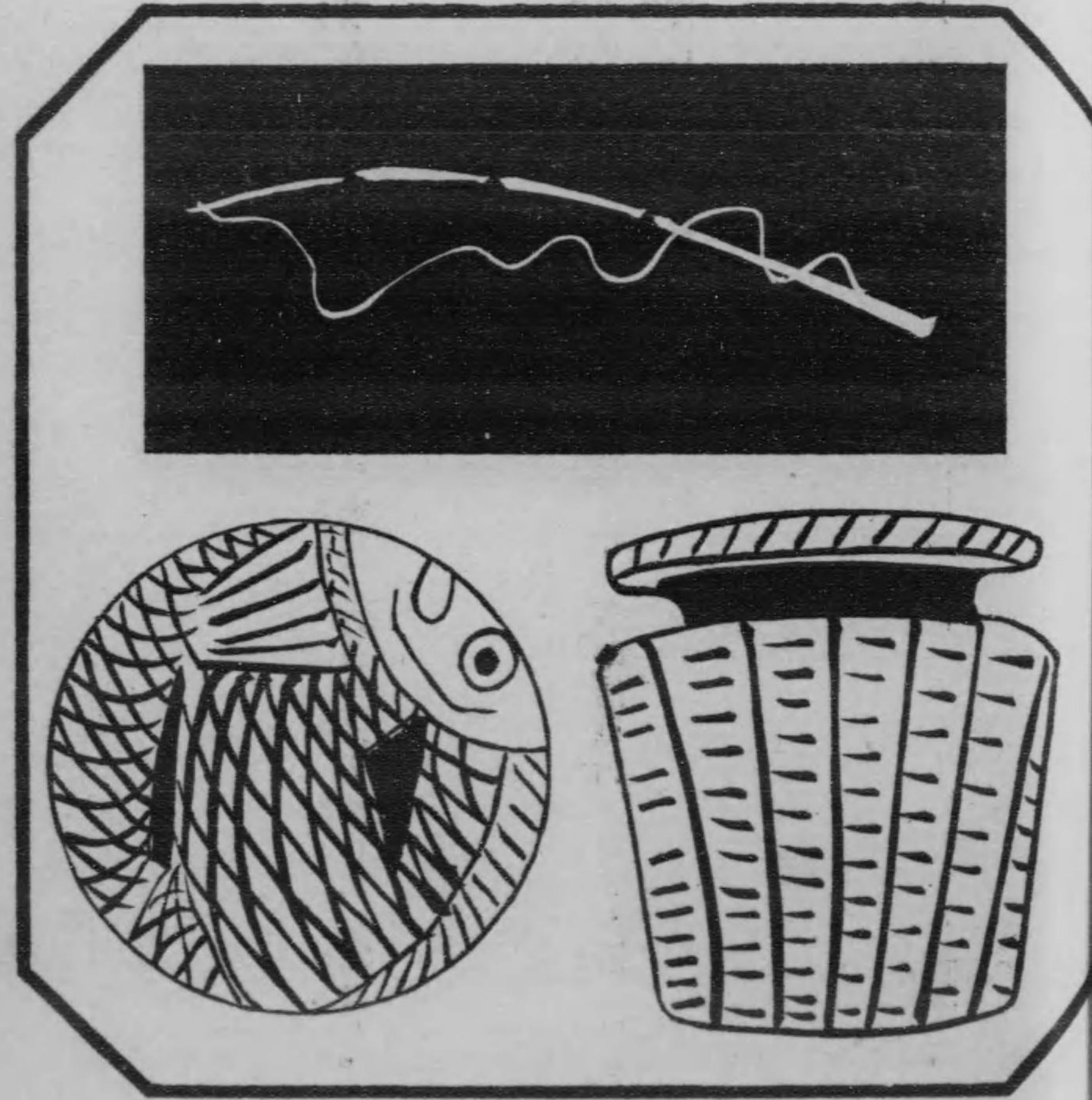
左盛

白しろと青あをのボカシなりきりの煉切ねりきりを包つつみて輪形わがたに丸まるめて圖づの如ごとく龜甲きかまのクズシをへラ
にて筋すぢを付つけるなり。

祝事用



惠比壽講用



向附

黄味色の岡時雨にて日之出を紅にて出して堅く押し抜きたるなり。

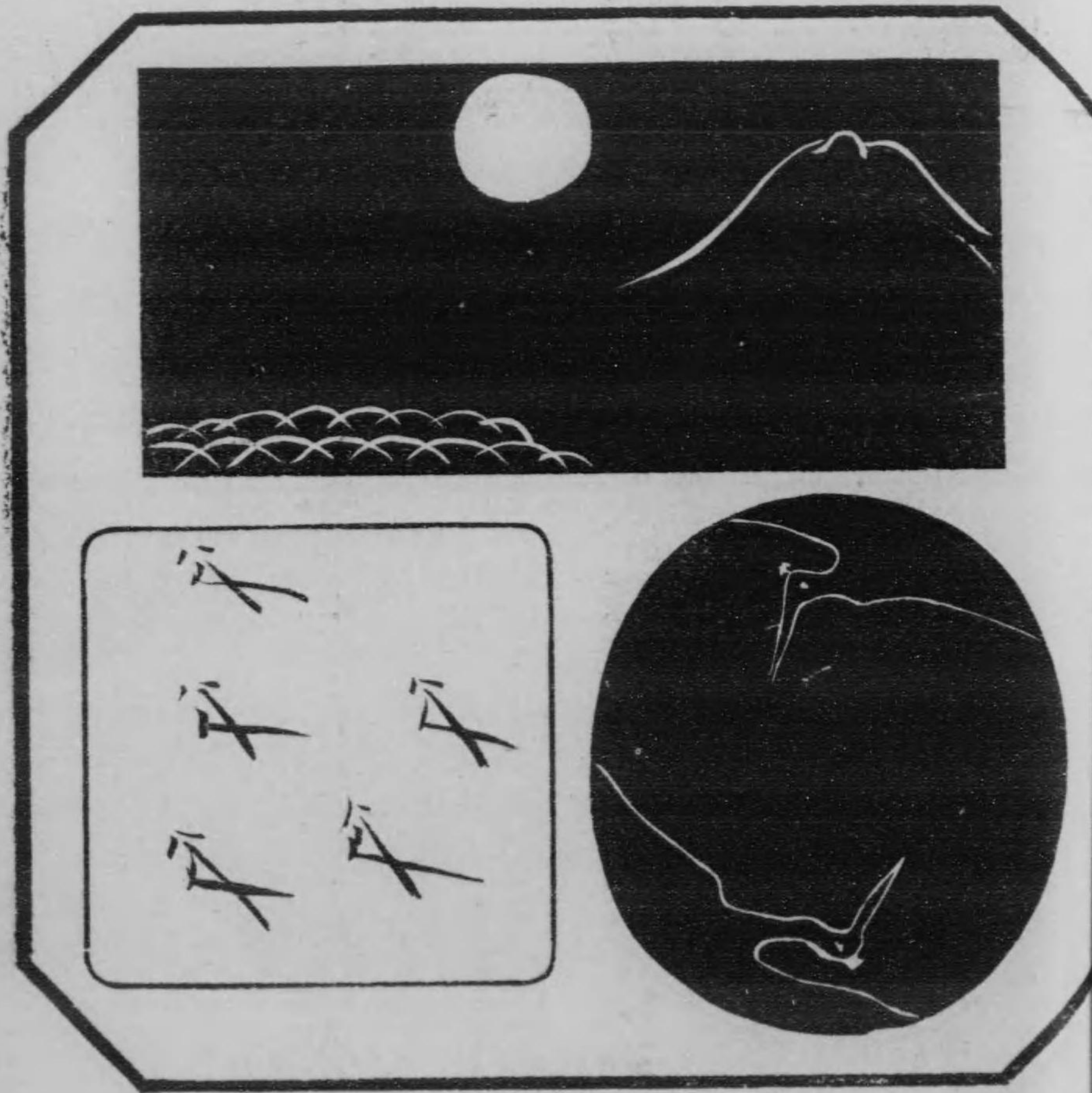
右盛

薄紅の煉切を輪形に包みて其の上に白の薯蕷羹にて壽の一字を書きたるなり。

左盛

牛肥を包みて龜甲形に作りて其の上に青の金團を箸にて植へ込みたるなり。

祝 事 用



向 附

白の薯蕷羹にて魚釣竿に糸は小豆羹にて書いて後ち流したる物なり。

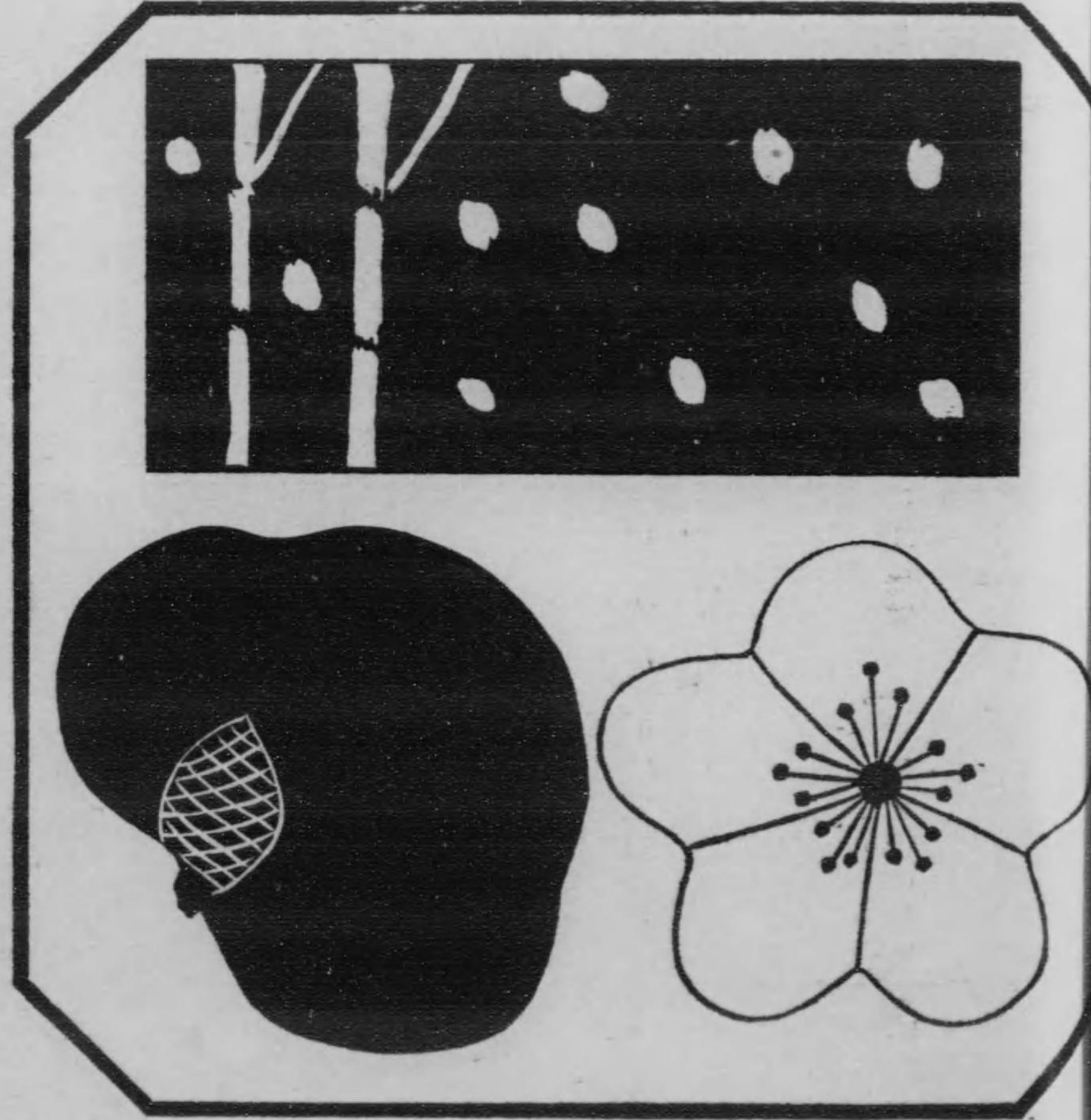
右 附

籠は黄色の煉切にて包みて圖の如く作り籠の頭は折りつまみ筋はクシの平
面にて押し附けたるなり。

左 附

紅の煉切を丸形に包みて鯛の圖の筋は全部へらにて附けたる物なり。

梅 竹 松



向 附

小豆羹にて浪及び山は絞り出しにて書きて日の出は煉切にて作りて入れて上より挽茶羹を流したるなり。

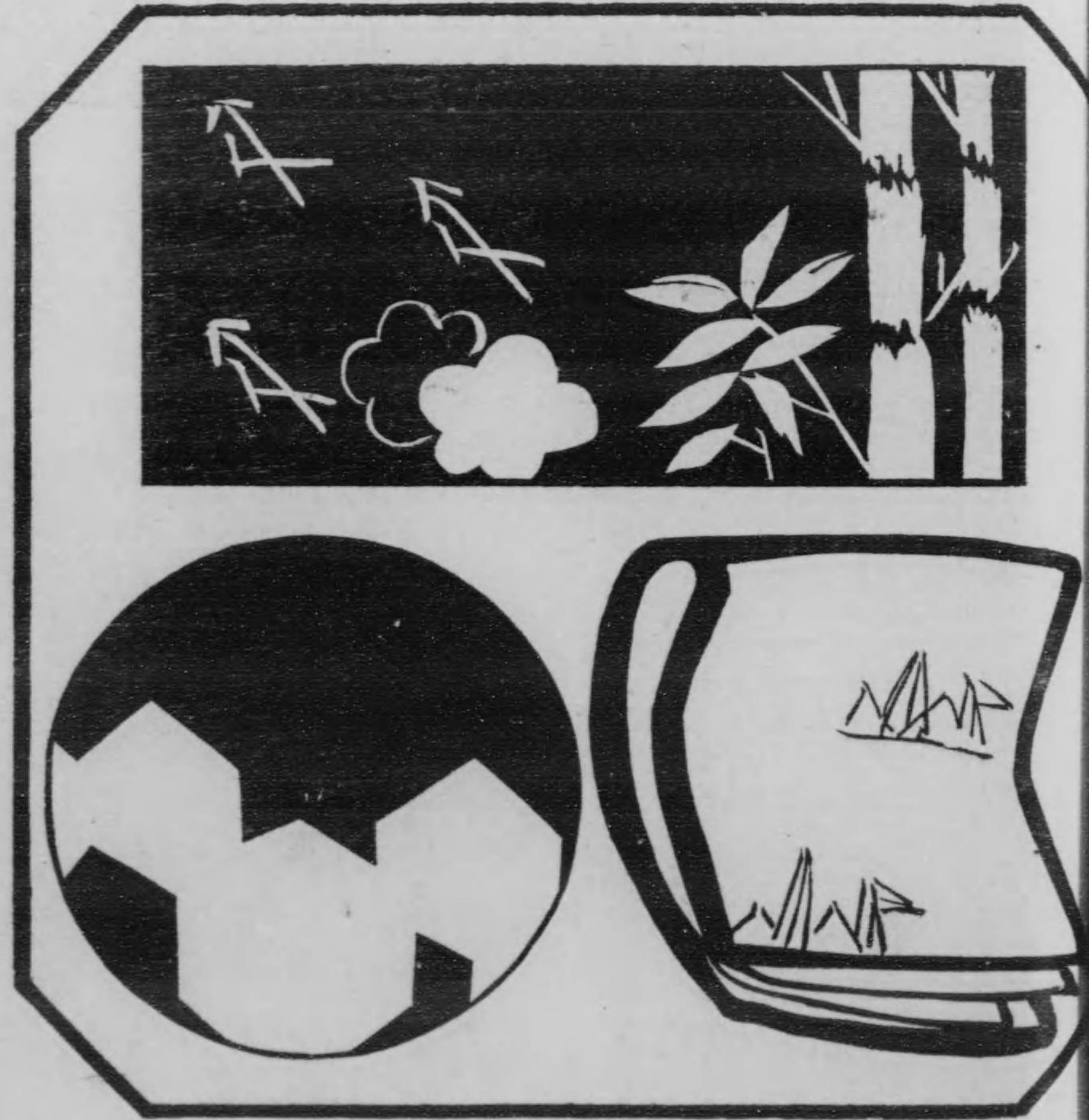
右 附

白の煉切を丸小判に包みて上下より鶴の半面を指先きにて押して鶴の部分

左 附

を高く浮き出させたる物なり。
紅臺の岡時雨にて平面に押して其の上に挽茶羹の絞り出しにて松の落葉を書きしなり。

祝 事 用



向 附

小倉羹を流して其上より竹の棒にて二本押したるなり。

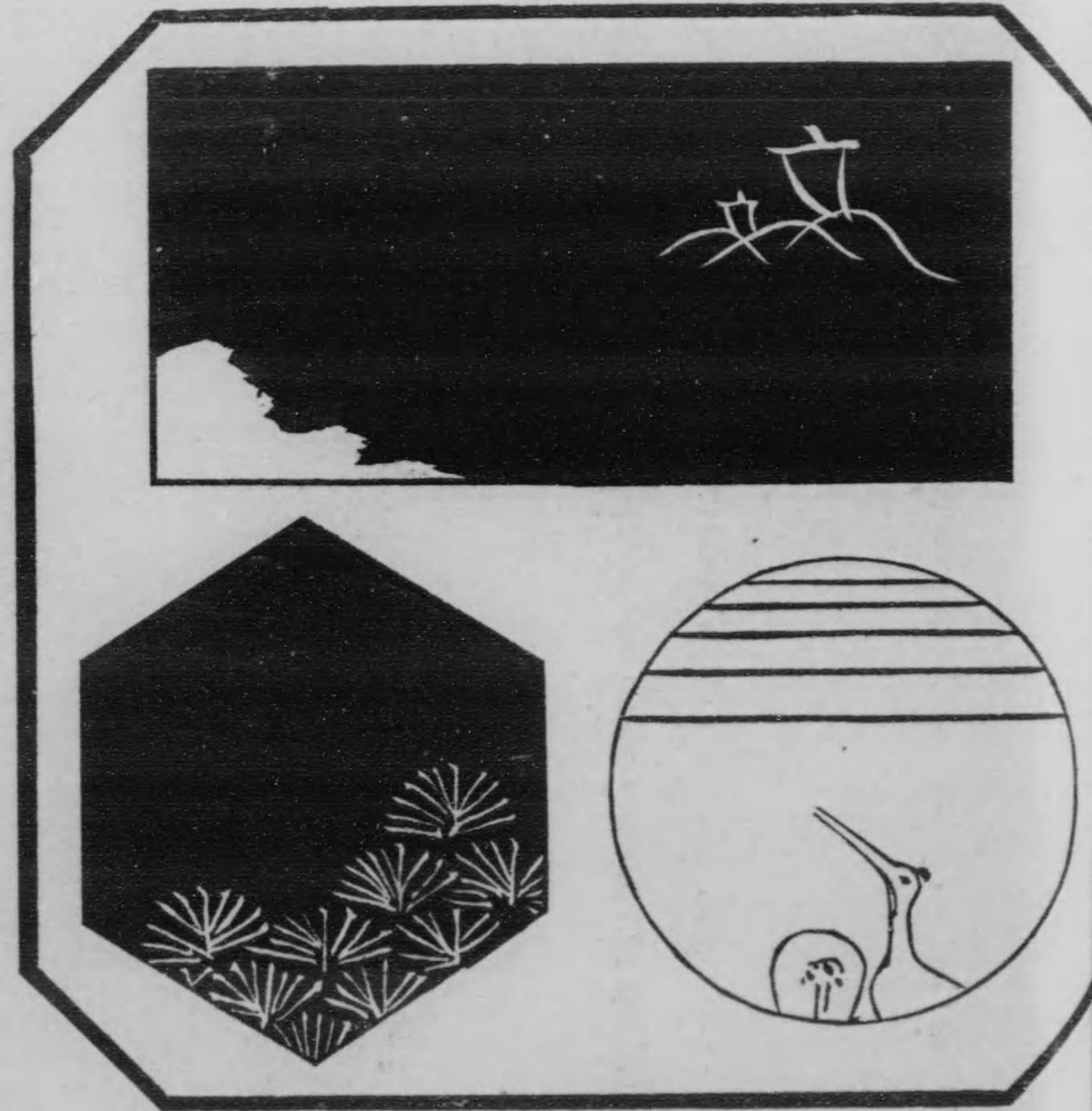
右 附

梅は紅の煉切にて形を作り筋はへらにて穴は揚子にて附けるなり。

左 附

青の牛肥を包みて松形に作りて其上に煉切のニツケ色の松笠を附けたるなり。

祝 事 用



向 附

松竹梅は型紙を利用してバラピン紙の上に小豆羹にて刷り出して其れを舟に張りて其の上に挽茶羹を流したるなり。

右 附

白箔の上に紅を下に張り合せし煉切を伸して白の上部に折鶴の模様をへらにて書き押しとして中に牛肥玉を入れて二ツ折として宮中の袖模様を出したるなり。

左 附

紅の煉切を丸形に包みて白の龜甲を武力形にて抜きて張りて押し後ちフルイに押し付けたるなり。

向附

挽茶羹にて舟及び浪又は岩を小豆羹にて書きて其の上に流せし物なり。

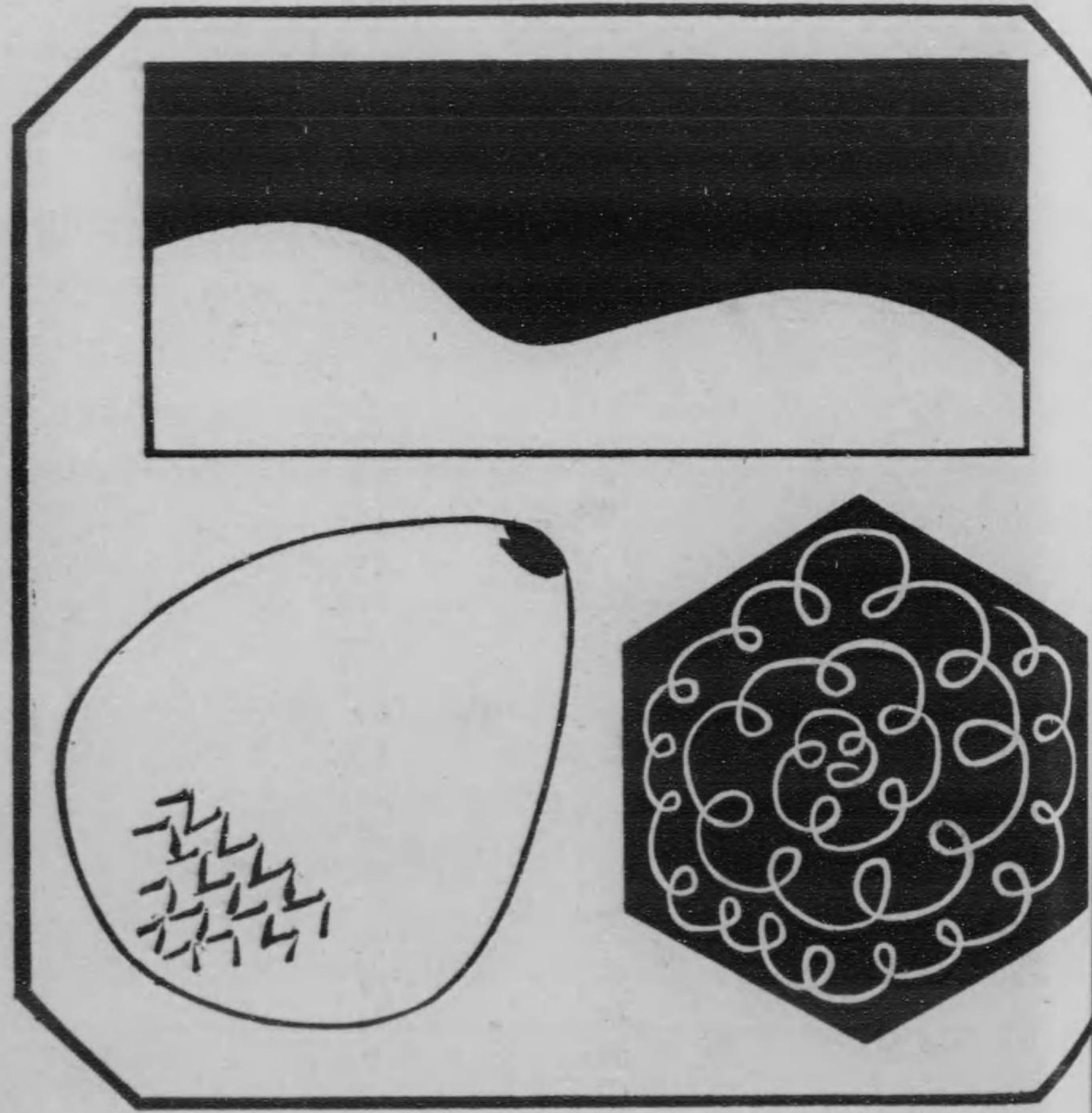
右附

白と紅の張り合せの煉切にて包みて紅を上丸き輪形として鶴を一羽は指にて押し上げて一羽は針金を輪にして押し書きにして作りし物なり。

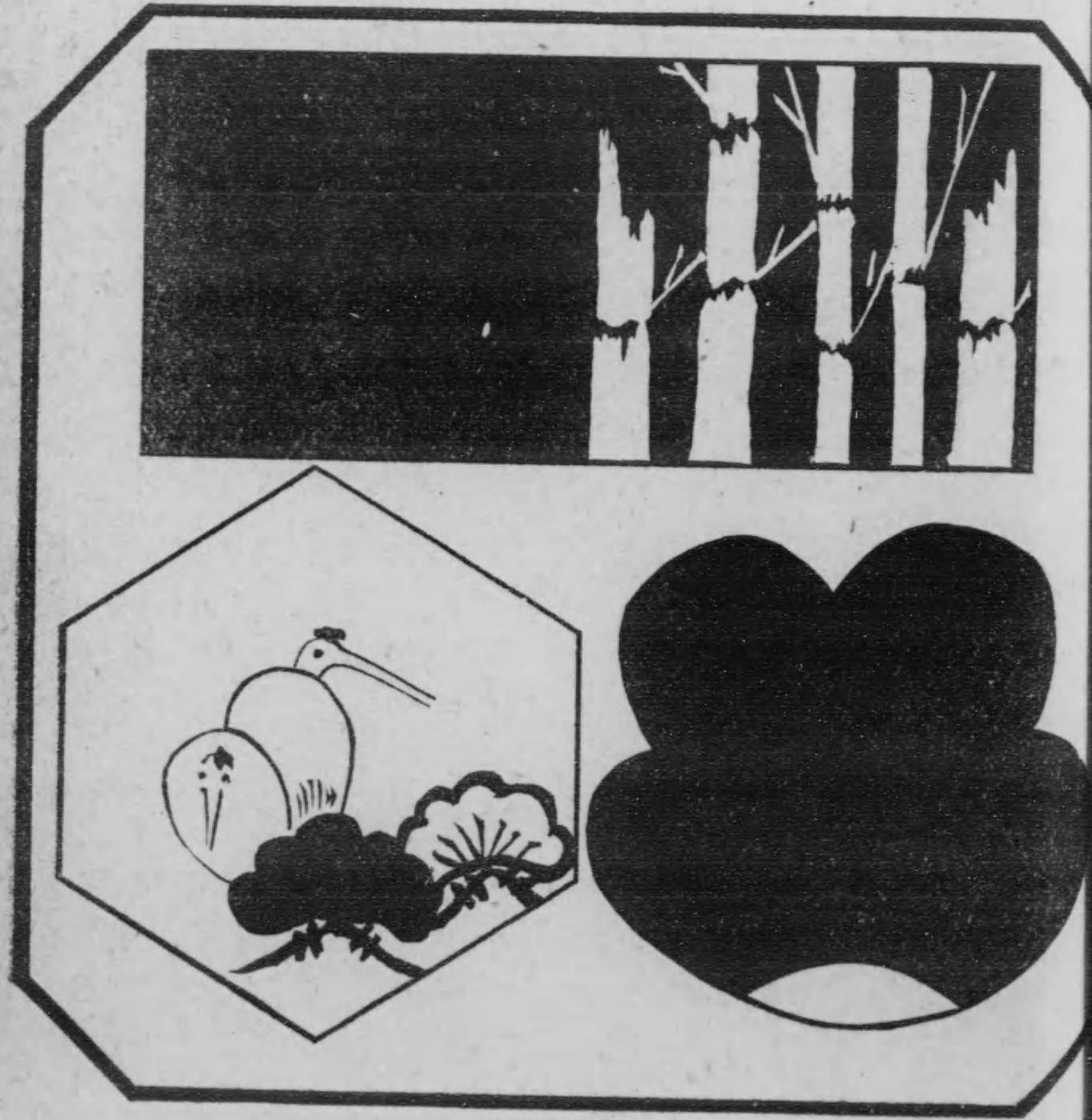
左附

小豆餡の煉切にて龜甲の形を作りて其の上に松の葉の筋はへらにて押したる物なり。

祝事用



松竹梅鶴龜



向附

白と紅のボカシ羊羹にて朝早く日の出の昇る時の海面を見せたるなり。

右盛

龜甲は白の牛肥を包みて形を作り其の上に挽茶色の小田巻の糸を圖の如き輪に掛けたるなり。

左盛

白の煉切を玉子形に包みて頭に赤を付け尾に小豆餡を付けて筋はへらにて附けて鶴の形を見せるなり。

向附

竹を白にて地を挽茶の兩時雨にて押し抜きたるなり。

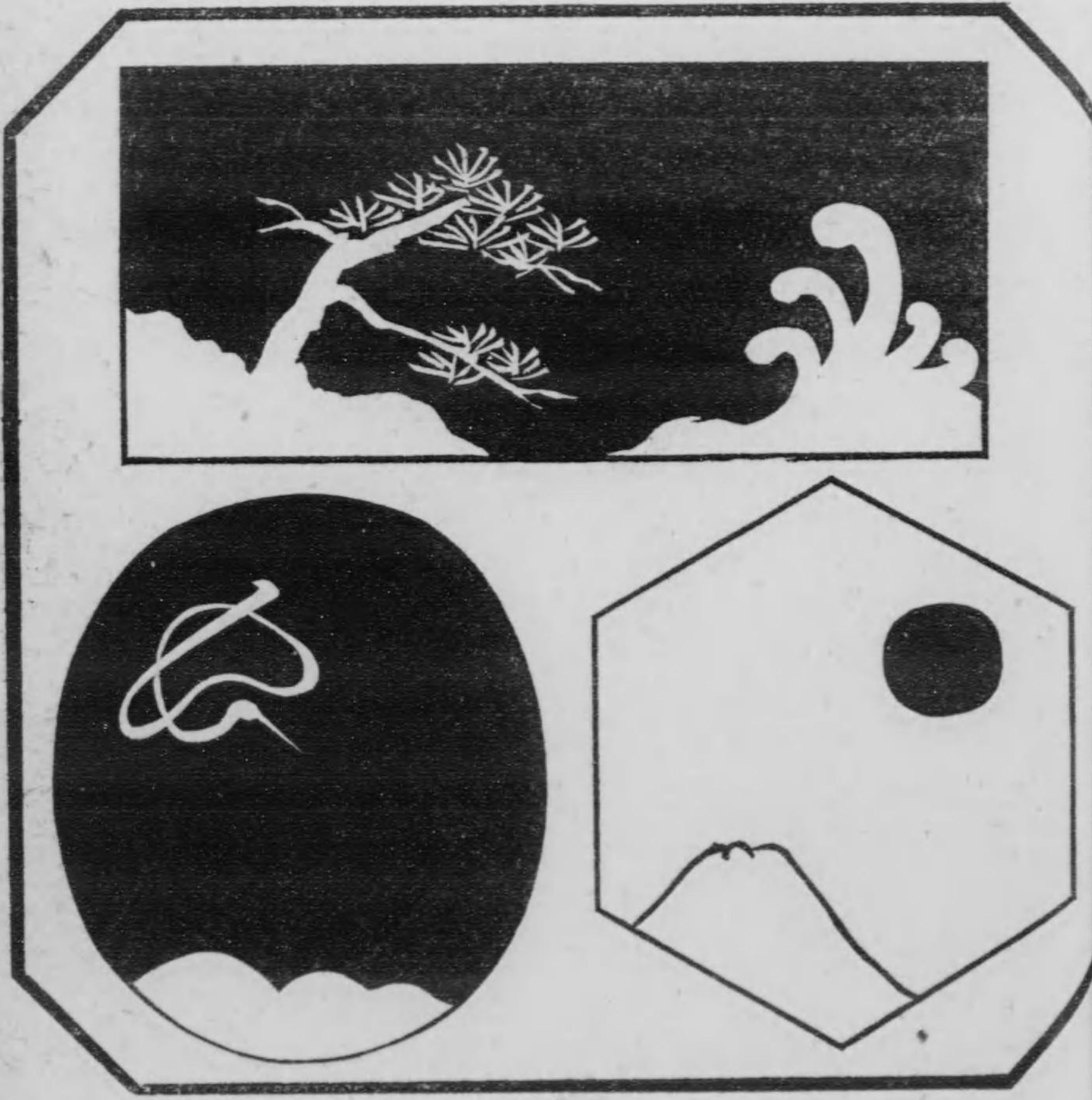
右盛

紅臺の牛肥を包みて圖の如く四ツの花辨を指にて押し出して下の一辨の所に白の薯蕷羹を半月の形に掛けて紅白の花を見せたるなり。

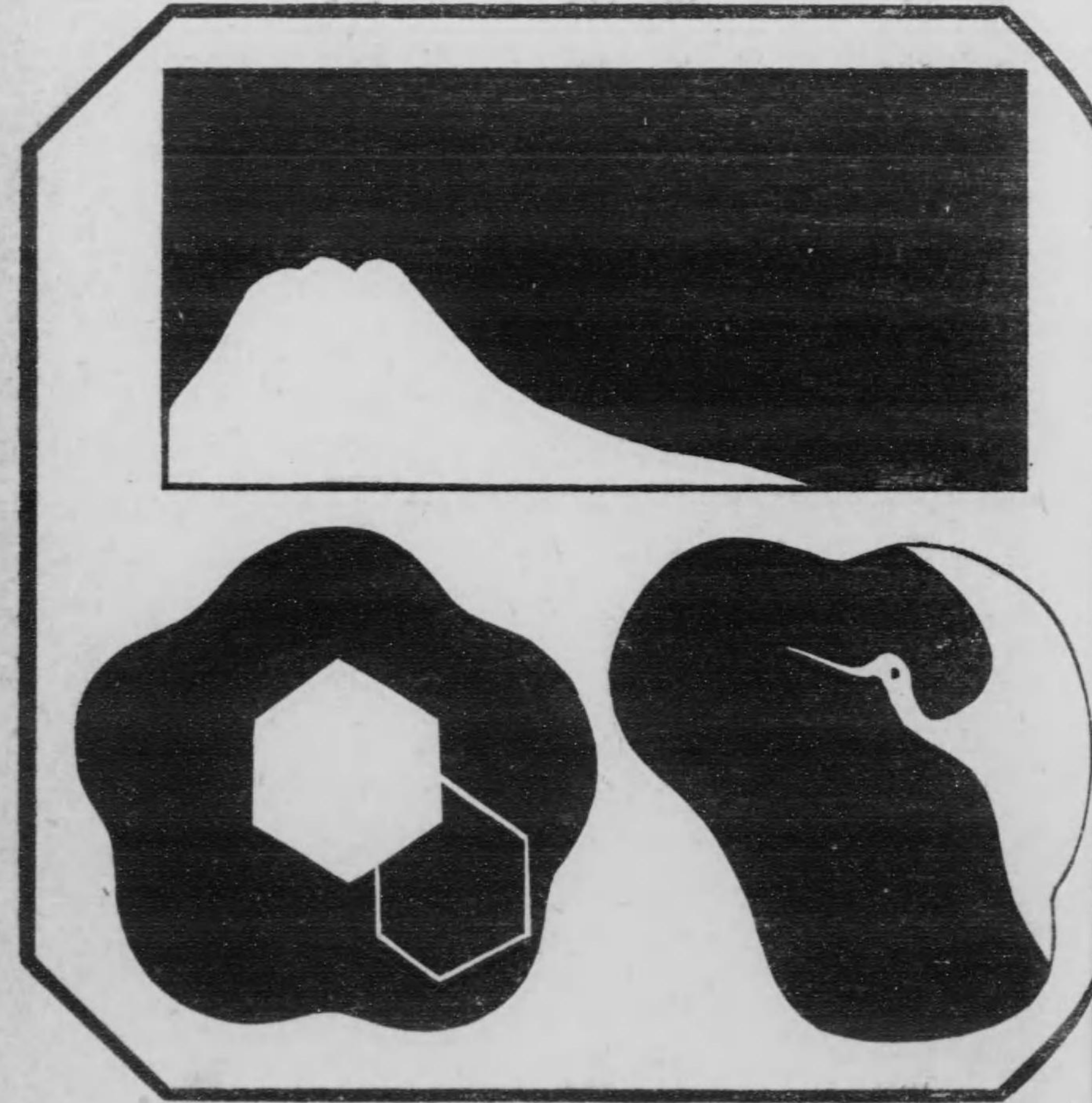
左盛

白の煉切を包みて龜甲形に作りて松を青の箔にて刷込みとして鶴を針金を丸き輪にしてニツケ粉を附けて押して口先きはへラにて筋を附けるなり。

祝事用



祝 事 用



紅の牛肥を丸小判に包みて下の方に浪を白の薯蕷羹を掛けて鶴を白の煉切にて作りて上置きとしたる物なり。

左 盛

白の煉切にて包み龜甲形に作りて富士山を小豆餡にて日の出を紅にて張りて筋抜の平面に押ししたる物なり。

右 盛

浪を白餡にして松の木を小豆餡にして岩を共色にして地を薄挽茶餡の岡時雨にて押し抜きて松の葉を竹箸にて挽茶ソボロを植へ込みたるなり。

向 附

向附

山を白箔にて地を小豆箔にて押し抜きたる岡時雨なり。

右盛

白及青の半張り合せの煉切を包みて白を上にして松形を作りて白の部分を指にて指して鶴の舞上りし半面を見せたるなり。

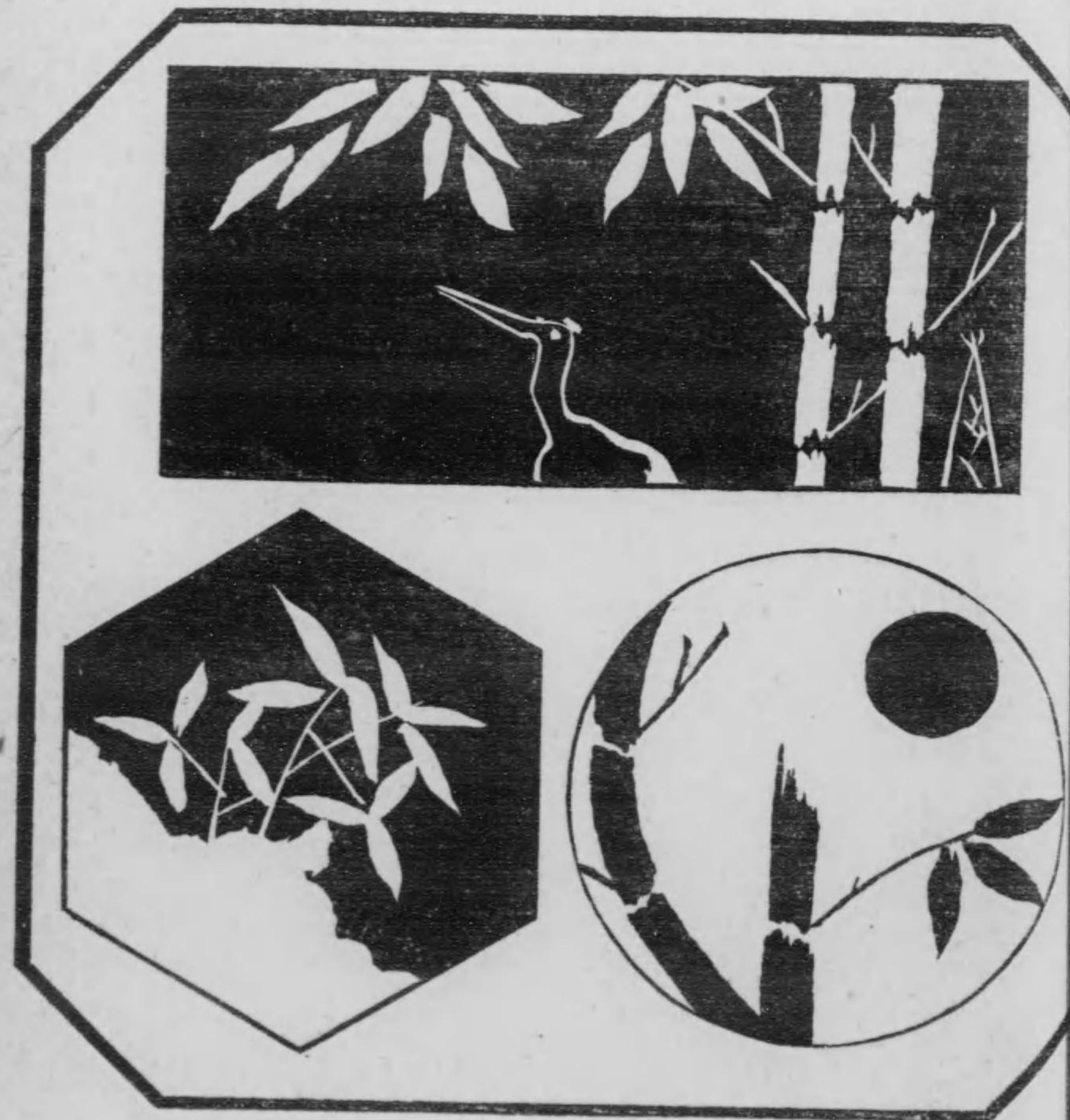
左盛

紅臺の煉切を梅形に包みて作り其の上に龜甲を武力形抜きを輪甲と龜甲の二枚を張りて指にて指して押しフルイの目に押ししたる物なり。

祝事用



祝 事 用



黄色きいろの煉切ねりきりを包みつて圖ずの如ごとき形かたちを作りつくて型紙かたがみを利用りようして表面おもてに茶色ちやいろにて竹たけの模様もやうを見せみせたるなり。

左ひだり 盛もり

白しろの牛皮ぎうひを包みつて梅形うめがたに作りつくて其その表面うへ紅べに箔はくの金きん團とんを竹たけ箸はしにて植う込みこみたるなり。

右みぎ 盛もり

小豆あずき羹かんにて松まつを書かきて長なが鶴づるを白しろの煉切ねりきりにて作りつくりて入いれて挽ひ茶ちや羹かんを以もつて作つくり流ながすなり。

向むかひ 附つ

向附

型紙を以てバラピン紙の上に小豆羹にて刷り込みて其れを舟の中に張りて其の上より挽茶羹を流したるなり。

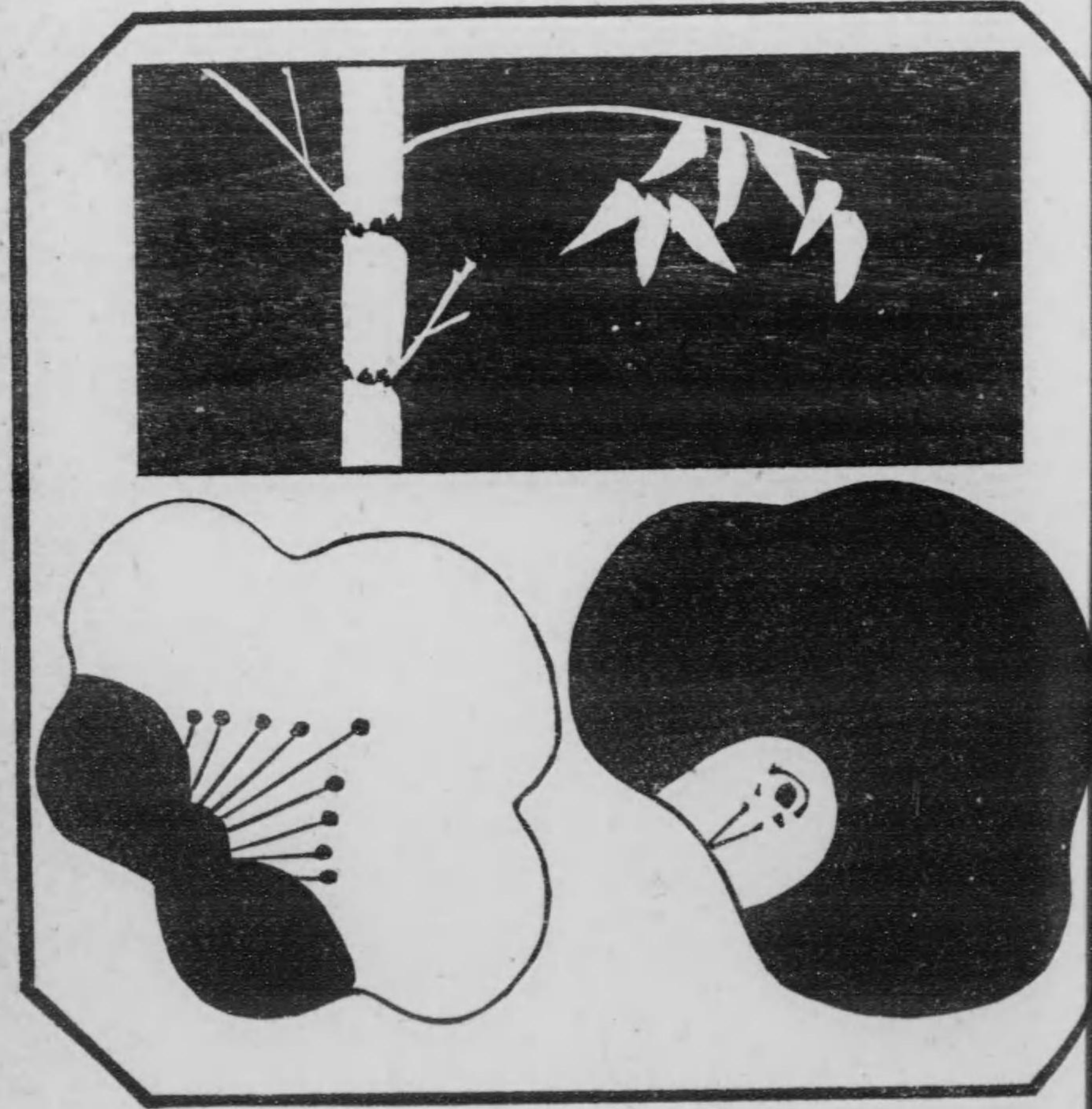
右盛

丸形の時雨型にて地を白臺にして日の出を赤にして竹を青にて押し抜きたるなり。

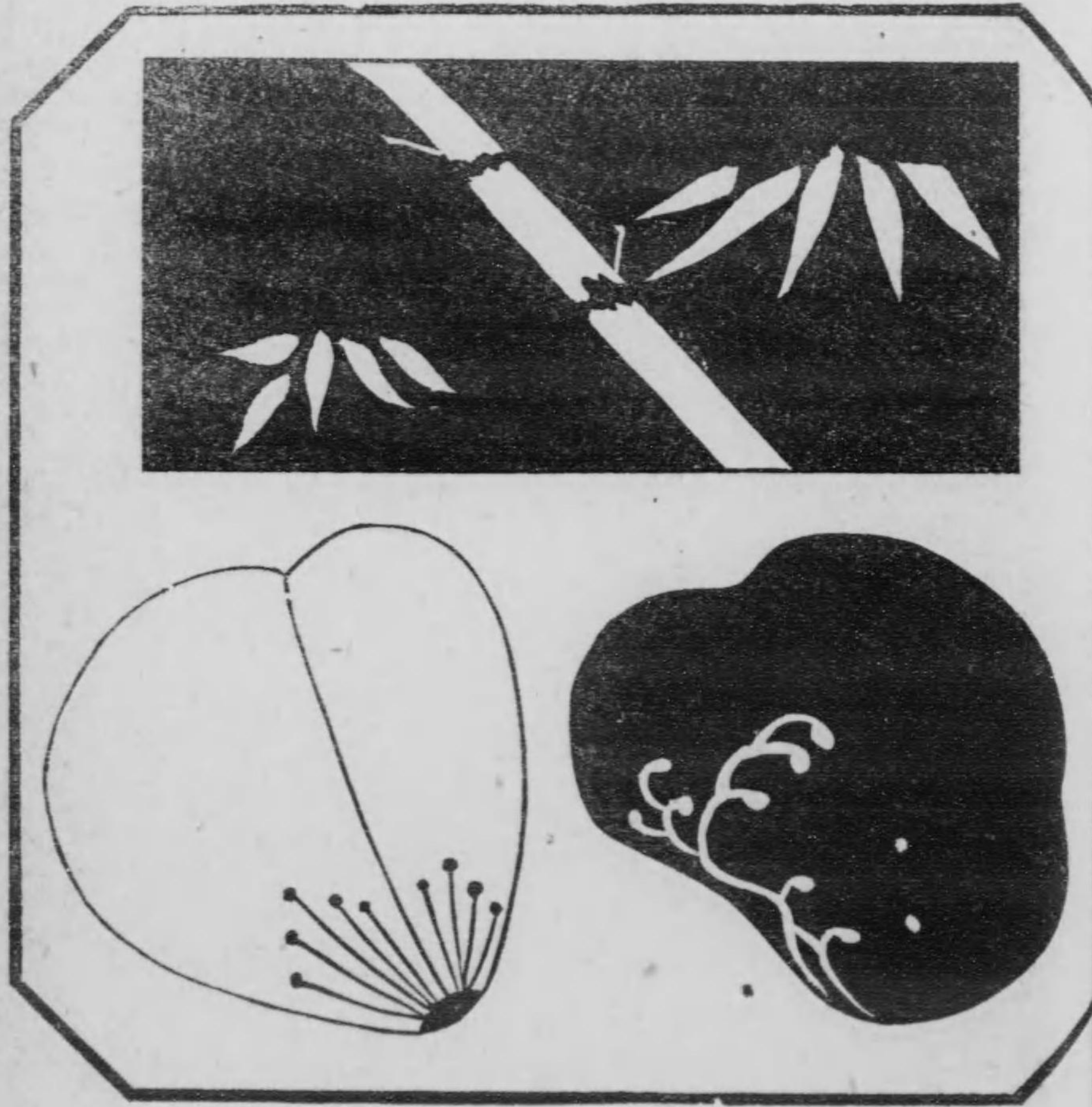
左盛

紅臺の牛肥にて龜甲の形を作りて其の上に羊羹の絞り出しにて山及び笹を書きたるなり。

祝事用



梅 竹 松



向 附

竹は小豆羹にて羊羹舟の中に書いて上より白の薯蕷羹を流したるなり。

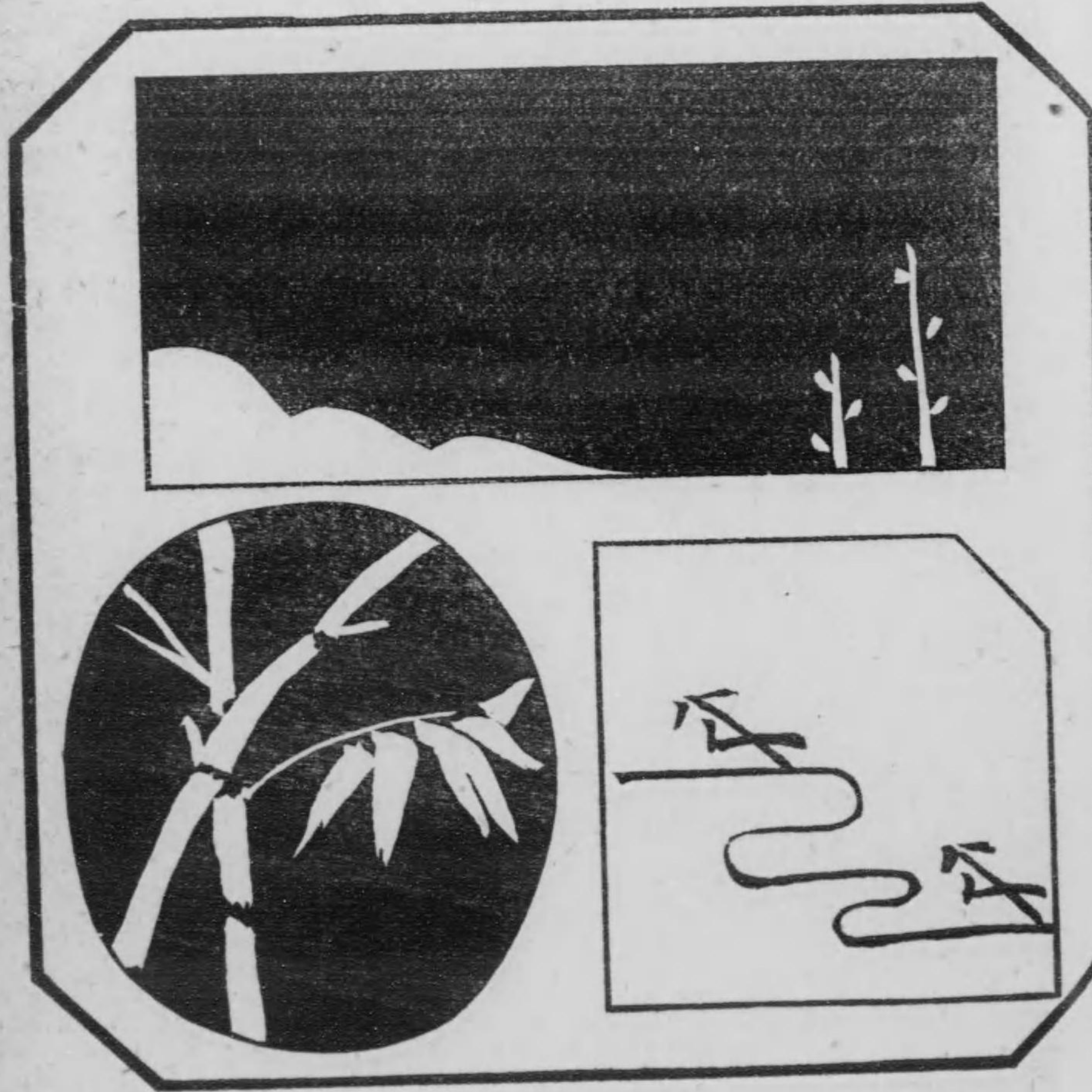
右 盛

挽茶色の煉切を包みて松形に作りて鶴の所を丸く白を張りて頭を指先きにて押して高くして作りたるなり。

左 盛

紅の煉切にて圖の如き梅の花の形を三角定木を利用して作りし物なり。

梅 竹 松



紅べにの煉切ねりきりを以もつて圖づの如ごとき梅うめの二枚花形ふたまいはながたを作りつくて筋すぢはへへラにて付つけたる事こと

左ひだり
附つ

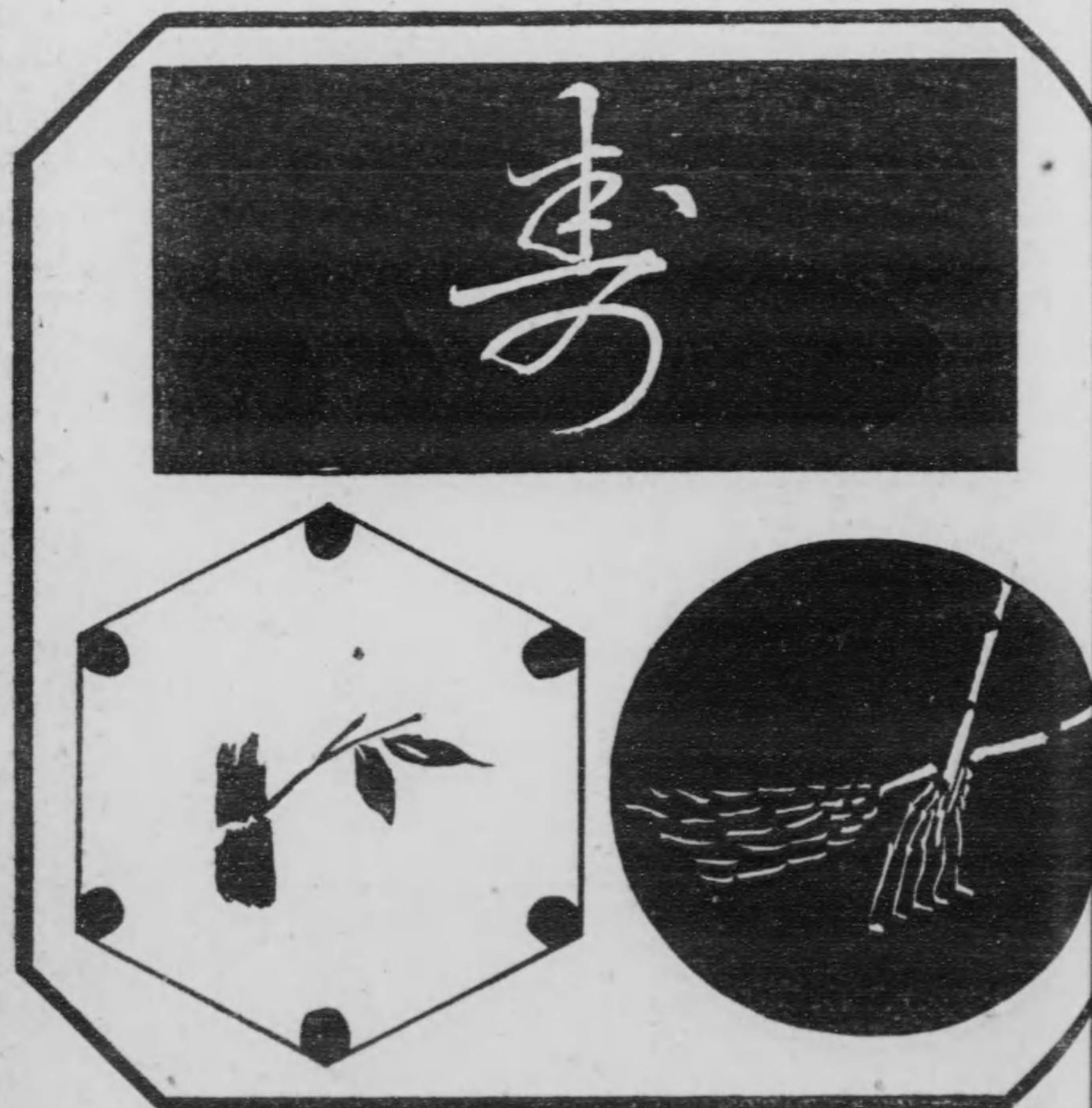
青あをの牛皮ぎうひを包つみて松竹まつたけに作りつくて其その上うへに浪なみを小豆羹あずきかんの絞しぼり書がきとなしたるなり。

右みぎ
附つ

小豆餠臺あずきあんたいの岡時雨おかしぐれにて竹たけを白餠しろあんにて押おし抜ぬきたるなり。

向むかひ
附つ

年 重 祝 用



向 附

梅の新枝及び地の山は小豆羹にて書きて其の上に紅色の羊羹を流して日の出羹となすなり。

右 附

黄色餡の岡時雨を平面に押して角を切りて其の上に小豆羹の絞り出しにて落松葉及び水の流を書きしなり。

左 附

挽茶臺の煉切にて丸小判に包みて其の上に竹の棒切れを利用して押し付けて笹はヘラにて付けたる物なり。

向附

白の薯蕷羹の臺にして壽の字を紅羹にて絞出して書きて其の上全部流したるなり。

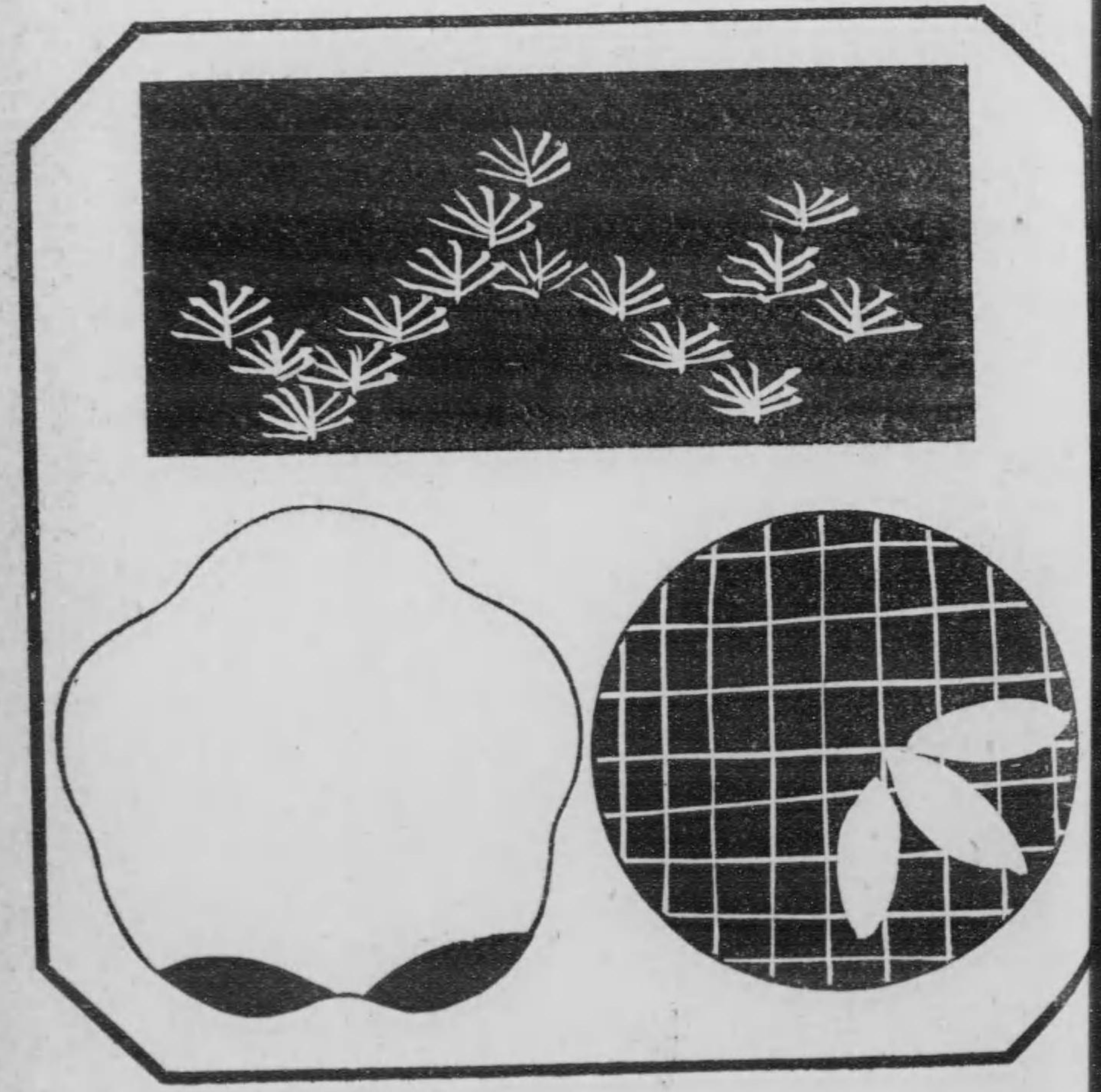
右附

黄色の煉切の丸形の上部に型紙を利用してニツケ粉にて高砂子を刷込みたるなり。

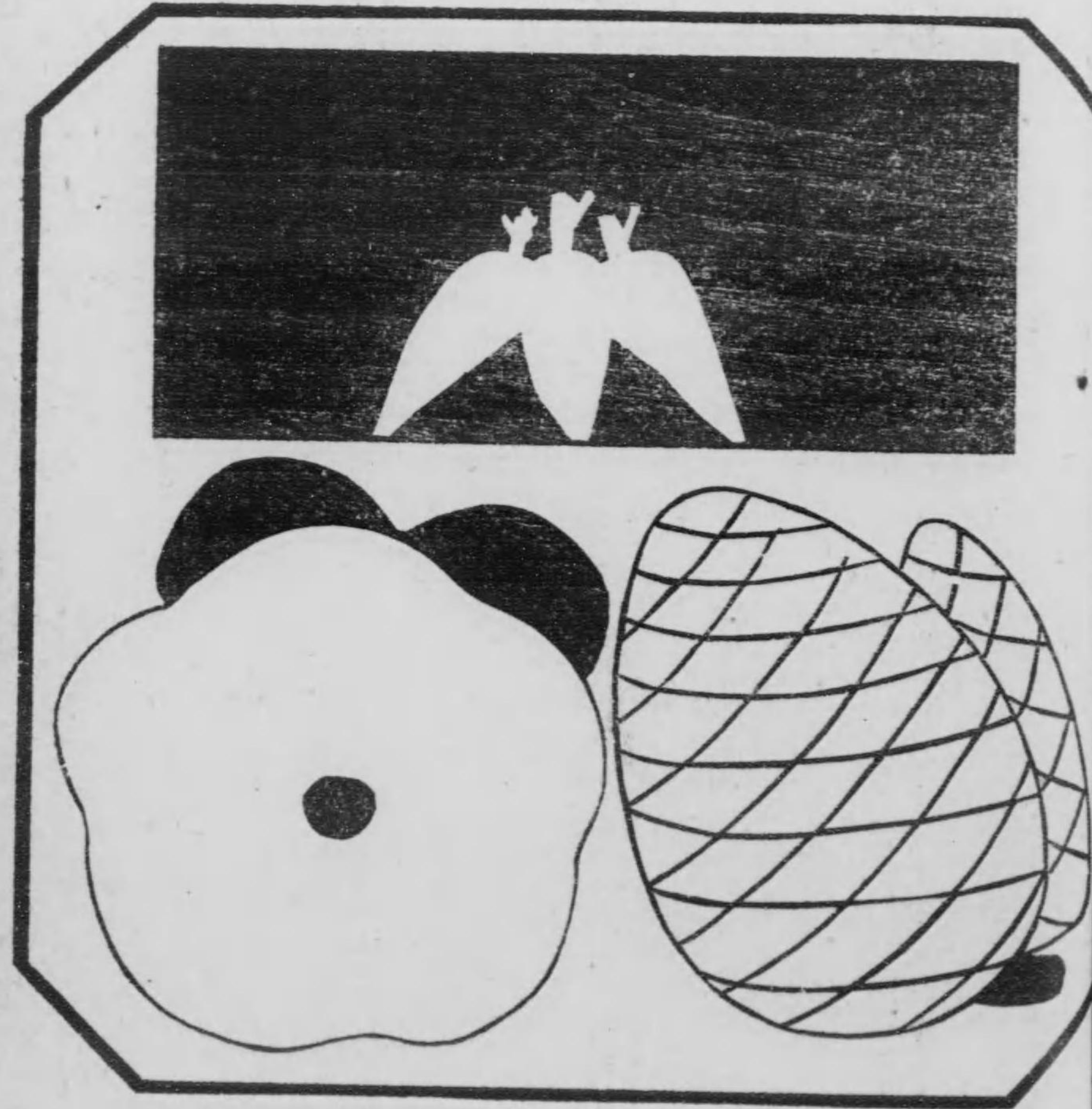
左附

紅臺の煉切を龜甲形に作りて角の所に大納豆の煮込豆を六方に付けて真中の所に捺又はへらにて竹の押し模様を出したるなり。

梅 竹 松



梅 竹 松



紅の煉切の梅の花にて上三枚を指にて形をとりて下二枚をヘラにて筋付けとして作りたるなり。

左 附

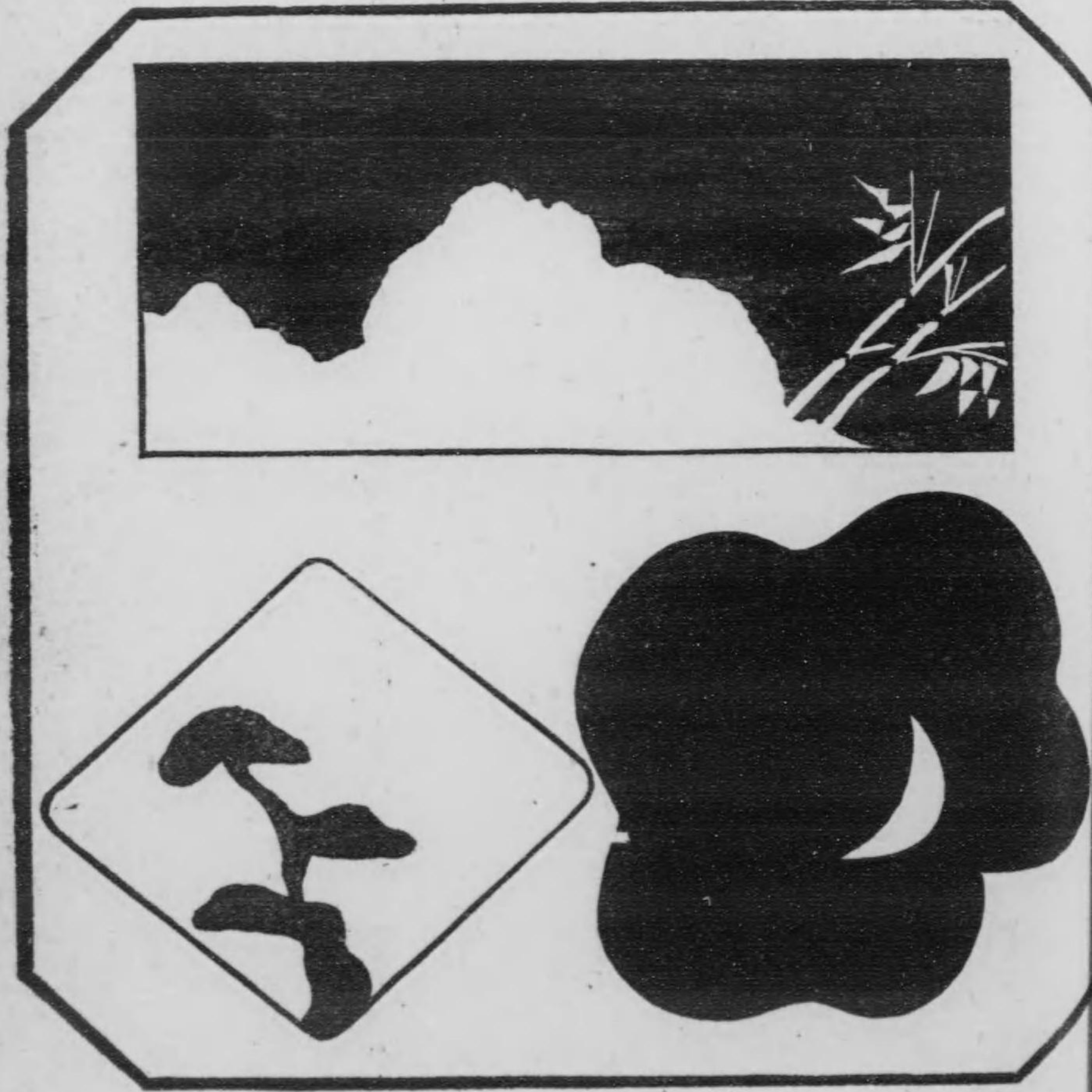
白の牛肥を包みて丸形に作りて其の上に白の小田巻糸を掛けて上に笹を作りて上置きとなしたる物なり。

右 附

小豆餡臺の岡時雨にて平面に押し抜きて後に上部に箸にて挽茶餡のソボロを松形の如く植え込みたる物なり。

向 附

梅 竹 松



向 附

白臺の岡時雨にて竹を挽茶館にて出し木形利用にて堅く押し抜きたるなり

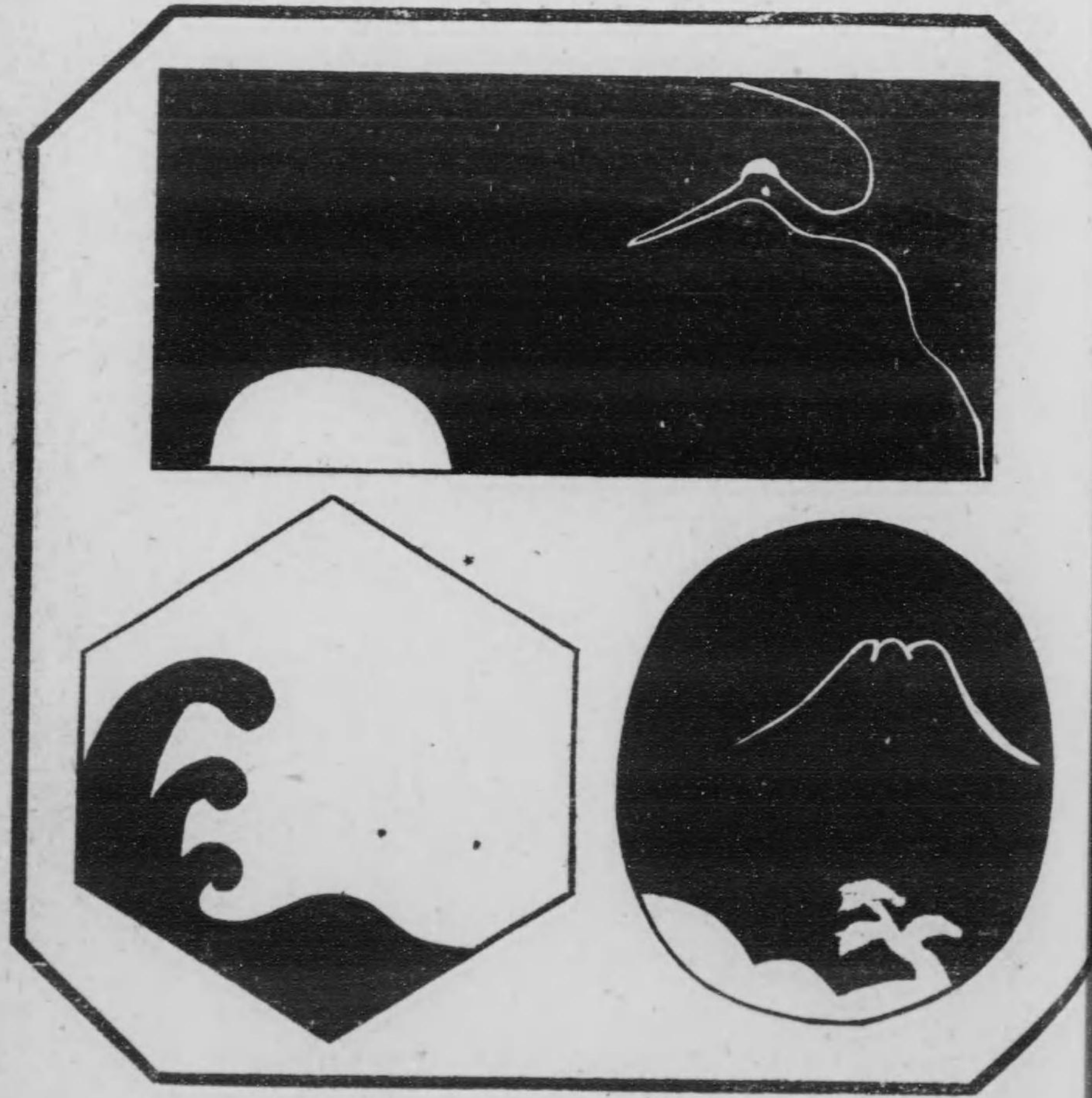
右 盛

挽茶色の煉切にて松笠の形を作りて小持ち形として筋をへらにて付けたるなり。

左 盛

紅臺の煉切にて梅形に作り上部に二面の花瓣を見せて女夫梅の形を作る物なり。

祝 事 用



向 附

山は小豆羹にて絞り出しにて舟に書きて竹を青羊羹にて書き地を白の薯蕷羹にて流したるなり。

右 附

煉切を紅色にて染めて圖の如き横向きの梅を作りて真中に黄色餡にて月形を付けて押ししたるなり。

左 附

黄色の雪平臺に包みて圖面と同じ形に作りて松は焼き目にて出したるなり

向むかう 附つ

挽茶羹ひきちまかんにして煉切ねりきりにて日の出ひのおよ及び鶴つるの半身はんしんを見せる思おもひにて作りつくて入れて流ながしたるなり。

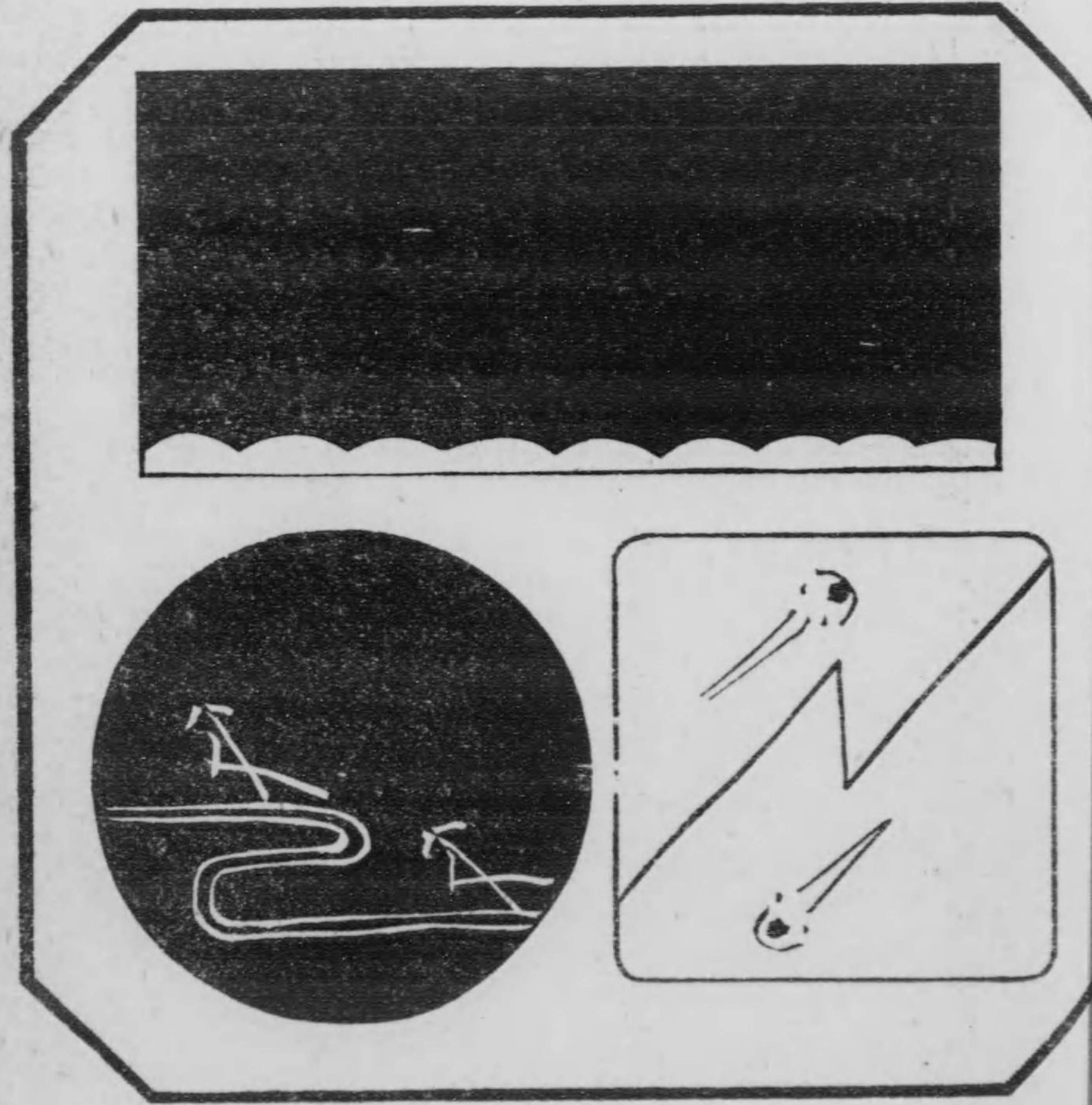
右みぎ 附つ

紅べの煉切ねりきりを以もちて包つつみて上部じやうぶに白しろにて富士山ふじさんを指先ゆびさきにて刷すり込こみて下したの松まつ及地おきびを青あをにて押し込おこみてフルイフルイの目めにて押しおしたるなり。

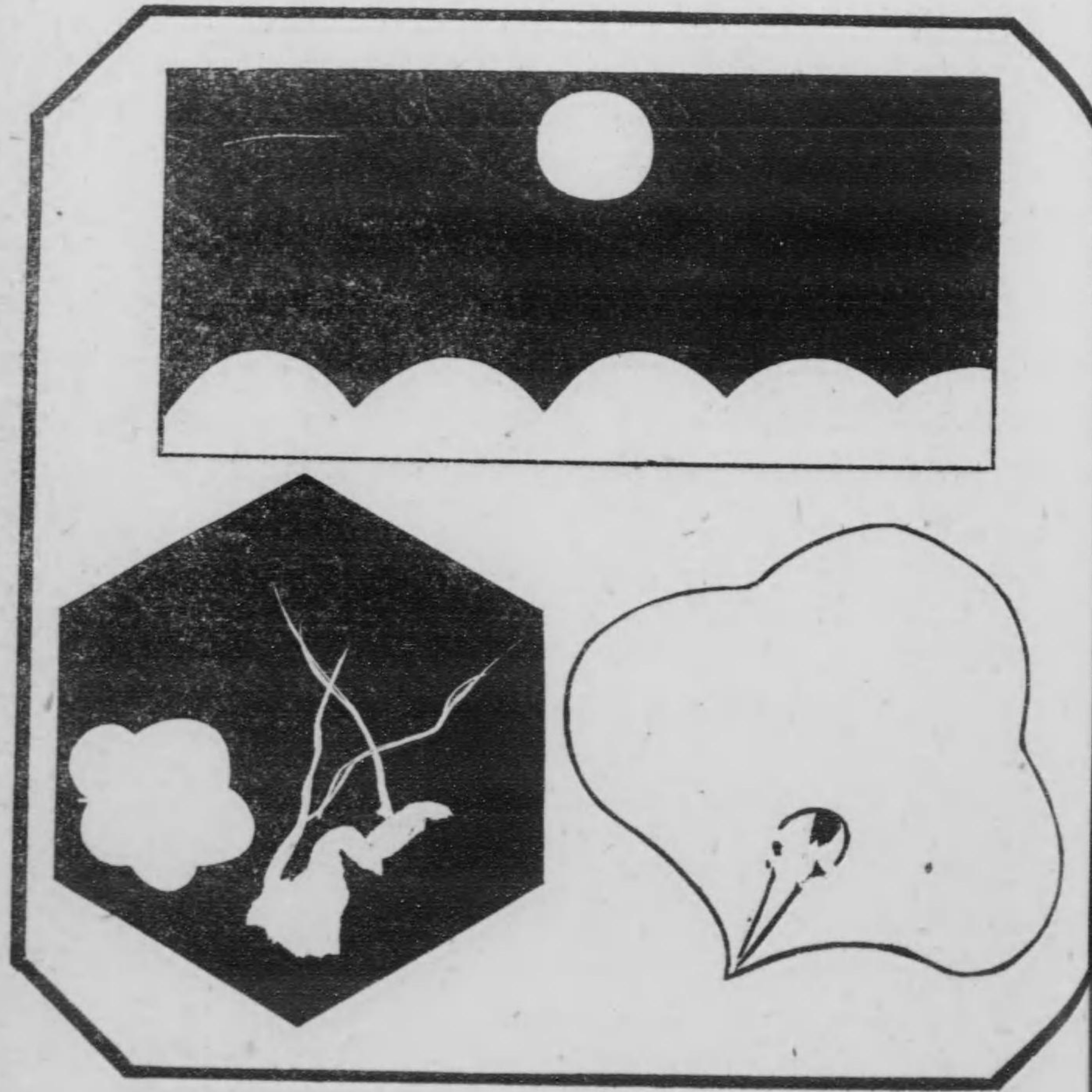
左ひだり 附つ

龜甲きつがまに浪なみは地色ぢいろを小豆餡あじきあんの岡時雨おかときぐれにして浪なみを白しろの餡あんにて木形利用きがたりのうにて押しおきたるなり。

祝 事 用



祝 事 用



向 附

日の出羹にて紅にて色を染めて下の平常の浪は白の暮菫羹にて書きて其上に流したる物なり。

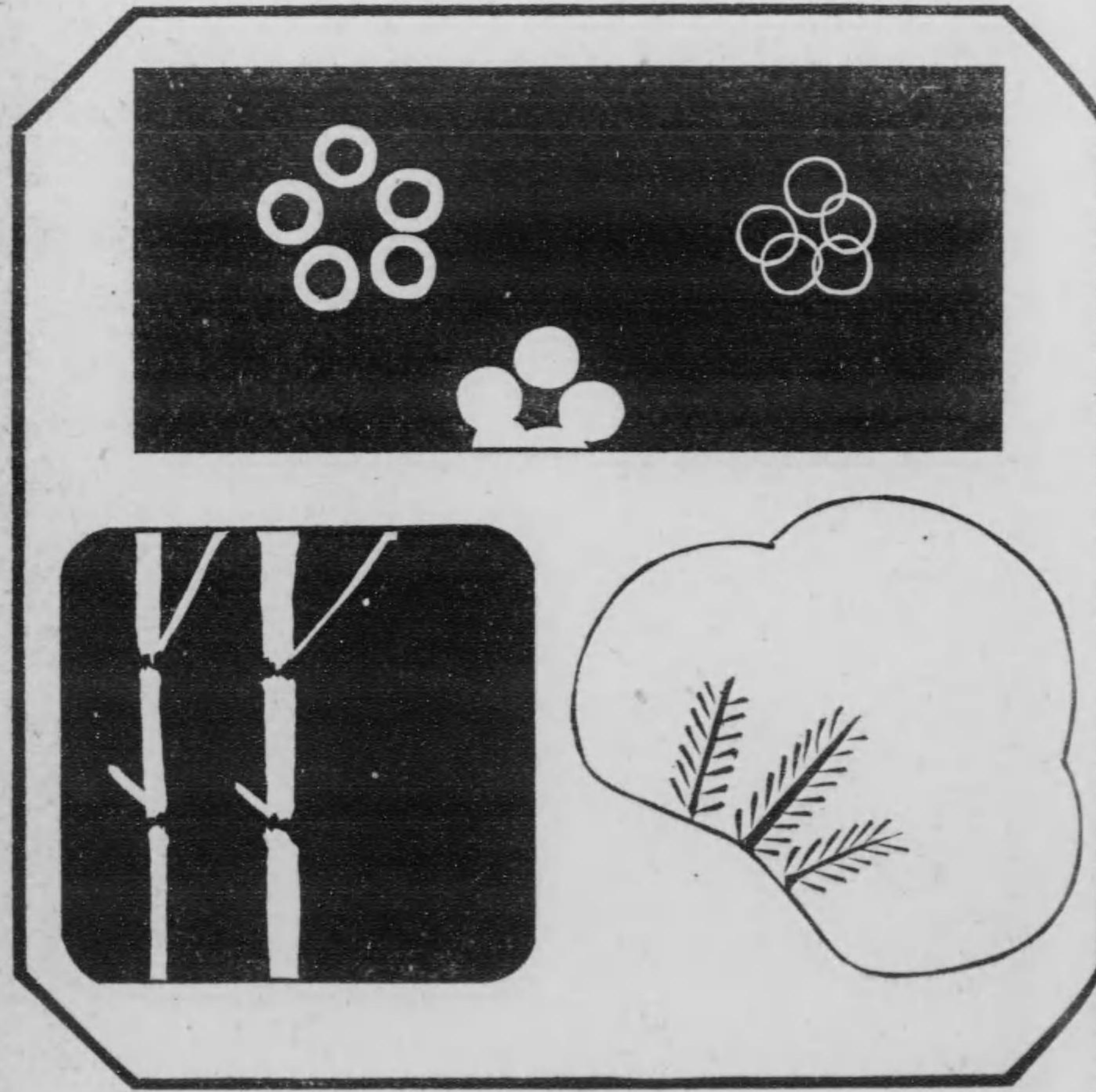
右 盛

白の煉切を角形に包みて筋をへらにて松川菱に付けて鶴の頭を指先きにて高く浮かせる様に押したるなり。

左 盛

草煉切を白形に作りて平面上に水の流れを針金にて落松葉をへらにて付けたるなり。

梅 竹 松



向 附

挽茶羹にして日之出は紅と黄色の混合色の煉切にて作りて入れ下の浪は白の菓漬煉切にて切り抜きて入れ流したる物なり。

右 盛

白と青ボカシの煉切にて包みて三重松の形に作りて鶴の頭を指先にて外へ押し頭を高く浮かせし物なり。

左 盛

薄紅煉切にて包みて龜甲形に作りて上に梅の枝を棒切を利用して押し梅の花を壹輪白煉切にて武力形抜きとして張り付けて指先にて平面に押したる物なり。

向附

小豆羹の中に大納豆の煮込豆を圖の如く五個宛揃へて梅の花の如き形ちとなして流したる物なり。

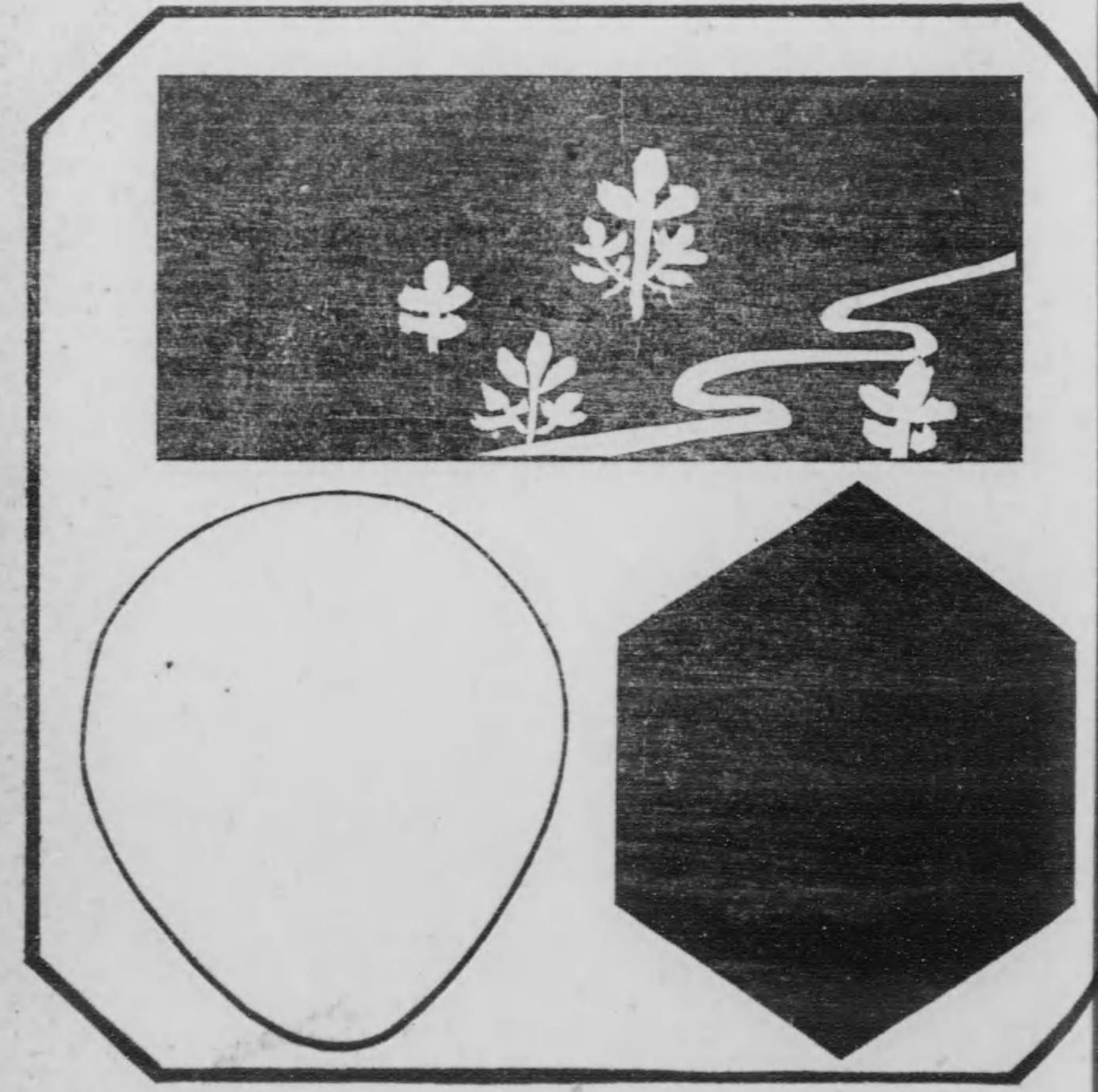
右盛

挽茶色の煉切に白を頭の方にボカシて松の形に作りて下部の凹みし處にへラにて新松の如く筋を付るなり。

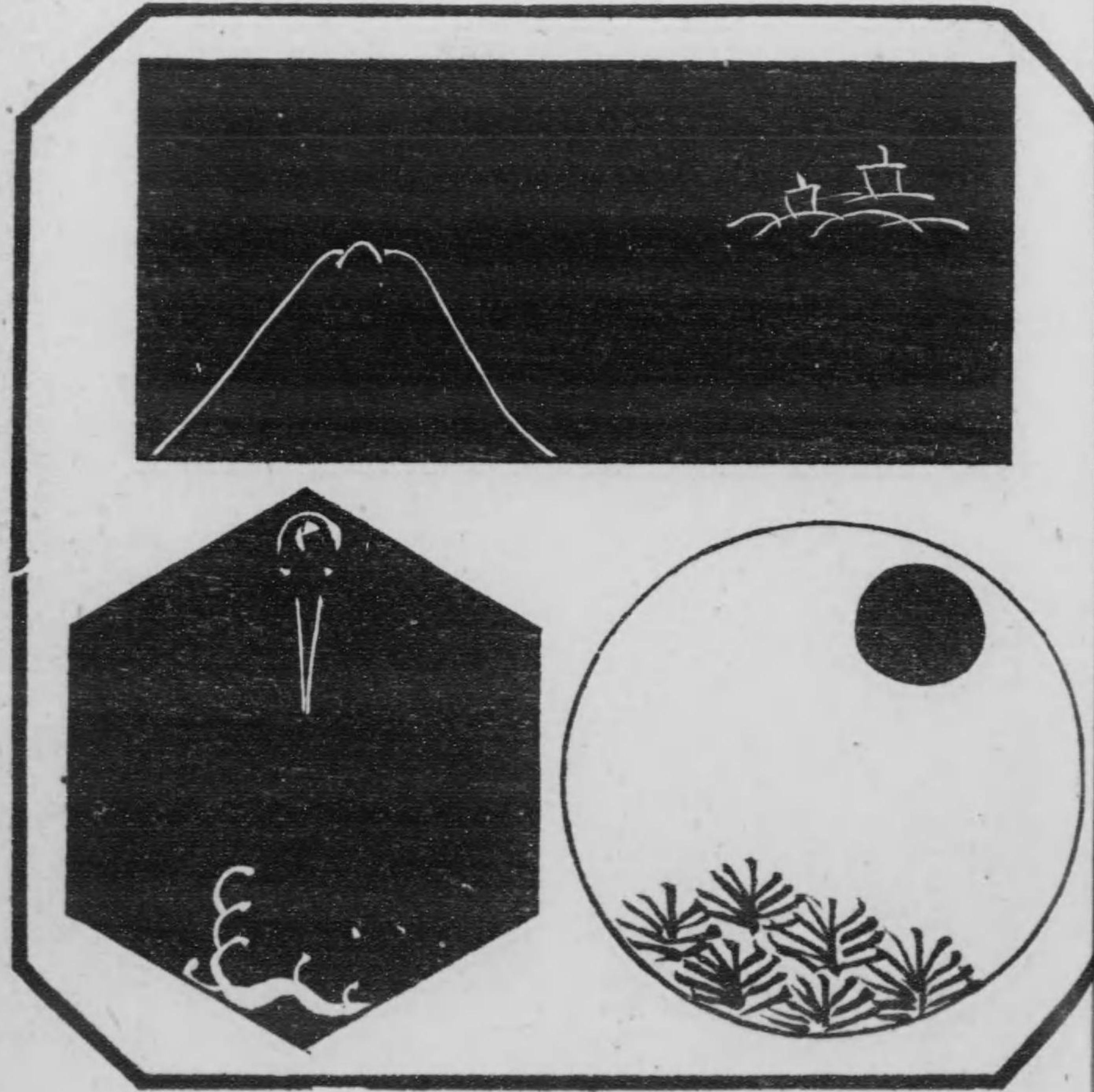
左盛

白の煉切を角形の平面にしたる上に竹の棒を二本ナラべて上より押し込みて上よりニツケ粉を降り掛け後竹の棒を取りたる物なり。

祝事用



祝 事 用



白の煉切にて玉子形に作りて鶴之子の形なり。

左 附

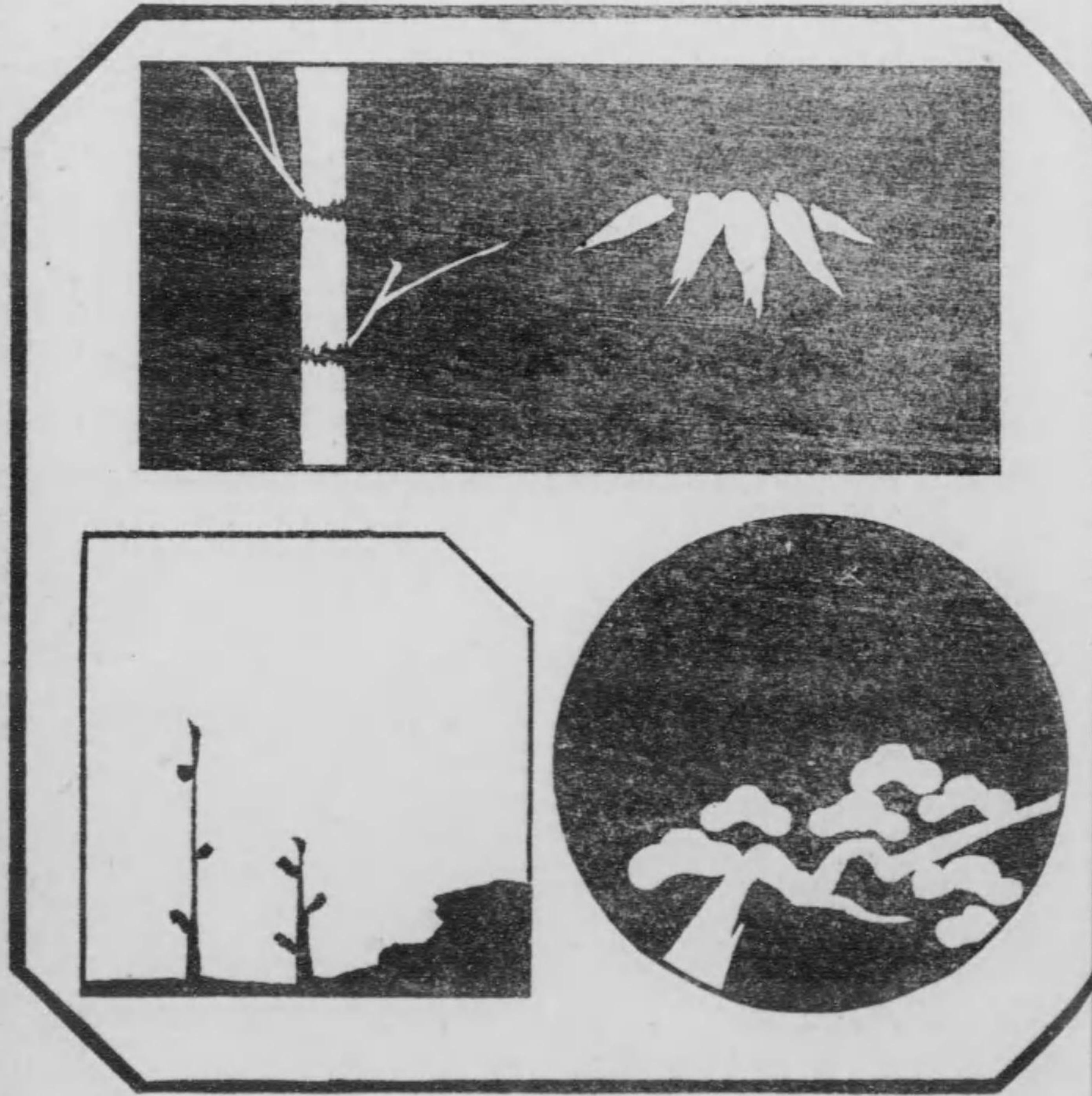
紅の牛皮を包みて龜甲形に包みて形を作りしなり。

右 附

水を白にて書き松を小豆羹にて書いて全部挽茶羊羹を流したるなり。

向 附

梅 竹 松



向 附

山に浪は小豆羹にて書いて挽茶羹にて全部流したるなり。

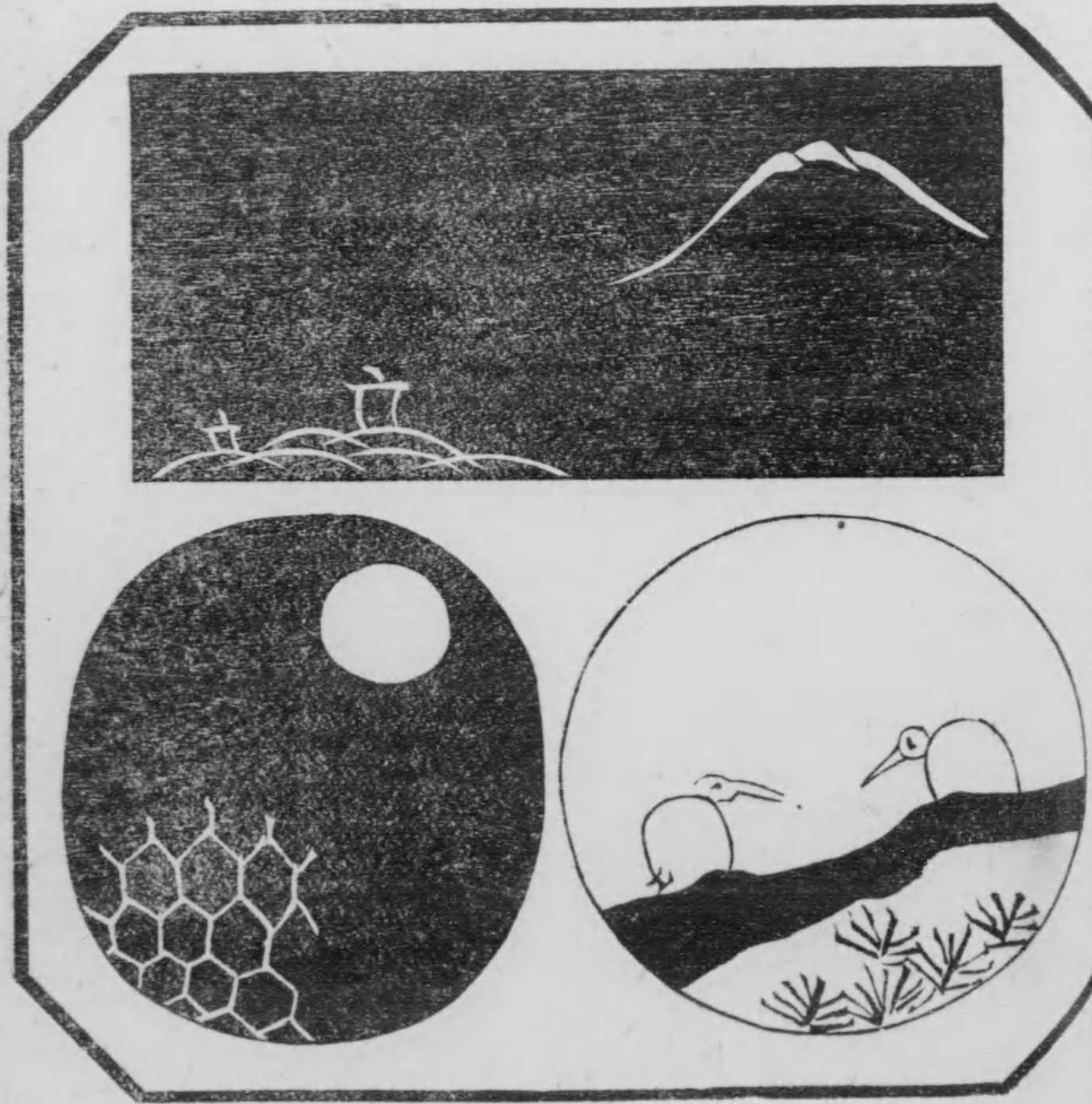
右 盛

黄色の煉切の上に日の出を張りて指にて能く押して下の所に青を張りて松の葉の筋をへらにて付けたるなり。

左 盛

薄紅を上に白を下にして包みボカシの煉切を包みて龜甲形を作りて其の上鶴の頭を白にて張り付けて下に小豆羹にて浪を書きたる物なり。

祝 事 用



向 附

青の羊羹にて竹を書きて其上黄味の羊羹を全部流したるなり。

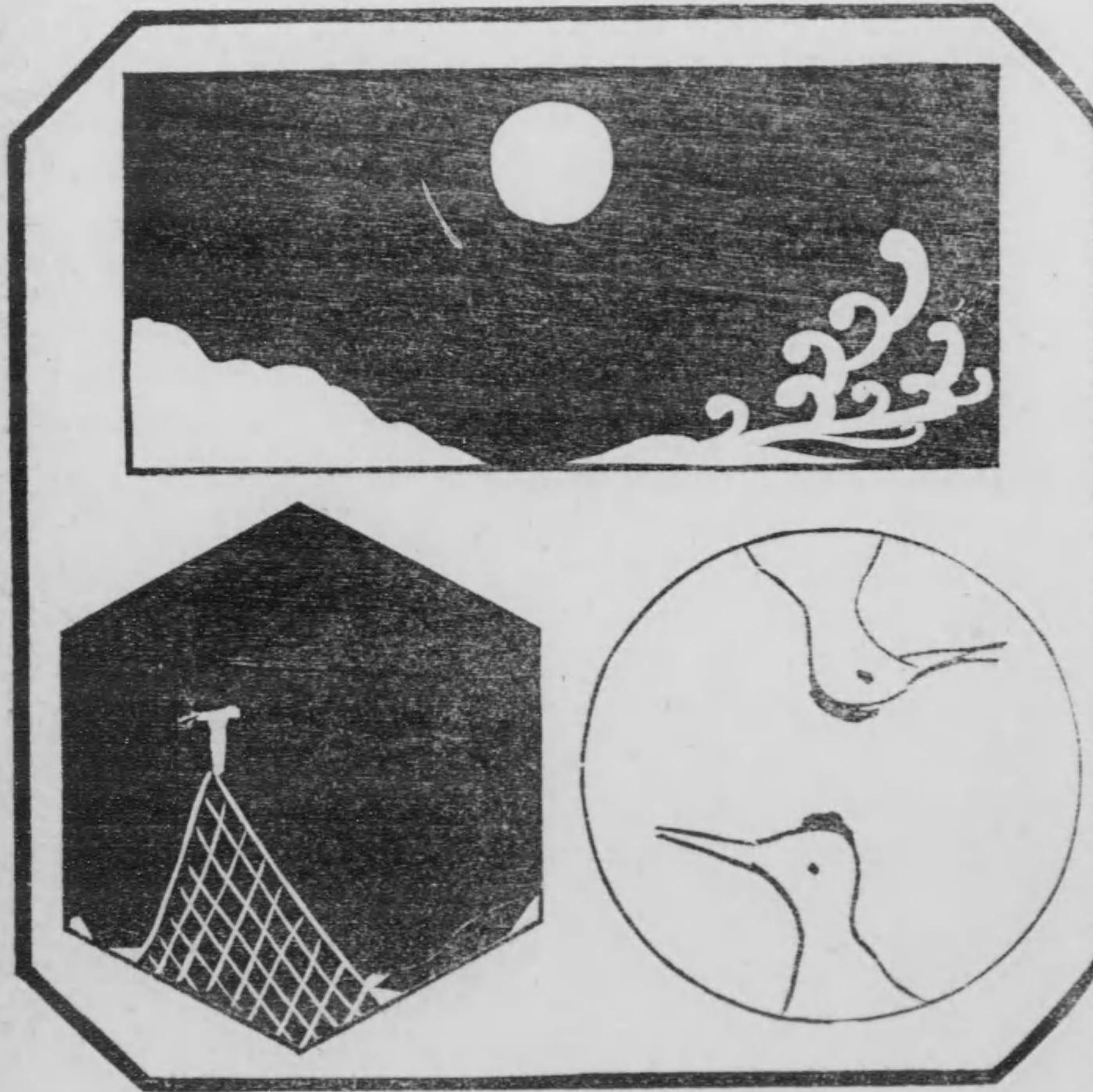
右 盛

白の牛皮を丸形に包みて其の上に松の木を火箸を焼きて焼き目にて附るなり。

左 盛

紅の煉切に白を少々ボカシて包みて角形に作りて其の上にヘラにて梅の新芽を筋にて附けてツボミを楊子にて穴を明けたるなり。

祝 事 用



向 附

山及び舟と浪を白の薯蕷羹にて書きて其の上に全部挽茶羊羹を流したる物なり。

右 盛

白の煉切を丸形に作りて下の方に青を張りて能く押しへらにて枝葉の筋を附けたるなり木は棒にニッケ粉を附けて押し鶴を針金押しとして仕上たるなり。

左 盛

黄色の煉切にて日之出を紅にて出して丸小判に包みて龜甲はへらにて筋を附けたるなり。

向附

浪を白にて日之出を紅にて出して地は挽茶色の岡時雨なり。

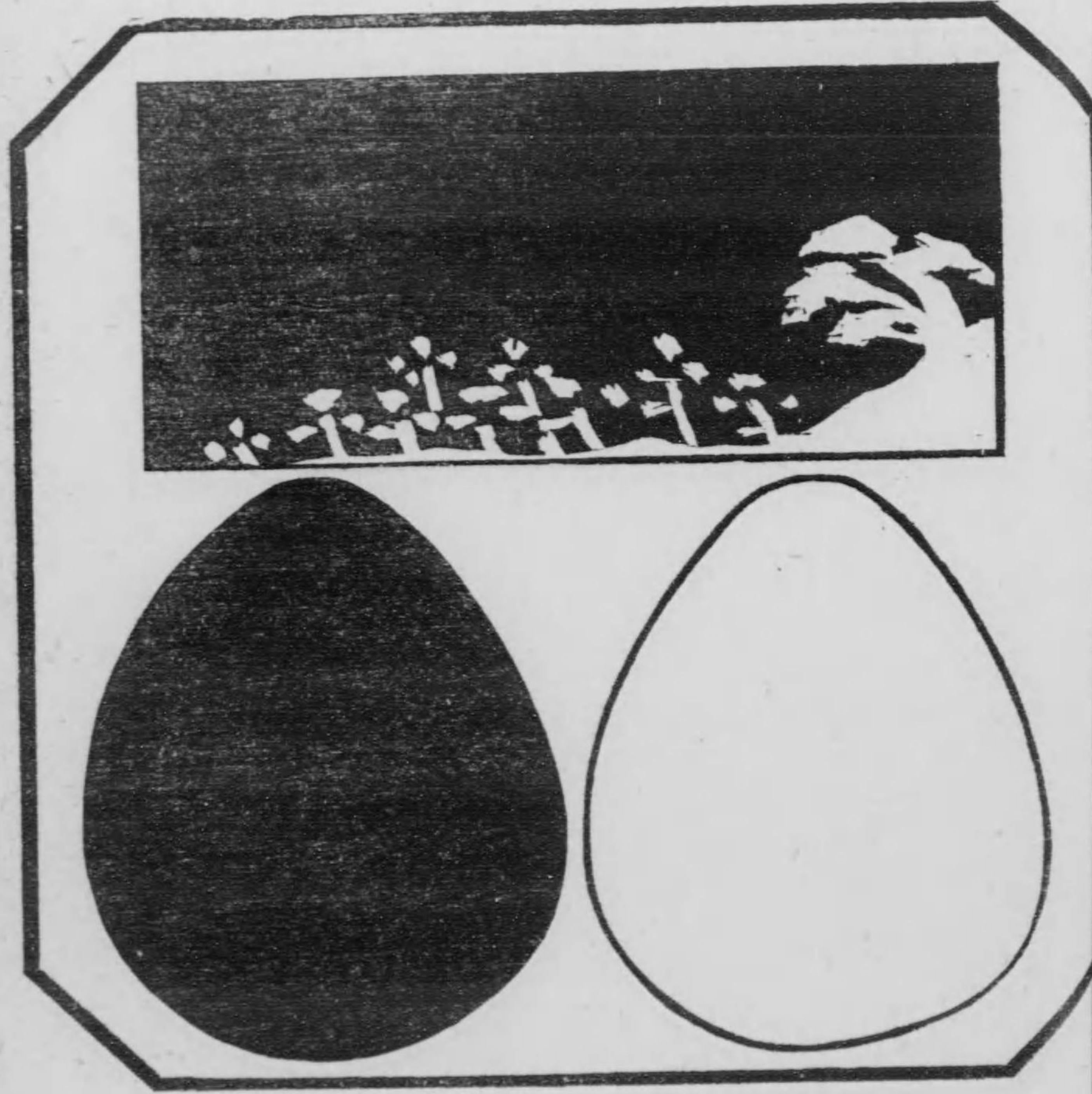
右盛

白の薯蕷煉切を丸形にして上下に指先きにて鶴の頭を高かく浮かす様に押したる物なり。

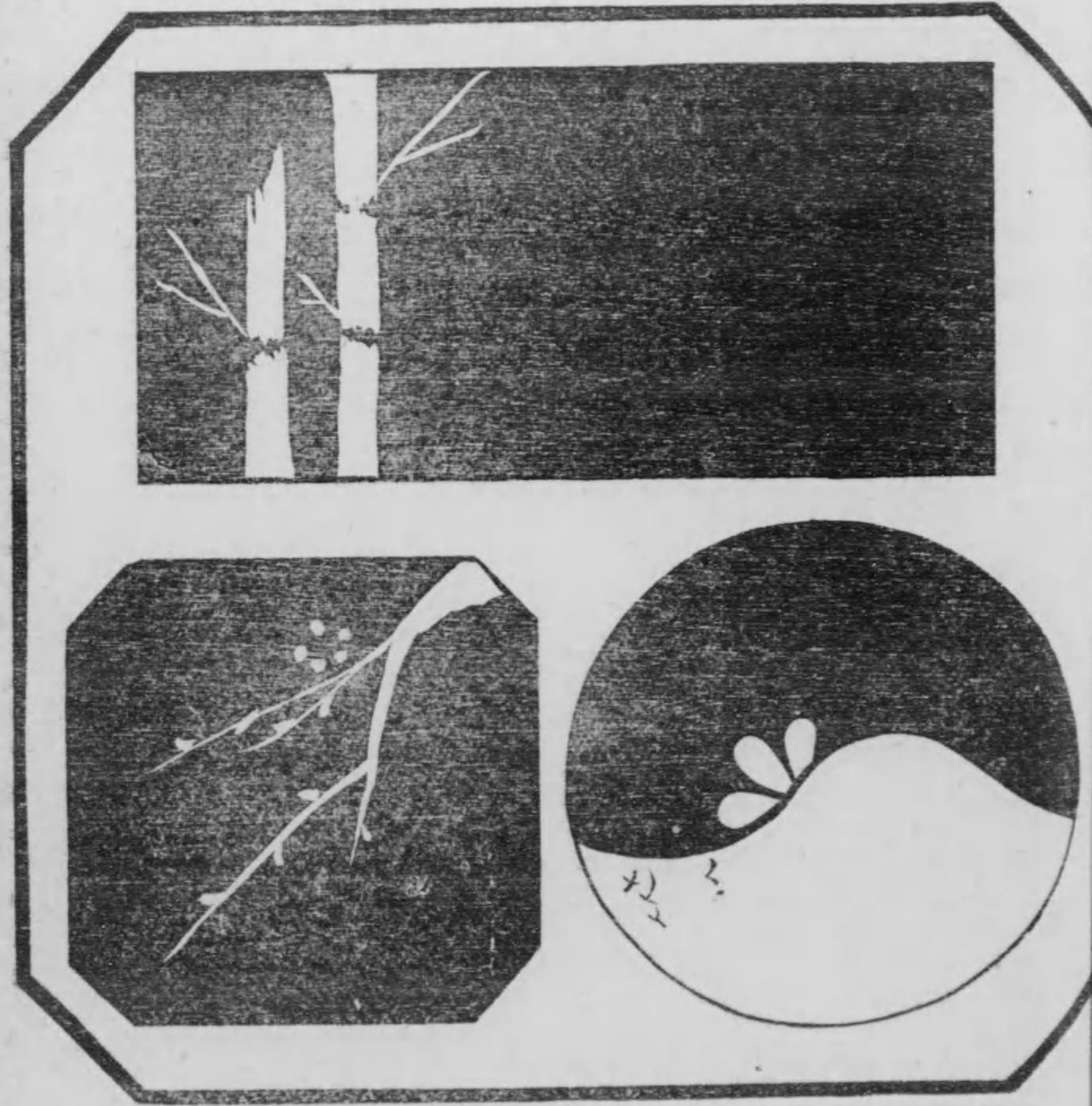
左盛

小豆羹にて網干の圖を書きて其の上に金玉を流して龜甲形にて抜き出したるなり。

祝事用



梅 竹 松



向 附

挽茶羊羹の臺にして松の並木は小豆羹にて書きし物なり。

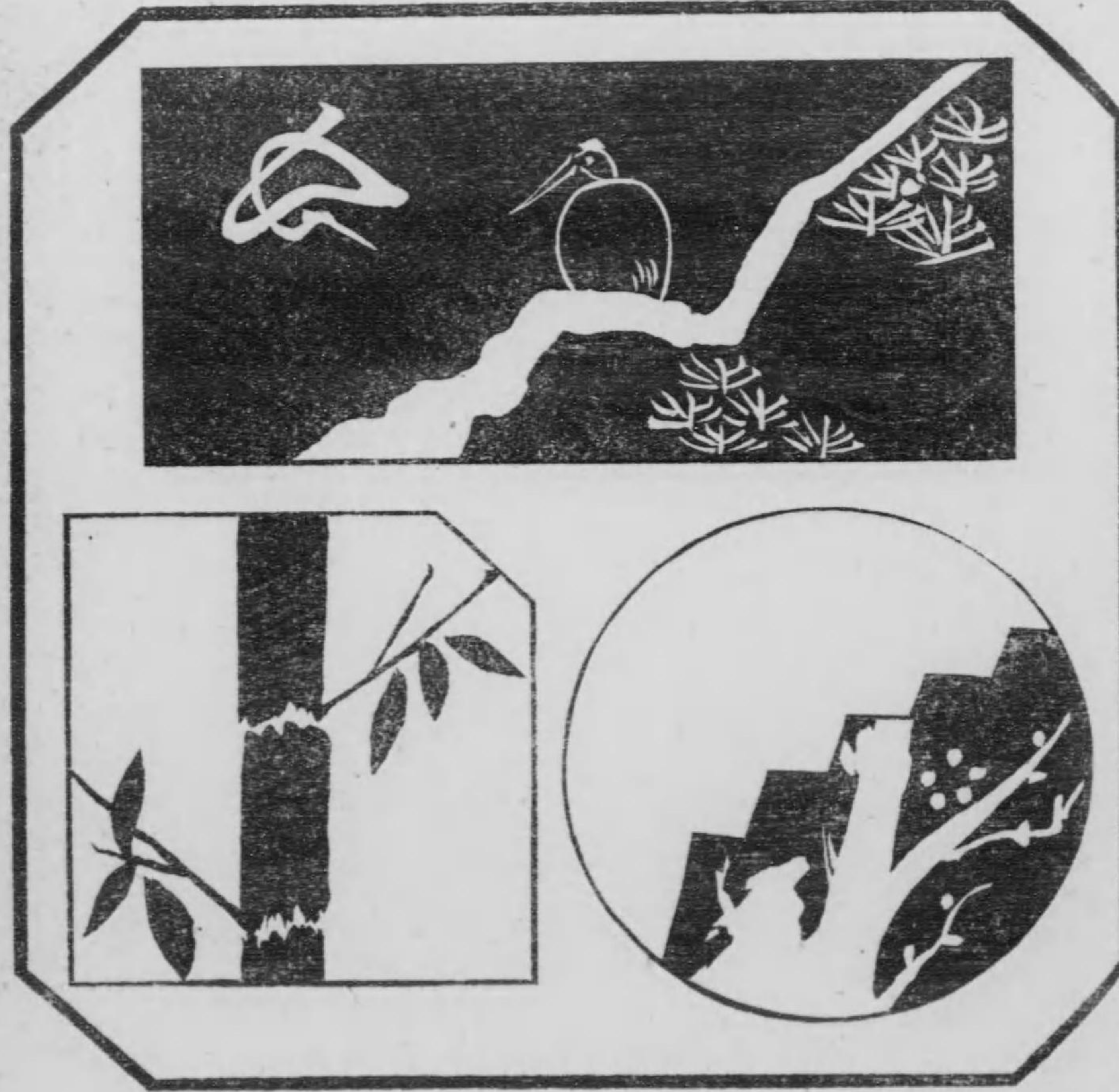
右 附

白の薯蕷煉切を玉子形に作りたるなり。

左 附

紅の薯蕷煉切を玉子形に作りたるなり。

祝 事 用



向 附

小豆羹の中に白の煉切にて竹を二本作りて表に出して流したるなり。

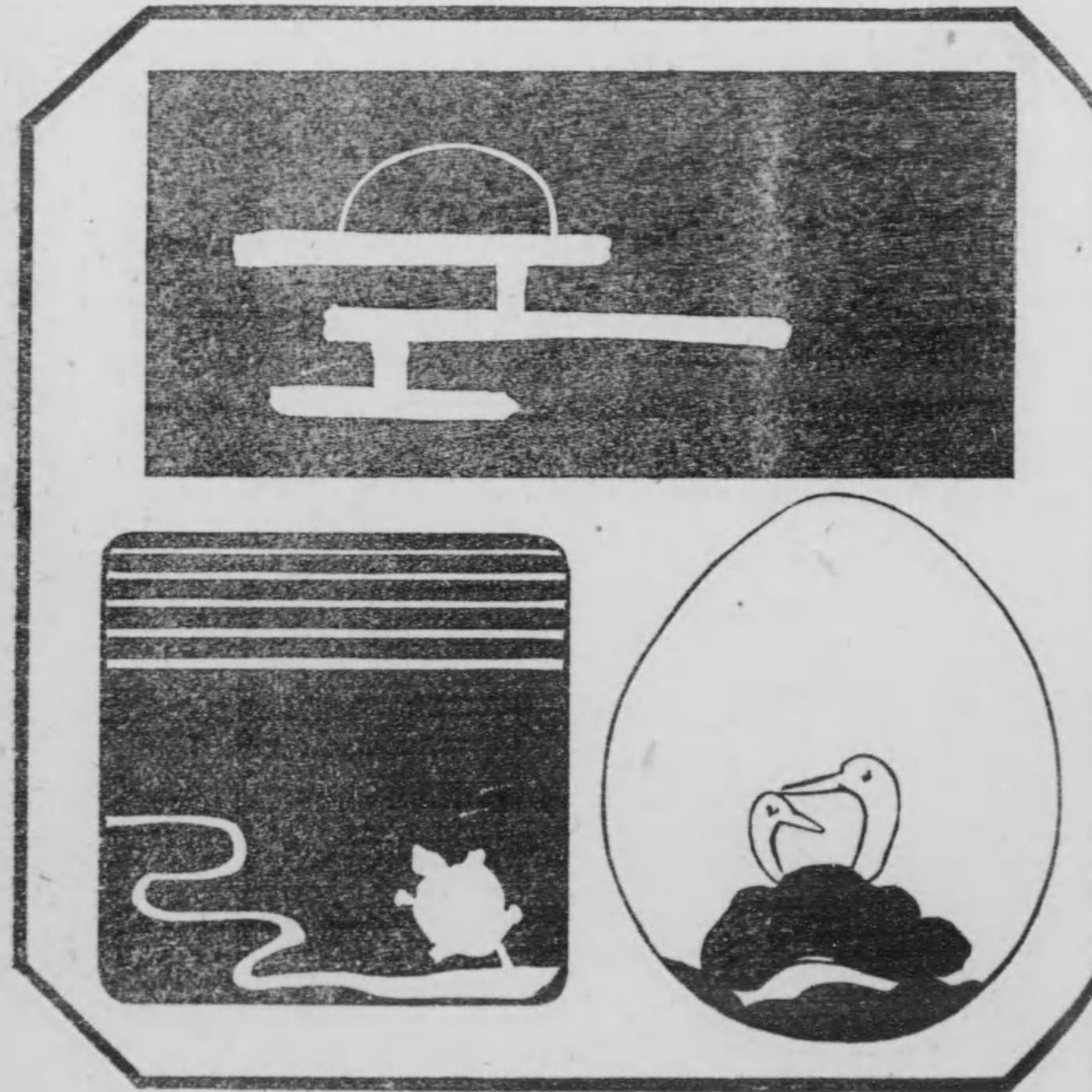
右 附

白と草煉切の半合せにて包みし煉切にて三ツの星は大納豆の煮込の豆を附けて松の形を見せたるなり。

左 附

薄紅と白のボカシの煉切にて角形に作りて梅の枝を棒にて押して花を楊子の先きにて穴を明けたる物なり。

祝 事 用



黄味色の岡時雨にて竹を挽茶筒にて押し抜きたるなり。

左 盛

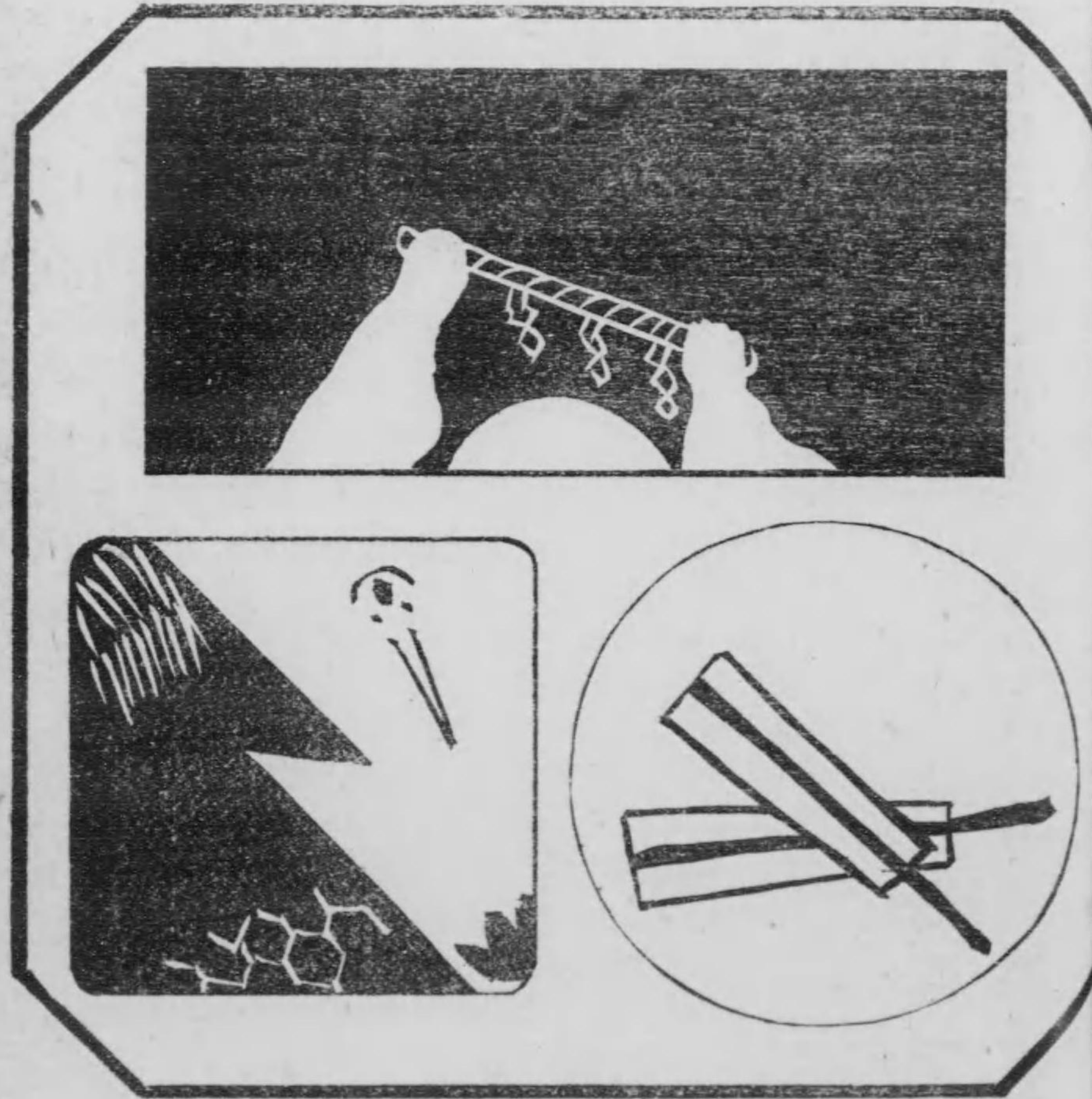
薄紅臺の煉切を丸形に包みてへらにて扇子の半面を押し其の中に棒にて梅の木を押し花を楊子の先きにて押し穴を明けるなり。

右 盛

長鶴を白の煉切にて作り松の木を小豆羹にて書きて挽茶羹を全部流して後ち冷えたる時切りて上より松の葉をへらにて筋を附けるなり。

向 附

祝 事 用



紅と白のボカシの煉切を包みて角形に作りて龜の子を小豆餡にて張りてフ
ルヒに押して流れを羊羹にて書きたるなり。

左 盛

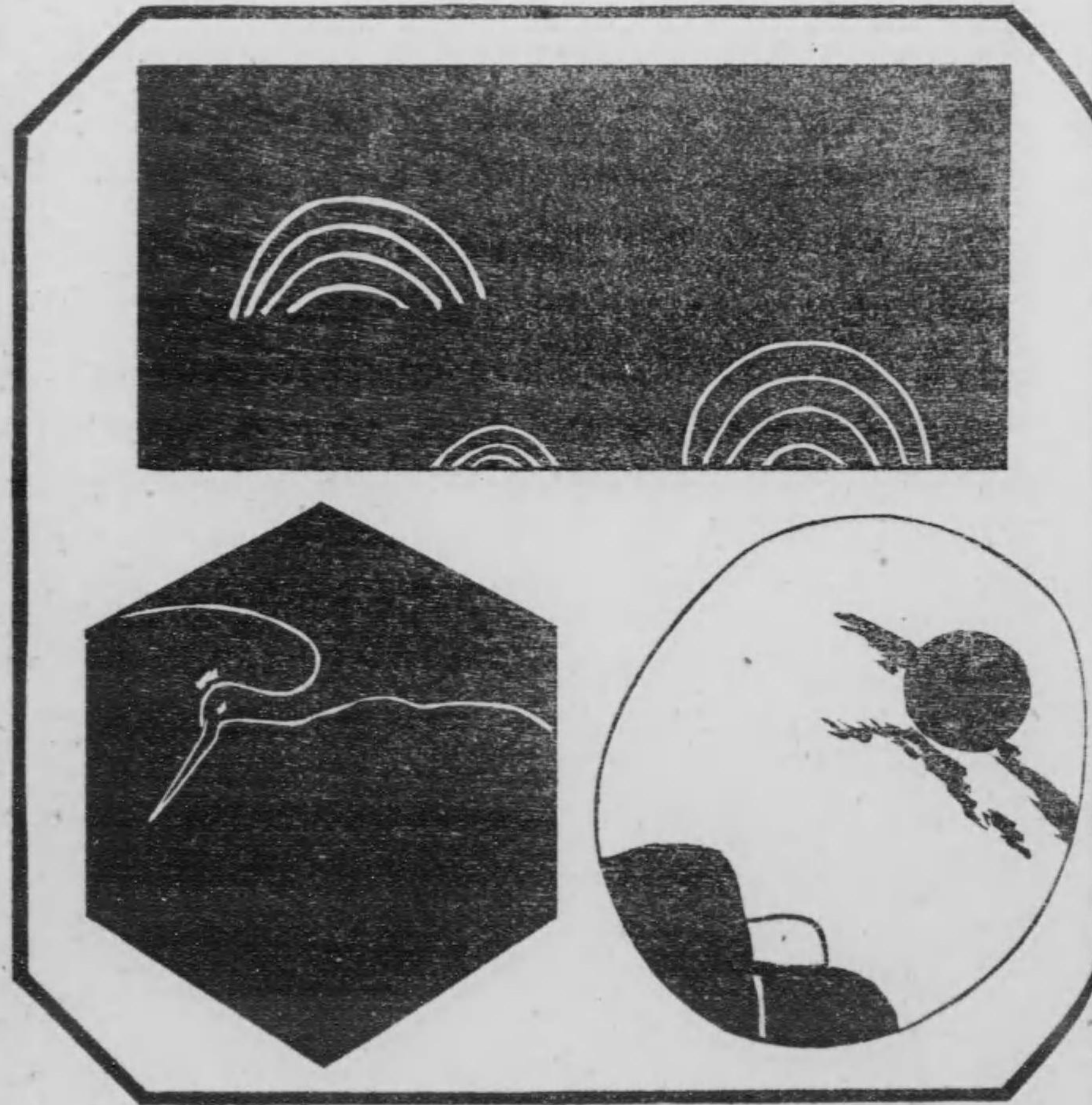
白の牛皮を包みて玉子形に作りて煉切にて鶴の頭を作りて附けて其の下に
煉切にて作りし青の松を張り合せたる物なり。

右 盛

日之出を紅に霞を白にして地を黄味色にして木形利用にて岡時雨を押し抜
きたる物なり。

向 附

祝 事 用



白と小豆餠の二色の松川菱に張合せたる煉切を作りて白の方に鶴の頭を附けて小豆餠の方にへラにて龜甲の筋を附けて仕上たるなり。

左 盛り

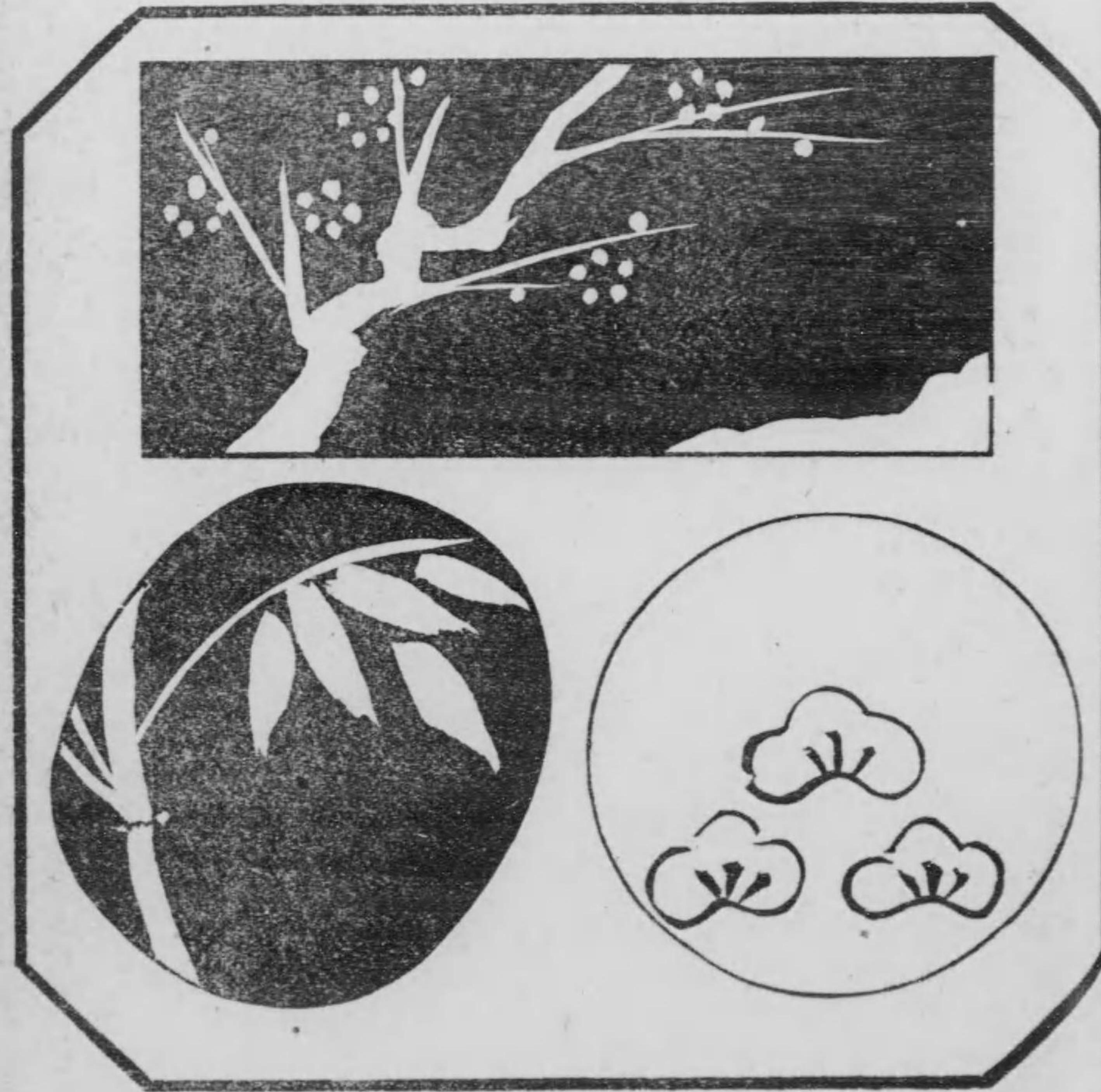
紅臺の煉切を丸形に作りて其の上にへラにて筋を以て二本の末廣の筋を附けるなり。

右 盛り

二見浦の岩は小豆羹にて日の出は紅の煉切にてシメ繩は黄色の羊羹にて書きて其の全部を挽茶羹にて流したる物なり。

向 附

梅 竹 松



り。
 籠甲を小豆餡の岡時雨にて白を以て鶴の半身を出して堅く押し抜きたるな

左 附

白の煉切の上に日の出を紅にて雲を小豆にて張り山は茶色とニツケ色の二
 色にて張り合せて筋形の上に押し附けたるなり。

右 附

平常の置浪を小豆羹にて書いて其上に挽茶羹を流したり。

向 附

向附

小豆羹にて梅の木を書き、其の上に白の羊羹を流したる物なり。

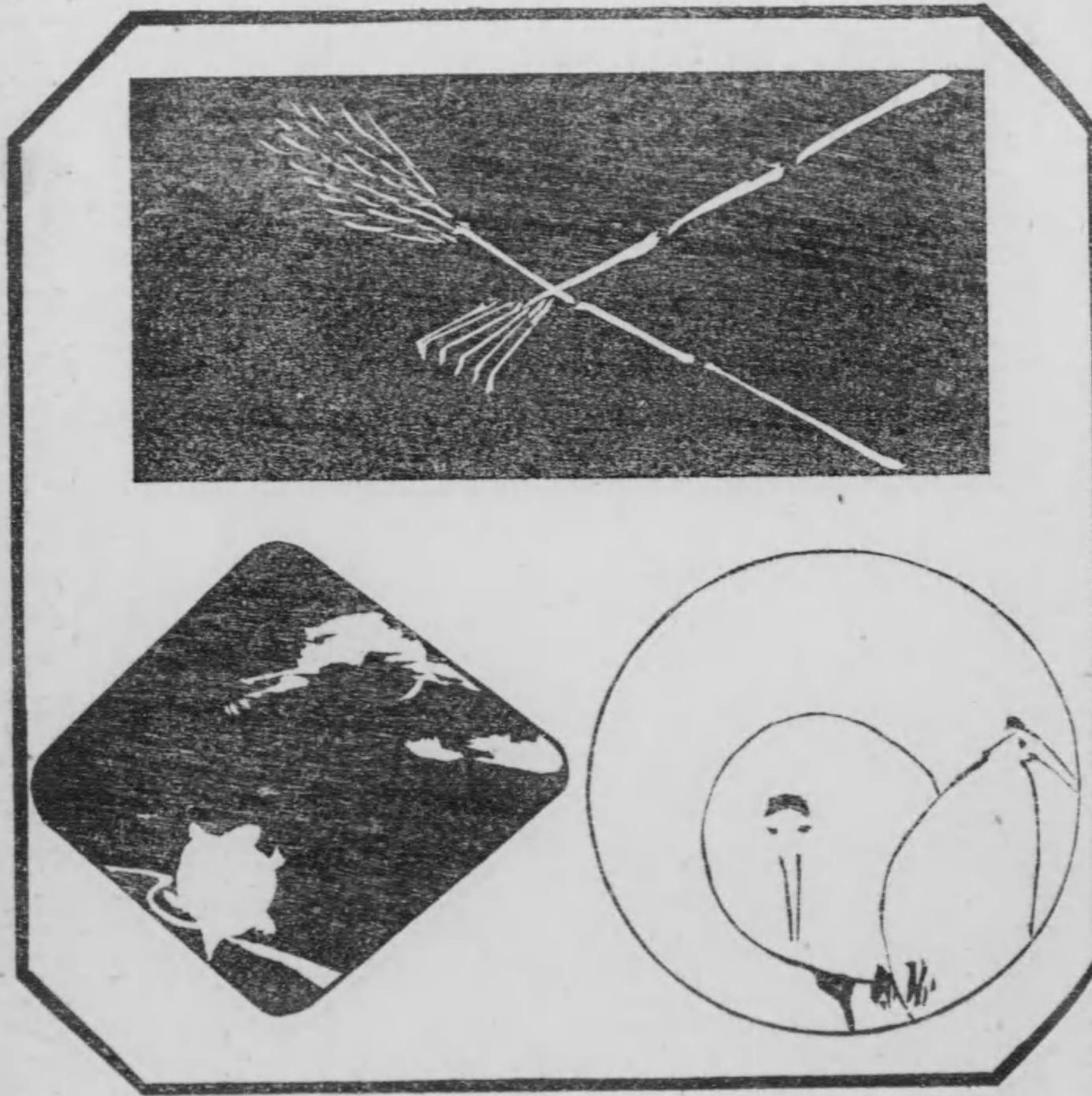
右盛

紅の煉切の上に白青ボカシの松形を鍼力形にて抜きて張り附けて指にて押して後ちフルヒにて押し附けたるなり。

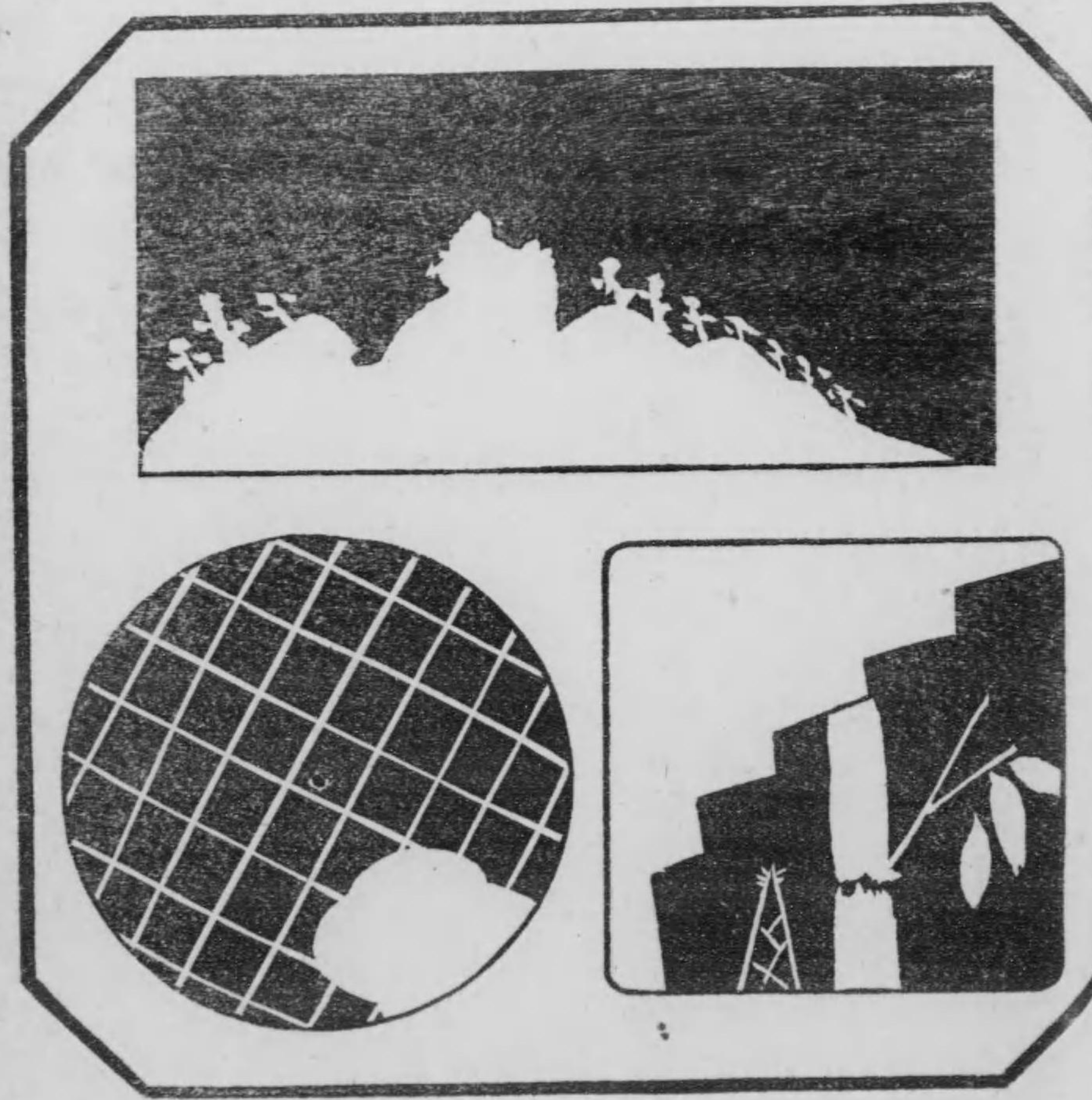
左盛

挽茶の煉切を丸小判に包みて其の上に竹棒を押して竹の模様となして笹をへらにて附けたるなり。

祝事用



梅 竹 松



圖の如き形ちを青の雪平にて作りて其上に松の木及び龜の子水は焼き印にて焼き模様を出したる物なり。

左 盛

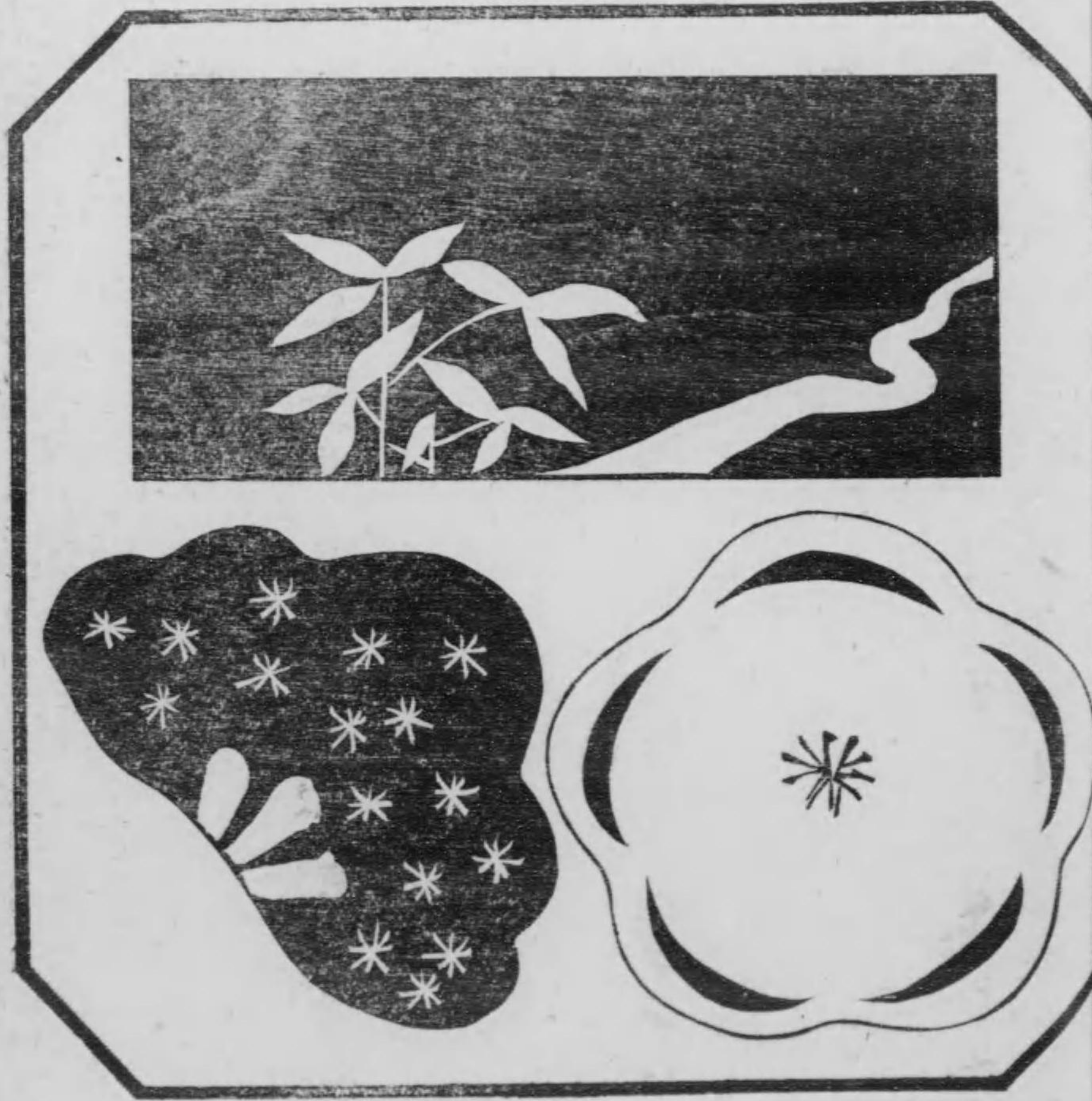
紅の煉切を輪形に作りて鶴の形を白の煉切にて張りて指にて平面に押したるなり。

右 盛

高砂子の持ち道具を小豆羹にて書いて其の上に玉子の黄味羊羹を流したるなり。

向 附

梅 竹 松



向 附

山を白の羊羹にて書いて小松原を小豆羹にて書いて全部を挽茶羊羹を流したるなり。

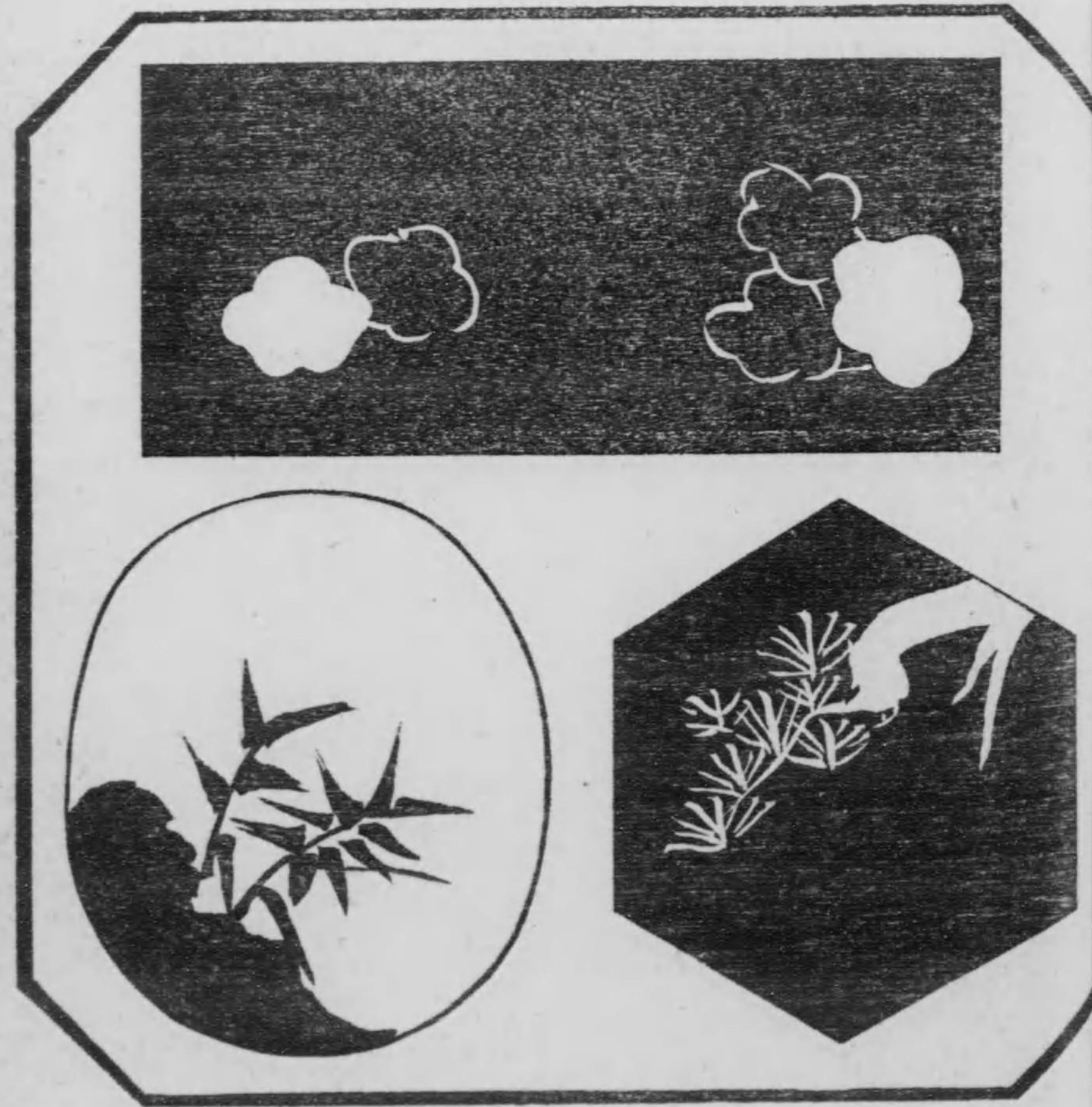
右 盛

白の煉切を角形に包みて扇子の半面をへらにて押して其の中に竹の手及び竹模様をへらにて附けたるなり。

左 盛

白の牛皮を包みて丸形に作りて紅の小田巻の糸を掛けて上置きとして白煉切の武方形にて抜きし櫻花一輪を置きたるなり。

梅 竹 松



向 附

水を白にて笹を青にて羊羹の絞り出しにて書きて其の上に黄味羊羹を流せし物なり。

右 盛

上を白にして中を赤にして皮となし其の中に小豆餡を包みて四方を金杓子にて五方に切り割りて真中に黄色餡ソボロを箸にて附けたる物なり。

左 盛

松は牛皮を包みて五重の松の形ちを作りて其の上に挽茶餡の金團を植ゑ込みたる物なり。三ツの星は大納豆の煮込豆を附けるべし。

豆 附

梅の花の鉢力形にて小豆羹及び白の二種を抜きて薄紅羊羹の中に表に出る様に流し込みたるなり。

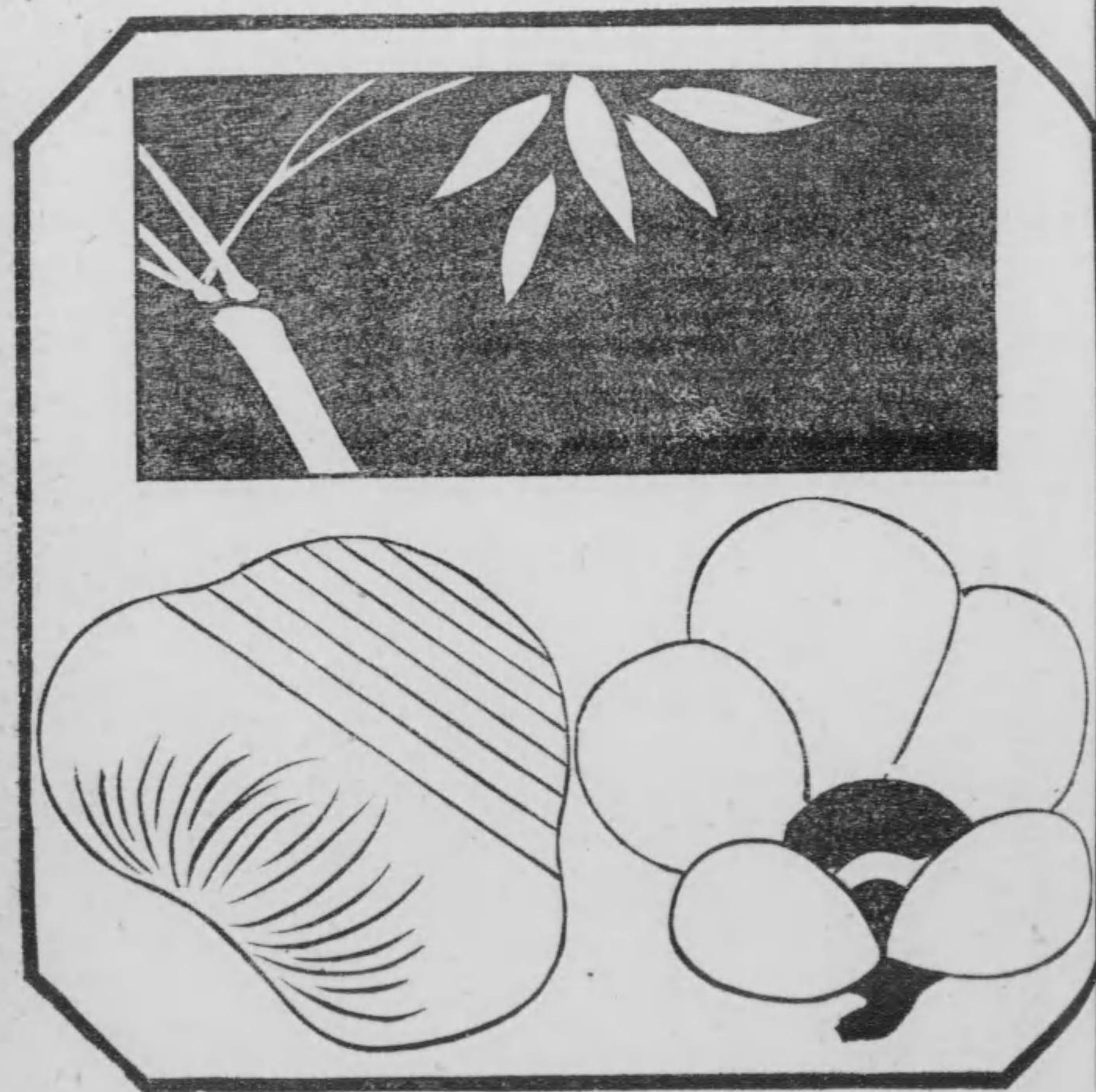
右 盛

松は黄色の牛皮を包みて龜甲形に包みて形を作り其の上に松の枝を焼き火箸に附けて松葉は青餡ソボロを箸にて植込みたるなり。

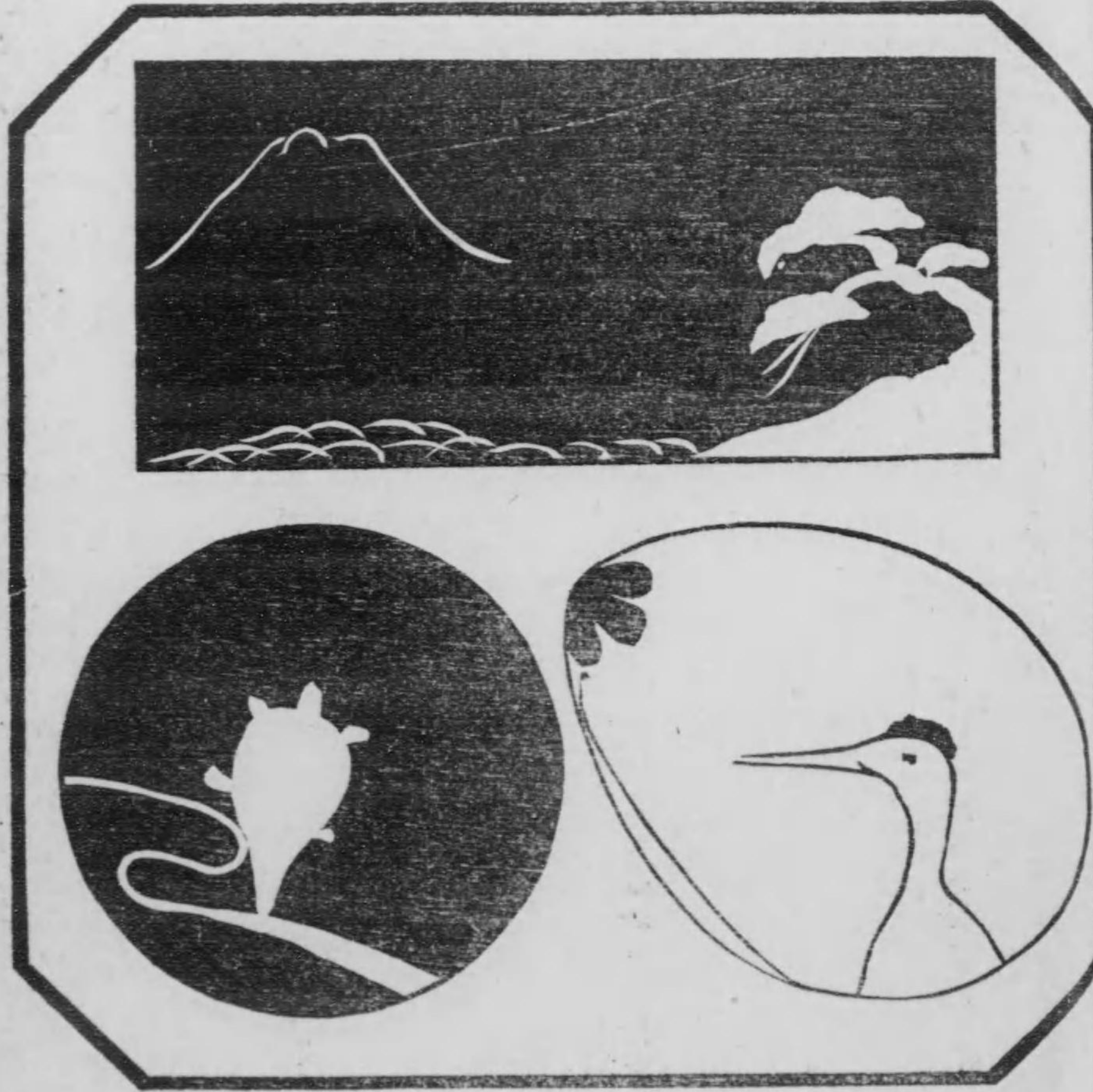
左 盛

白の煉切を丸小判に包みて下の方に小豆餡を張りて小山を見せて其の上に形紙を利用して笹の模様を出せし物なり。

梅 竹 松



祝 事 用



向 附

小豆羹にて竹を書きて其の上に白の薯蕷を流したる物なり。

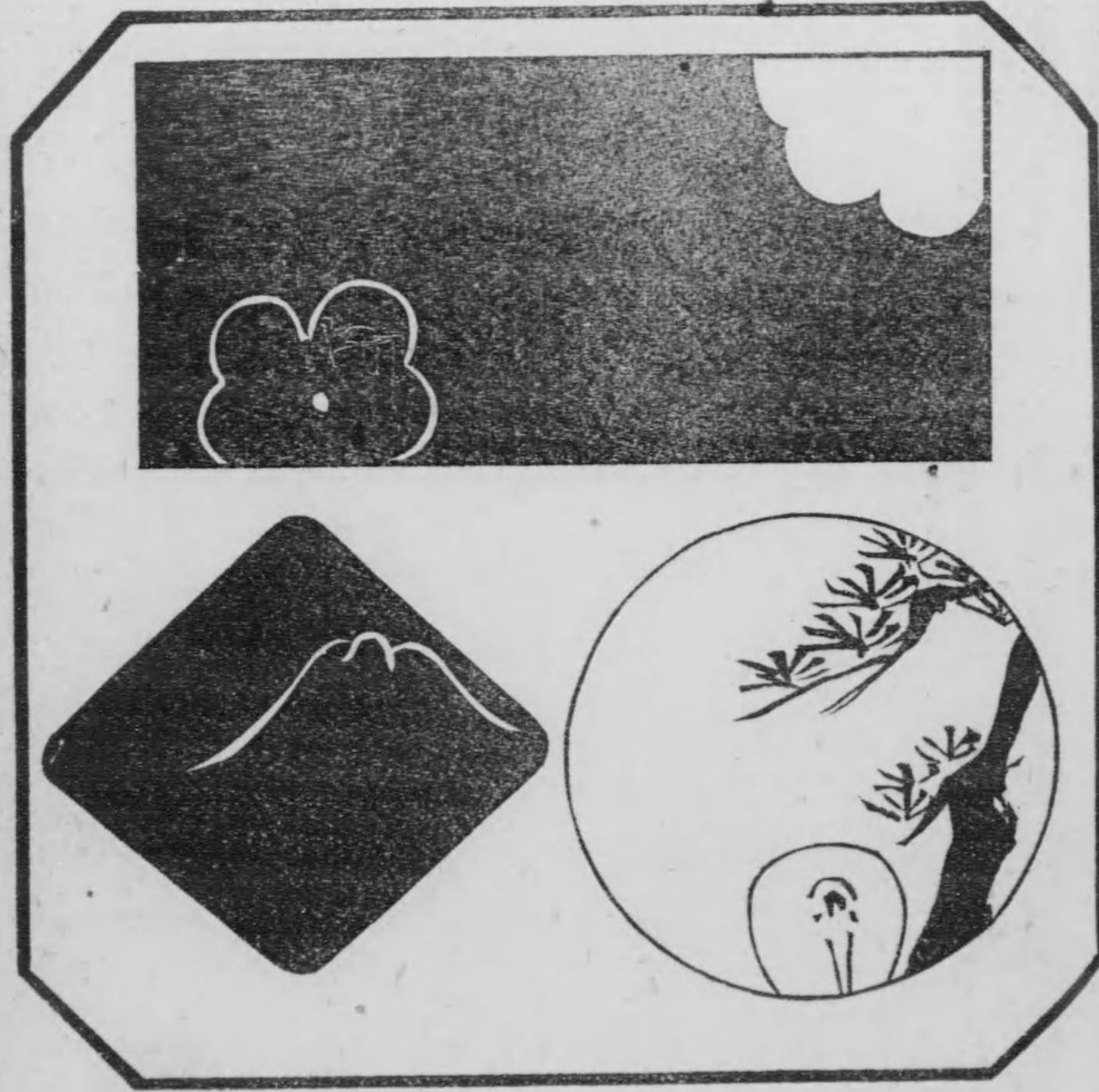
右 盛

梅は紅の煉切にて包み三角定木とへらにて細工せし物なり。

左 盛

白と青のボカシの煉切の包みにて松の形に作り是を布に包みて手輕に絞りに仕上たるなり。

祝 事 用



紅の牛皮を包みて丸形として焼き目を針金利用にて流水を焼き出して其所に龜の子を小豆羹にて書きたるなり。

左 附

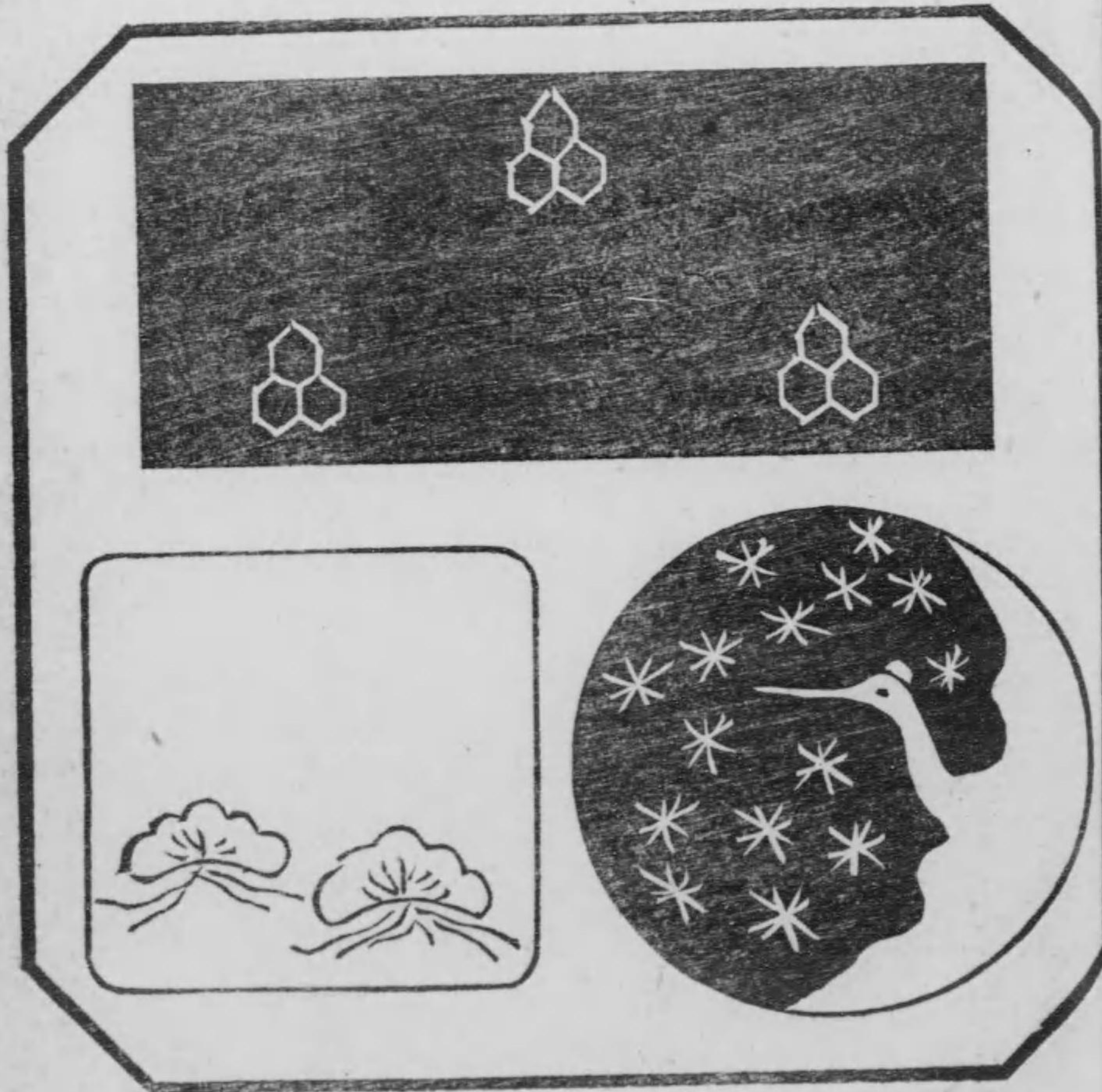
白の煉切を包みて玉子形に作りて指先きにて頭を押して浮かせて仕上たるなり。

右 附

向 附

富士山松之木浪に岩みな小豆羹の絞り出しにて書きて其の上に薄紅羊羹を流したる物なり。

祝 事 用



向 附

挽茶館の地にして上の梅を白に下の梅花を赤にて模様を出したる岡時雨にて作りたるなり。

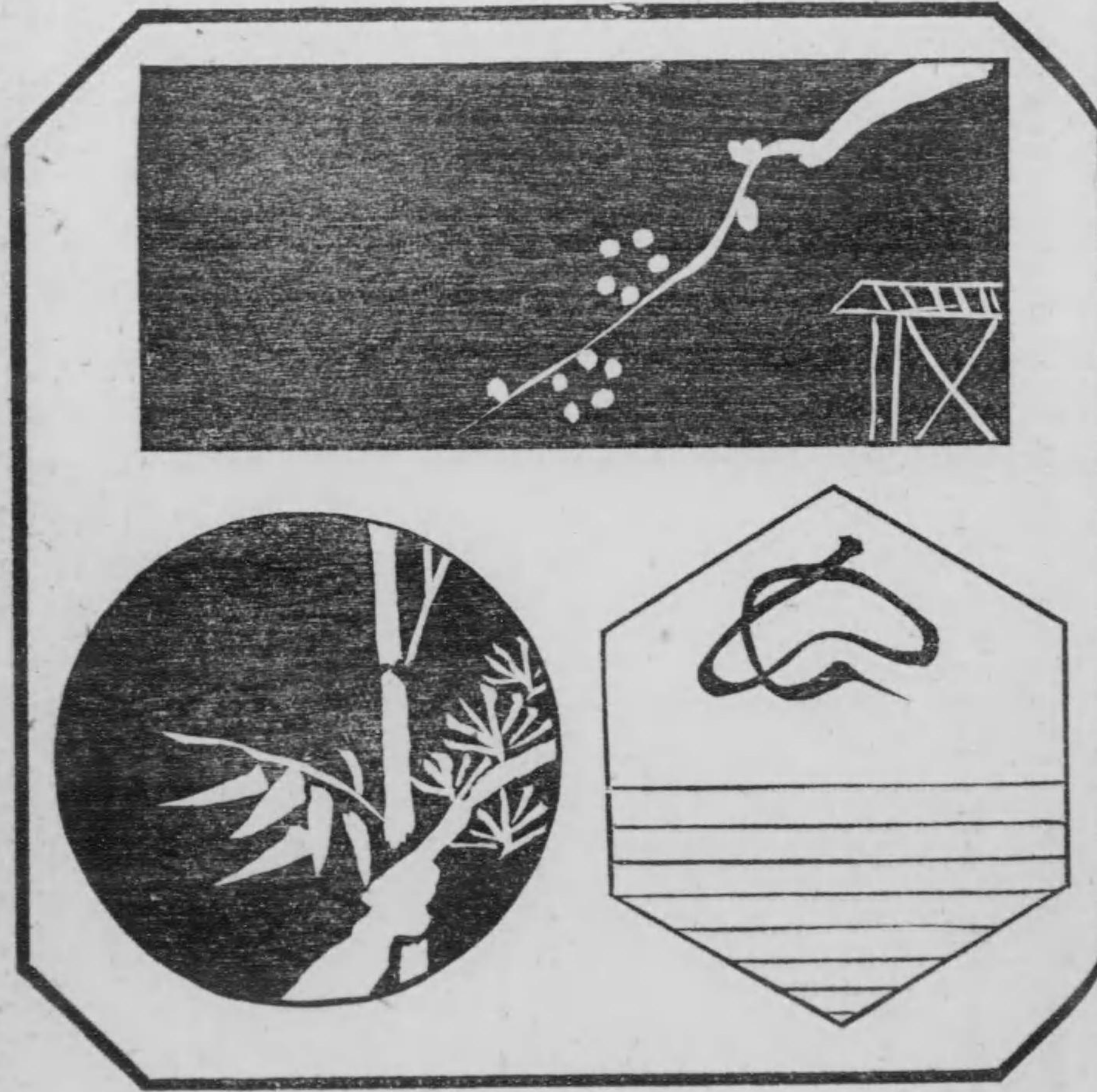
右 附

白の煉切を丸形に包みて其の上に松の葉を青にて張りて木を棒にて押して筋をへらにて附けて鶴を針金を輪にして付けたるなり。

左 附

紅色染めの雪平を包みて圖の如き形を作りて其の上に富士の山を白の著蒨にて書きたる物なり。

松竹梅鶴龜



附^つけたるなり。
 白^{しろ}の煉^{ねりきり}切^{きり}を包^つみて角^{かく}形^{がた}として其^その上^{うへ}に松^{まつ}の形^{かたち}を青^{あを}にて張^はりて筋^{すじ}はヘラにて

左^{ひだり} 盛^{もり}

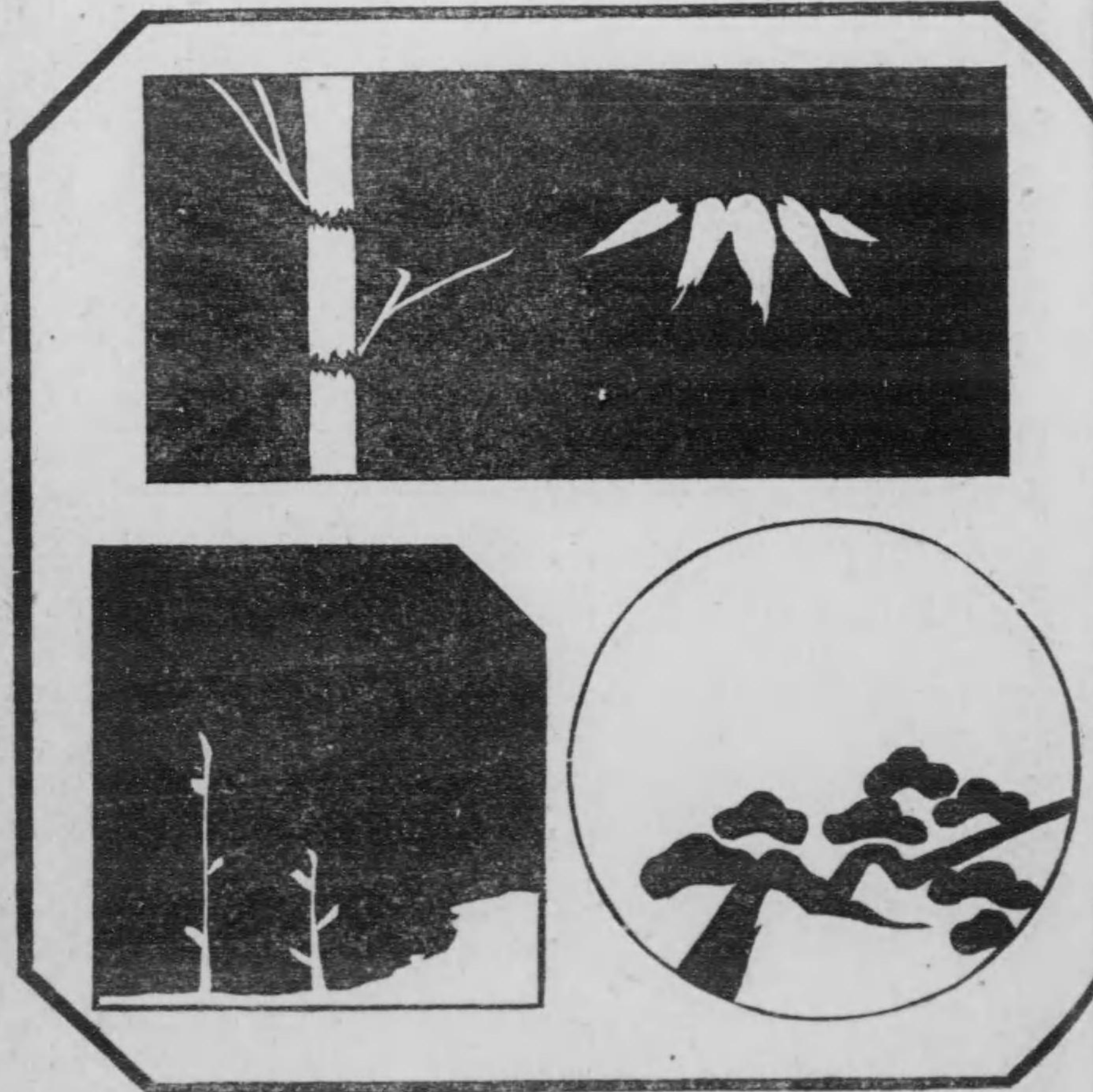
白^{しろ}の牛^{ぎゅう}皮^ひを丸^{まる}形^{がた}に包^つみて其^その上^{うへ}に紅^{べに}の金^{きん}團^{だん}を一面^{めん}に箸^{はし}にて植^うへて鶴^{つる}の半^{はん}面^{めん}の形^{かたち}を白^{しろ}にて植^うへ附^つけたる物^{もの}なり。

右^{みぎ} 盛^{もり}

龜^{きつ}甲^{かぶ}を白^{しろ}の煉^{ねりきり}切^{きり}を伸^のびて武^ぶ力^{りき}形^{がた}にて抜^ぬきて小^{あじ}豆^{まめ}羹^{かん}を流^{なが}して其^その上^{うへ}に置^おき冷^ひえたる時^{とき}を以^{もつ}て全^{ぜん}部^ぶを流^{なが}したるなり。

向^{むかひ} 附^つ

梅 竹 松



向 附

梅の枝及び門は小豆羹にて書きて其の上に八重成羊羹を流したるなり。

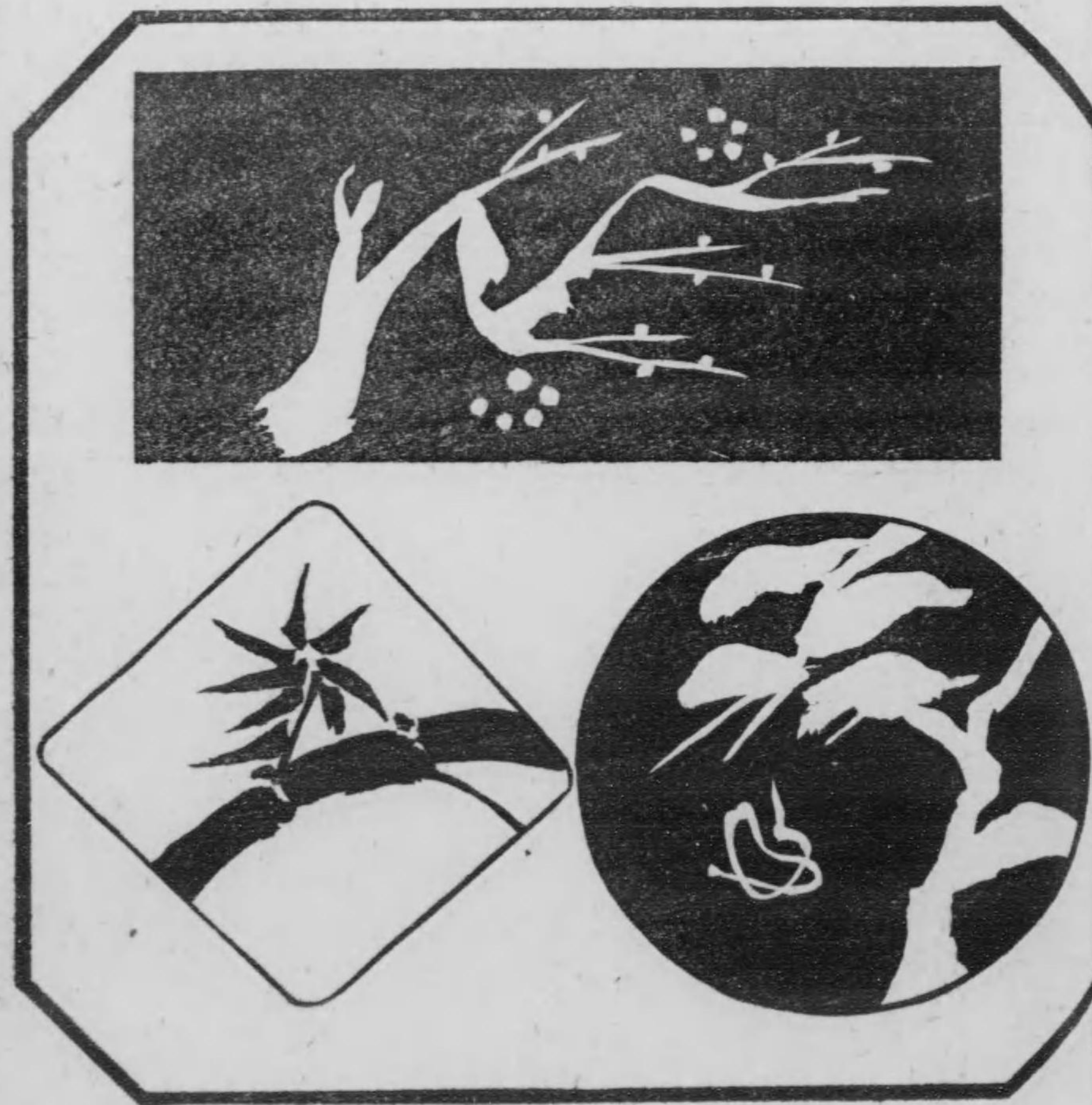
右 附

白と紅のボカシ煉切を包みて龜甲形に作りて其の上に長鶴を小豆羹にて書きたる物なり。

左 附

黄色の染め煉切にて丸形に包みて其の上に松の葉の所に青を少し張りて松の木は棒にニツケ粉を附けて押し竹は本物の竹に挽茶を附けて押しして笹はヘラにて筋を附け松の葉もヘラにて筋を附けるなり。

祝 事 用



向 附

竹は小豆羹にて書きて茶羹を全部流すなり。

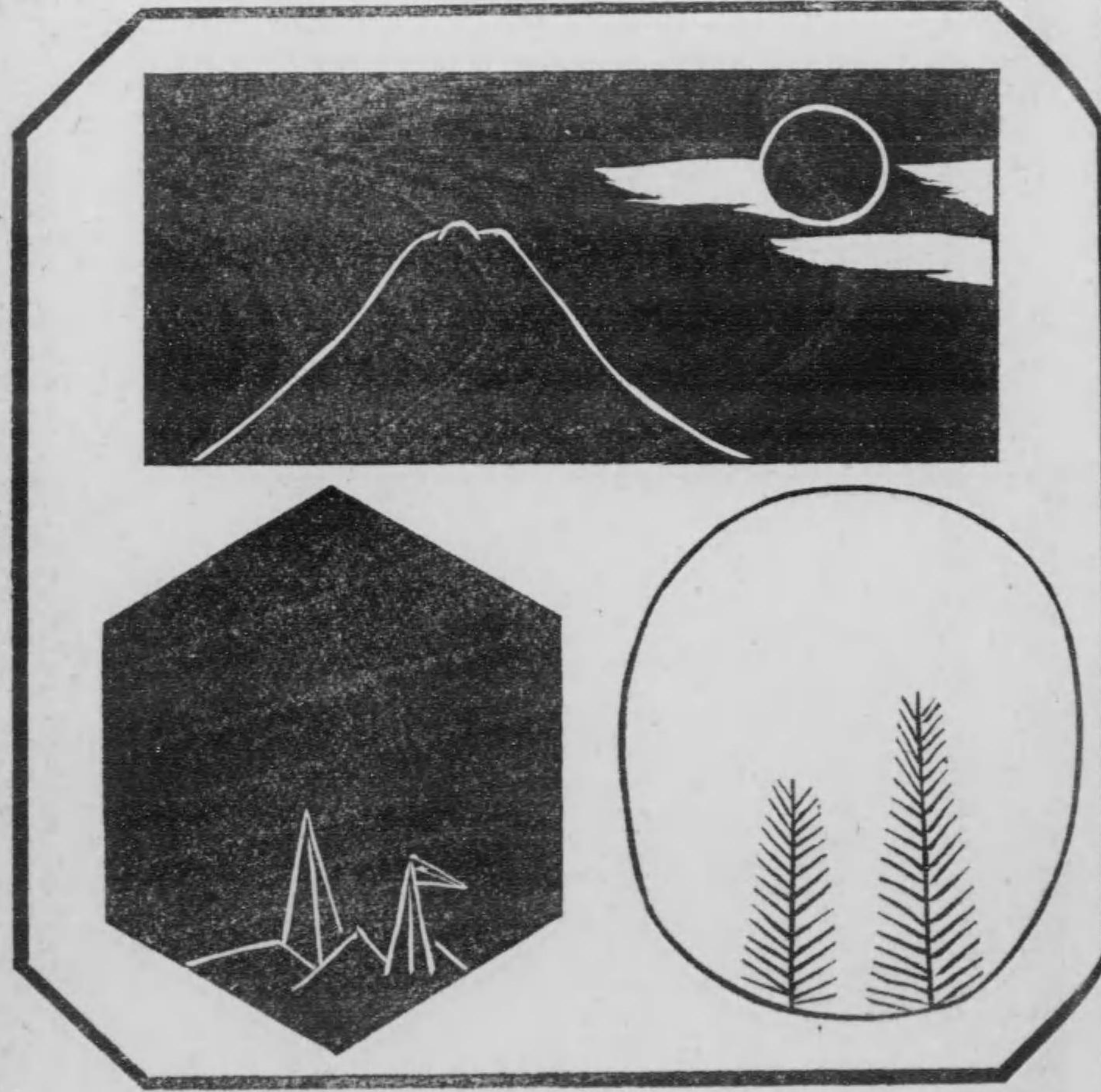
右 盛

黄色の牛皮を丸形に包みし上に松を焼き目にて火箸を利用して書きたるなり。

左 盛

紅の煉切を角切形に包みて梅を棒及び揚子にて仕上たるなり。

祝 事 用



向 附

小豆羊羹にて梅の折枝を書きて其の上に薄紅羊羹を全部流したる物なり。

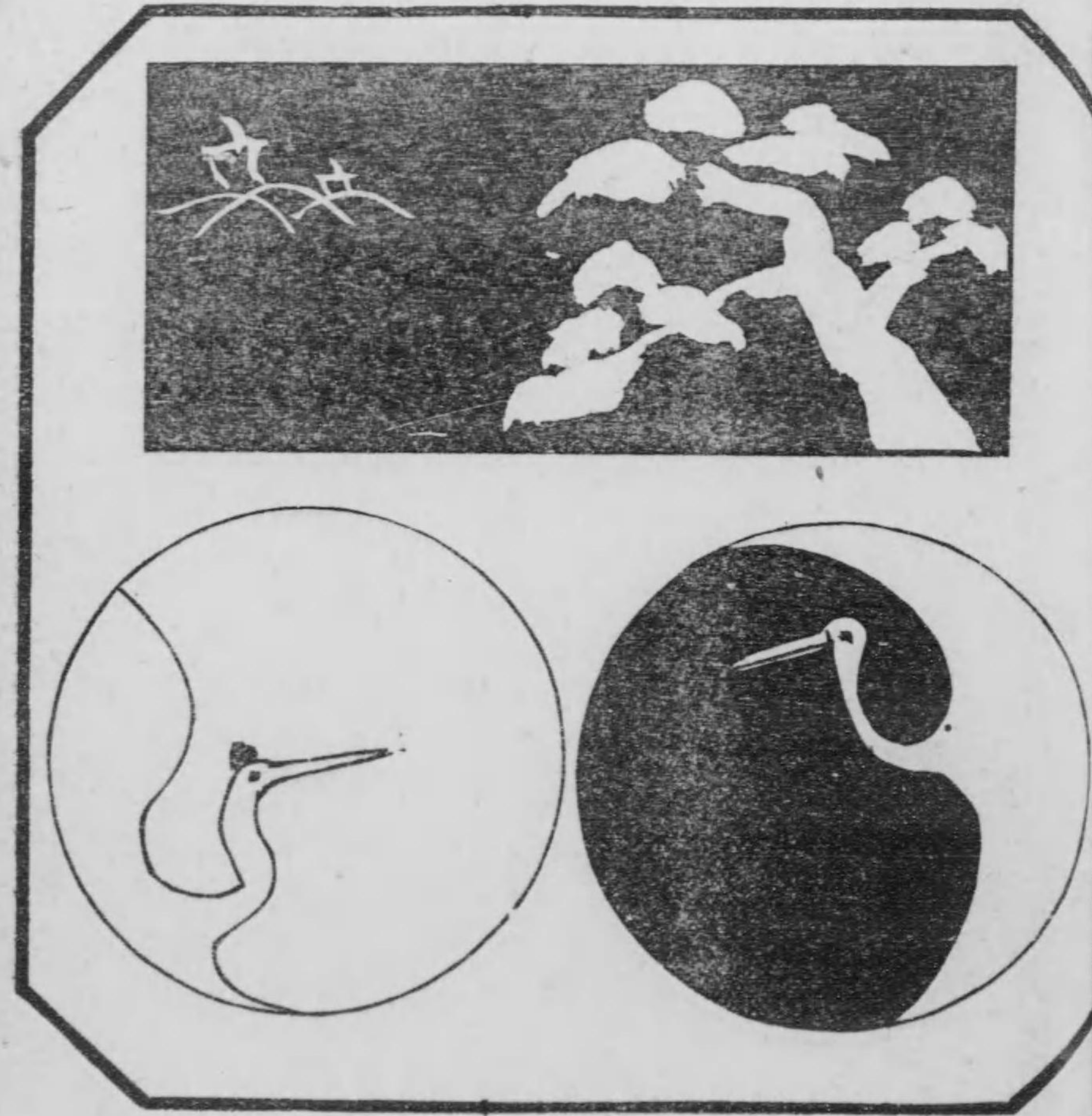
右 附

黄色に染めし煉切にて丸形に包みて其上に松の葉を青にて木をニツケ餡にて張りて指先きにて押してフルイに二度押して其の上に長鶴を白の煉切にて作りて其上置きとなしたる物なり。

左 附

白の牛皮を包みて圖の如き形を作りて其の上に青の羊羹にて竹の模様を大きく見へる様書きたるなり。

祝 事 用



向 附

富士山及び霞を小豆羹にて書きて日の出を煉切を紅と黄の混合色にて染めて丸く形取りて入れ上より八重成羹を流したるなり。

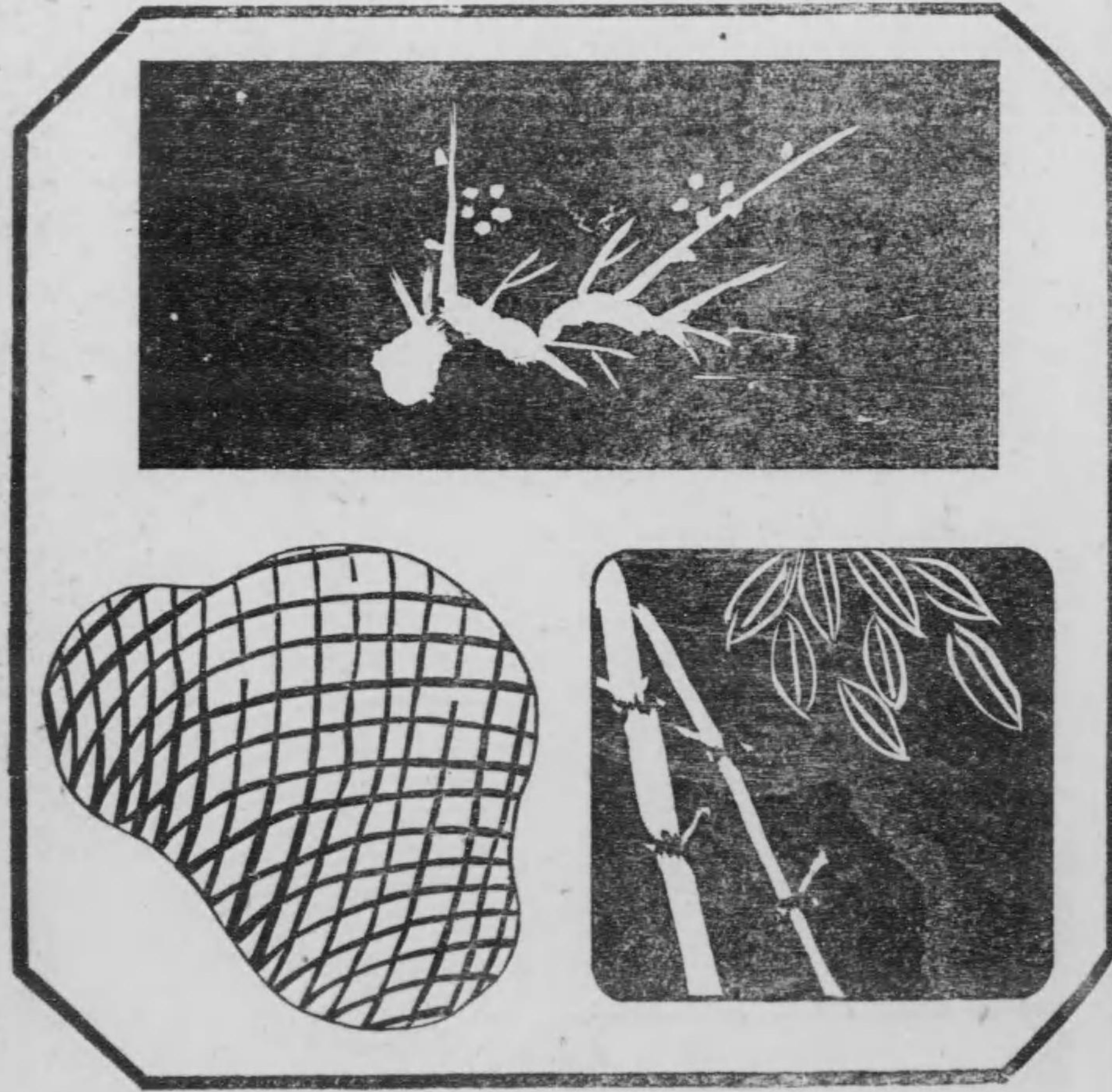
右 盛

紅の煉切を丸小判形に作りて其の上にて新松を二本筋にて附けたるなり。

左 附

小豆色の煉切を包みて下の所に白を張りボカシとして龜甲の形を作りて折鶴をへらにて筋を附けたる物なり。

祝 事 用



向 附

松及び舟浪を小豆羹にて書きて其の上に全部挽茶羹を流したる物なり。

右 盛

煉切を紅に染めて丸形に包みて鶴を白にて張りて指先にて平らに刷り込みて仕上たるなり。

左 盛

白の煉切にて丸形に包みて指先にて鶴の舞ふ形を押し出して高く浮きたる如く見せたる物なり。